岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第126集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(昭和62年度分)

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(昭和62年度分)

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

序

昭和62年度の発掘調査事業は、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、建設省・岩手県・市町村等からの委託をうけてバイパス建設・道路改良に関連する遺跡を中心にあわせて20遺跡、63,814m²の調査を実施してまいりました。

調査遺跡からは、縄文時代の集落跡や狩り場跡、奈良・平安時代の集落跡、室町時代から江戸時代の建物跡、墓跡など、各時代に及ぶ多数の遺構や遺物が発見されております。ことにも上村貝塚のヒスイの垂飾りと弥生時代の住居跡、夏本遺跡の鍛冶工房跡、皀角子久保VI遺跡の畑跡、打越遺跡・古館跡等の採掘坑など注目されるところであります。

発掘調査略報は、各遺跡の調査報告書刊行に先だち、これら20遺跡の調査結果の概要を収録したものであります。研究者のみならず、多くのかたがたに活用され、埋蔵文化財への御理解を一層深めていただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査事業をすすめるにあたり、御援助と御協力を賜わりました委託者をはじめ、地元教育委員会等関係各位に対し、心から感謝申しあげます。

昭和62年12月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　中　村　　直

目　　次

I　建設省関係

(1) 源　道　遺　跡（久慈市）……3

(2) 駒 焼 場 遺 跡（二戸市）……11

(3) 馬　場　遺　跡（二戸市）……19

(4) 伝 善 知 鳥 館 跡（紫波町）……27

　　南 日 詰 遺 跡（　〃　）

(5) 夏　本　遺　跡（大槌町）……35

II　岩手県関係

(1) 皀角子久保VI遺跡（軽米町）……45

(2) 米　沢　遺　跡（二戸市）……55

(3) 野 口 I 遺 跡（西根町）……63

(4) 下 岩 沢 I 遺 跡（和賀町）……69

(5) 石 田 II 遺 跡（水沢市）……77

　　寺　領　遺　跡（　〃　）

　　西 光 田 I 遺 跡（　〃　）

(6) 打　越　遺　跡（陸前高田市）……85

(7) 東 角 地 遺 跡（　〃　）……93

(8) 古　館　跡（　〃　）……103

(9) 赤　畑　遺　跡（宮古市）……111

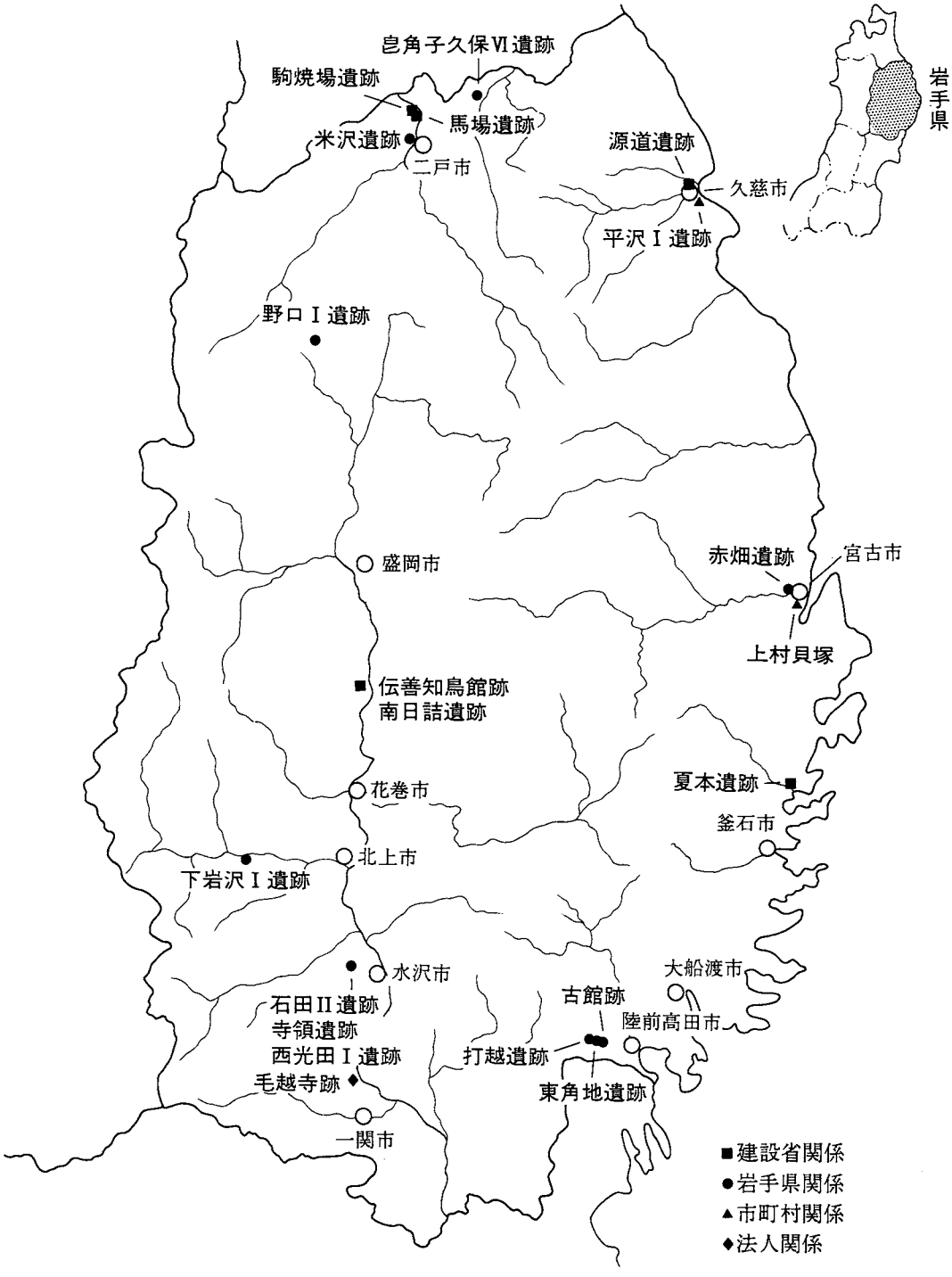
III　市町村関係

(1) 平 沢 I 遺 跡（久慈市）……117

(2) 上 村 貝 塚 遺 跡（宮古市）……125

IV　法人関係

(1) 毛　越　寺　跡（平泉町）……135



昭和62年度調査遺跡位置図

I　建設省関係

（1）源道（げんどう）遺跡

所在地	久慈市旭町第7地割149―5ほか
委託者	建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所
発掘調査期間	昭和62年7月1日～10月30日
調査対象面積	5,219㎡
発掘調査面積	5,219㎡
遺跡番号・略号	ＪＧ20―1131・ＧＤ―87
調査担当者	佐々木嘉直・酒井宗孝
協力機関	久慈市教育委員会

源道遺跡位置図

1．遺跡の立地

源道遺跡は、東日本旅客鉄道八戸線久慈駅の北北東約1.6km、夏井駅の南西約0.9km付近の丘陵上に位置している。この丘陵は、久慈川と夏井川の間に発達し、西から東に標高が低くなる。丘陵から南側に張出す枝尾根上には、狭い平坦面が残存し、標高15～40m付近は段丘状を呈し種市（二子）段丘面に区分される。本遺跡はこの地形面上に立地している。

遺跡は源道の集落のすぐ北側に位置し、調査区は地形上、A区（標高30～37mの丘陵斜面）、B区（標高28～30mの平坦面）、C区（標高20～27m尾根頂部）に3区分される。

2．調査の概要

調査区域は、東西45m、南北170mの範囲である。調査の結果発見された遺構は、竪穴住居跡25棟（奈良時代13、平安時代12）、土坑8基、陥し穴状遺構11基、焼土遺構3基、炭窯跡1基である。これらの遺構は、A～C区のすべての地形面で発見されている。

出土遺物は遺構内外とも土師器が多く、鉄製品、琥珀、剝片石器が少量出土している。

＜竪穴住居跡＞

古代の竪穴住居跡は、奈良時代13棟、平安時代12棟である。分布を地形別にみると、A区10棟、B区8棟、C区7棟であり、全体的に重複をさけるように分布しており、時代による占地の差はみられない。

奈良時代の住居跡は、平面形が正方形に近いもの3棟、長方形に近いもの3棟、不整形のもの2棟、不明のもの5棟である。規模は、長辺が3～4mのもの4棟、4～5mのもの3棟、6～7mのもの1棟である。

埋土は3層に大別されるものが多く、埋土中に火山灰（白頭山火山灰、十和田a降下火山灰）が入るものが9棟ある。

カマドは、北カマド7棟、北東カマド1棟、南カマド1棟、不明4棟であり、すべて壁中央に位置している。薄い板状の礫を使用しているものが多く、煙道は2棟で確認できただけである。また、カマド近くの床面中央付近に良く焼けた焼土のある住居跡が7棟ある。これらの住居跡では、カマド燃焼部内の焼土形成が弱いものが多く、奈良時代と平安時代では、カマドの構築方法や利用状況に違いがみられる。

出土遺物は全体的に少ないが、甕形土器、坏形土器、甑などが出土している。琥珀は2棟の住居跡のカマド近くの埋土から少量出土している。

平安時代の住居跡は、平面形が正方形に近いもの3棟、長方形に近いもの3棟、台形に近いもの1棟、不整形のもの2棟、不明のもの3棟である。規模は、長辺が2m前後のもの2棟、3～4mのもの1棟、4～5mのもの6棟である。

埋土は奈良時代と同じく３層に大別されるものが多いが、火山灰は入らない。

カマドは、北カマド３棟、北東カマド１棟、東カマド１棟、南カマド４棟、西カマド？１棟、不明１棟の他に、３つのカマド（北、東、南）をもつものが１棟ある。奈良時代に比べると、北カマドが減少し、南カマドが多くなっている。カマドに大きい河原石を使用しているものが多く、煙道は９棟で確認されている。

出土遺物は全体的に少ないが、坏形土器、甕形土器が出土している。琥珀はＪ24住居跡のカマド付近の埋土から少量出土している。

＜土　坑＞

土坑は、Ａ区で６基、Ｂ区で２基発見されている。平面形は、円形３基、楕円形３基、隅丸方形２基である。規模は、開口部の直径が１～２ｍのもの６基、２ｍ以上のもの２基、深さは0.5m未満のもの２基、0.5～１ｍのもの６基である。出土遺物はないが、住居跡床面から発見されているものが多いことや埋土の特徴から、奈良時代のものと思われるものが多い。

＜陥し穴状遺構＞

陥し穴状遺構は、Ａ区で６基、Ｂ区で１基、Ｃ区で４基発見されている。形状はすべて溝状のものであり、長さは2.7～3.9m、深さは0.8～1.4mである。２基～４基対に並ぶものが多い。出土遺物はないが、縄文時代の遺構と考えられる。

＜焼土遺構＞

３基発見されているが、焼土形成範囲は不整形である。検出状況などから平安時代の遺構と考えられる。

＜出土遺物＞

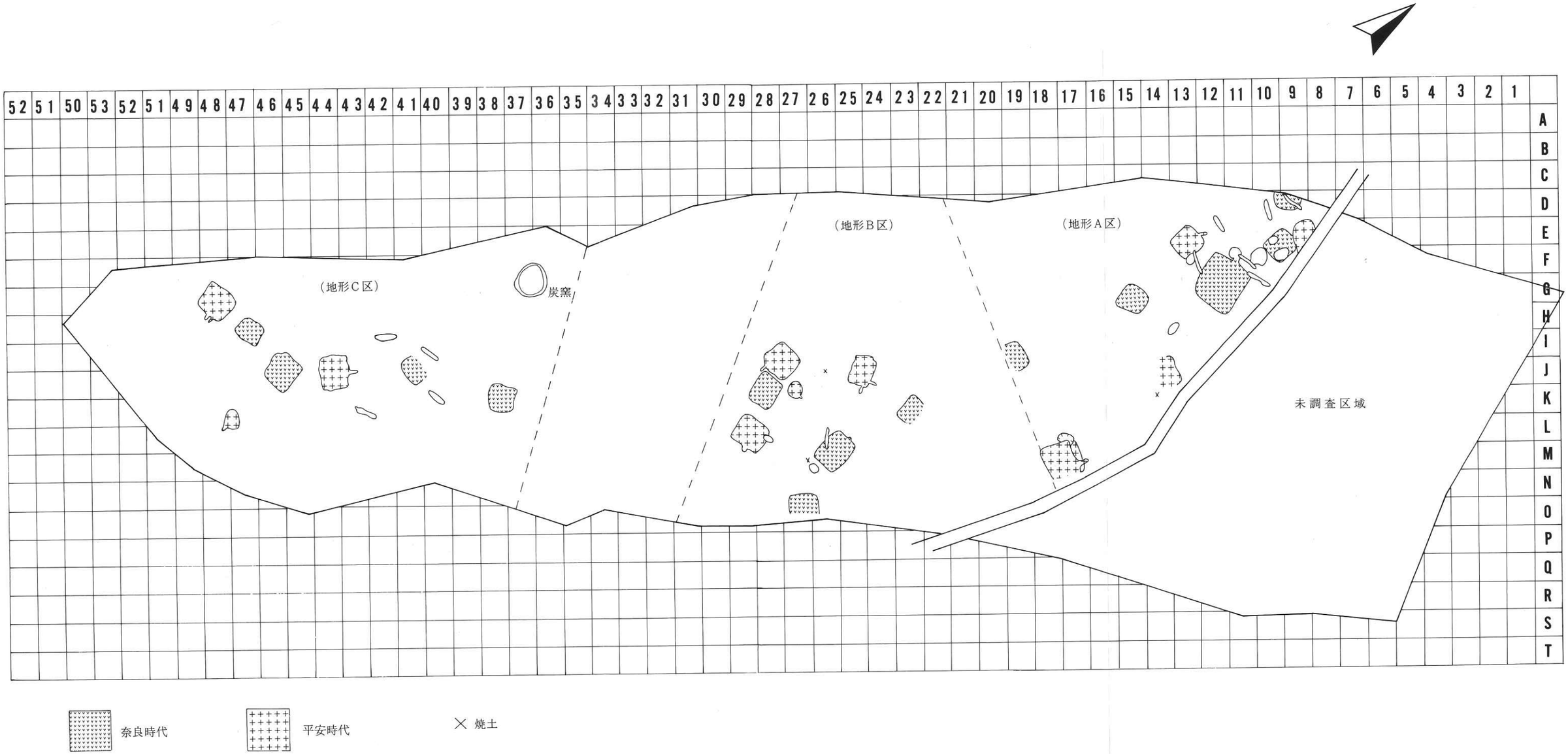
遺物の主体は土師器である。器種は坏形土器と甕形土器が多く、甑は３点ほど出土している。その他に住居跡から、鉄器、石器（砥石）、琥珀の原石が出土している。

縄文時代の遺物は極めて少ない。遺構外から石鏃、石匙、磨石が合計10点出土している。

３．ま　と　め

本遺跡は、奈良時代～平安時代の集落遺跡であることが判明した。周辺には住居跡の可能性がある窪地があることから、遺跡はさらに高位面に広がると考えられる。また、縄文時代と思われる陥し穴状遺構が発見されており、狩り場であったことも判明した。

出土遺物は多くはないが、ロクロ使用の坏のセットがあり、好資料が得られた。

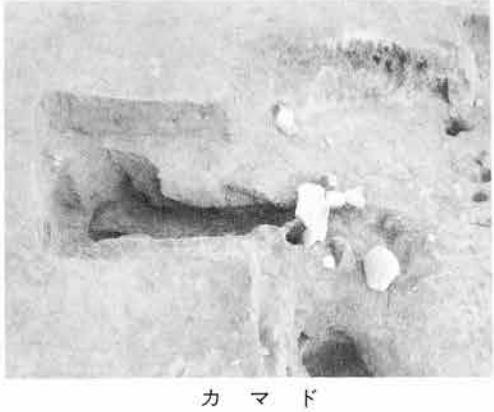

52 51 50 53 52 51 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T
（地形Ｃ区）
炭窯
（地形Ｂ区）
（地形Ａ区）
未調査区域
奈良時代
平安時代
× 焼土
0
20
40m

源道遺跡遺構配置図

遺 跡 全 景（南から）

平安時代の住居跡

平安時代の住居跡



カ マ ド

カ マ ド

源道遺跡　遺構

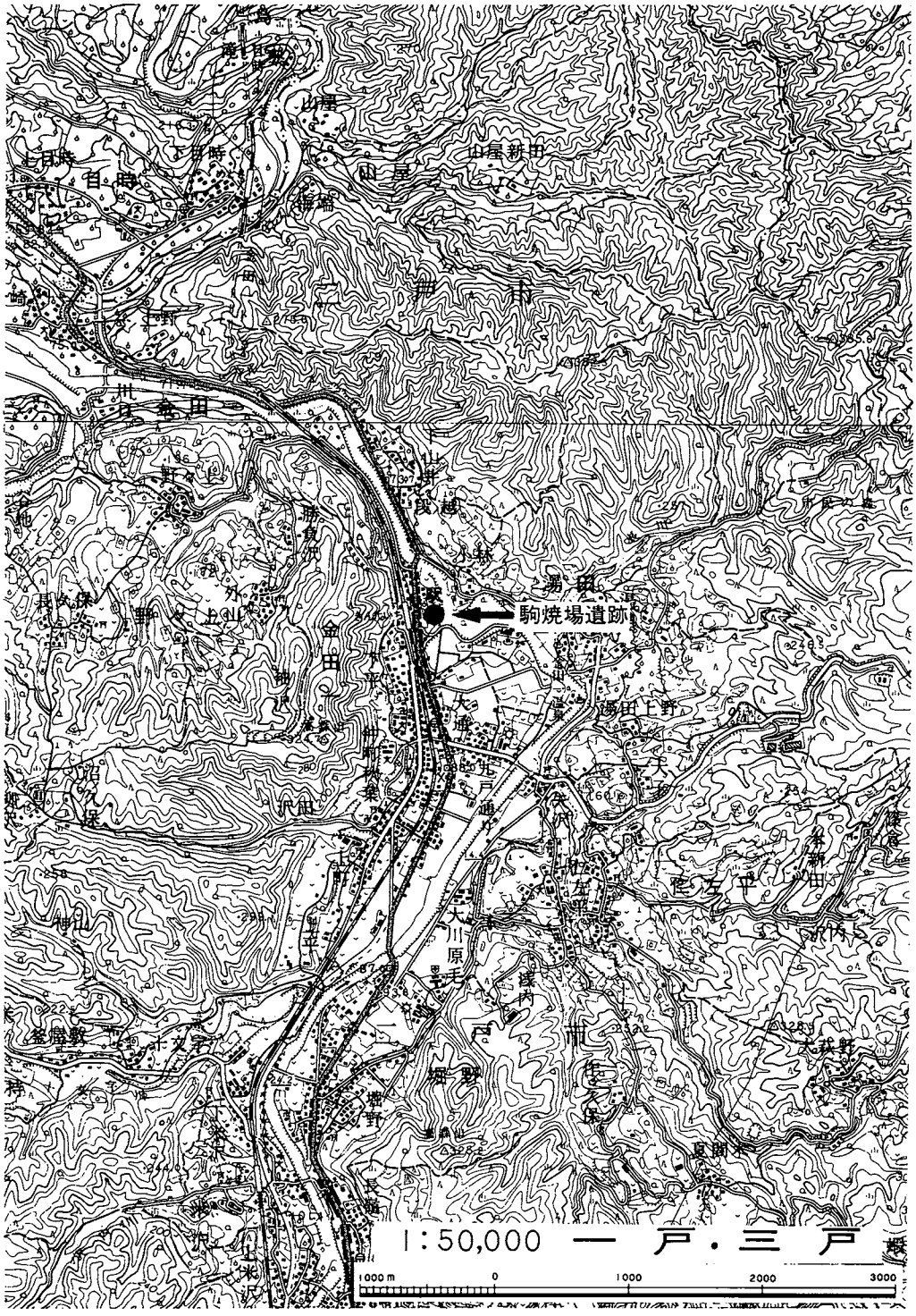
奈良時代の土師器

平安時代の土師器

源道遺跡　出土遺物

(2) 駒焼場遺跡

所在地	二戸市金田一字駒焼場12－2ほか
委託者	建設省東北地方建設局岩手工事事務所
発掘調査期間	昭和62年4月10日～6月30日
調査対象面積	1,100㎡
発掘調査面積	1,100㎡
遺跡番号・略号	ＩＦ80－0024・ＫＹ－87
調査担当者	光井文行・中村良一・佐藤嘉広
協力機関	二戸市教育委員会



駒焼場遺跡位置図

1．遺跡の立地

駒焼場遺跡は東日本旅客鉄道東北本線金田一温泉駅の東約200 mに位置し、馬淵川左岸の堀野段丘相当の沖積段丘縁辺部に立地している。標高81～83 m、馬淵川との比高は12～14 mである。遺跡の現況は宅地、畑地、保育園跡地である。馬淵川と段丘崖の間には小規模な水田が作られている。当遺跡は昭和57年に発掘調査した府金橋遺跡と連続する南側にあたる。

2．調査の概要

発掘調査は、国道4号金田一バイパスの建設に伴い、昨年度に引き続き、記録保存を目的に実施した緊急発掘調査である。

検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡状遺構3棟、古代の竪穴住居跡26棟(奈良時代4、平安時代22)、大溝跡2条、溝跡4条、方形周溝跡2基、縄文時代～古代の土坑52基である。遺物は土師器、須恵器、鞴の羽口、土製・鉄製の紡錘車、鉄鏃、雁股、刀子、鎌、穂摘み用鉄製品、鉄滓、砥石、磨石、石鏃、縄文後期～晩期の土器片少量である。

＜竪穴住居跡＞

奈良時代の竪穴住居跡は、4棟とも平安時代の竪穴住居跡や他の遺構に切られている。カマドは北西壁中央部に付設されているもの2棟、不明2棟である。形状は隅丸方形、規模は一辺が3 m―1棟、4 m―2棟、5 m―1棟である。柱穴は4本である。床は掘り方をもち、床面は平坦でしまっている。埋土には十和田a降下火山灰が皿状に堆積している。2棟は焼失住居跡である。平安時代の竪穴住居跡22棟のうち、他の遺構と切り合い関係にないものは3棟のみで他は住居跡、土坑、溝跡など複数の遺構と重複している。カマドは壁中央部よりどちらかに寄せて設けられており、その位置は北東壁3、南東壁9、南西壁3、不明7である。住居跡の平面形は多い順に台形、長方形、正方形である。規模は一辺が4～5 mのものが中心で、6 m以上のものは3棟である。南西壁カマドの住居跡が南東壁カマドの住居跡を切っているものが2例ある。カマドの支脚には土師器の甕を倒立させているもの2棟、礫を利用しているもの1棟が検出されている。住居跡の一部には円形・方形・長方形の貯蔵穴をもつものがある。また、南東壁のカマドの横に階段状の出入口施設をもつ住居跡が1棟検出されている。カマドと出入口の位置関係を考える上で貴重な遺構である。カマド側の壁を拡幅して新たにカマド、貯蔵穴を構築しているのが1例ある。住居跡の半数以上は焼失住居跡である。

＜土　坑＞

平面形は円形、方形、長方形のものがある。円形で大きく深いものは径1.7 m、深さ1 m以上あり貯蔵穴と思われる。底面の周囲に多数の小穴をもつ。火山灰の混じり方や出土遺物から平安時代のものと思われる。方形の土坑は一辺が1.5 m前後で深さ約50 cmである。埋土中に十和

田a降下火山灰が粒状に混じることや他の遺跡の例などから平安時代の小屋跡と思われる。細長い長方形状の土坑は、底面が幾分舟底状をなしている。平安時代の大溝跡を切っているものと切られているものとがある。

＜大溝跡＞

昨年度検出された5条のうち北側の2条の西半分を検出したものである。4m前後の間をおいて東西に走り、東側で南に湾曲している。2条とも埋土の大半は人為的に埋め戻されたと思われる砂で占められている。北側の大溝跡は幅2.4～2.8m、深さ1～1.2m、断面が逆台形、もう1つの大溝跡は幅4～5.3m、深さ1.9～2.2m、断面がV字形をなす。2条の大溝跡は埋土、出土遺物などから同時期である可能性が強い。平安時代後期と思われる。

＜方形周溝跡＞

東側で切り合っている方形周溝跡が2基検出されている。ともに大溝跡に切られ、埋土中には十和田a降下火山灰がブロックで混じる。北側のものが南側より古い。前者は外径8m、溝幅40cm、深さ50cm前後、後者は外径7m前後、溝幅60～70cm、深さ55cm前後である。平安時代のものである。

＜出土遺物＞

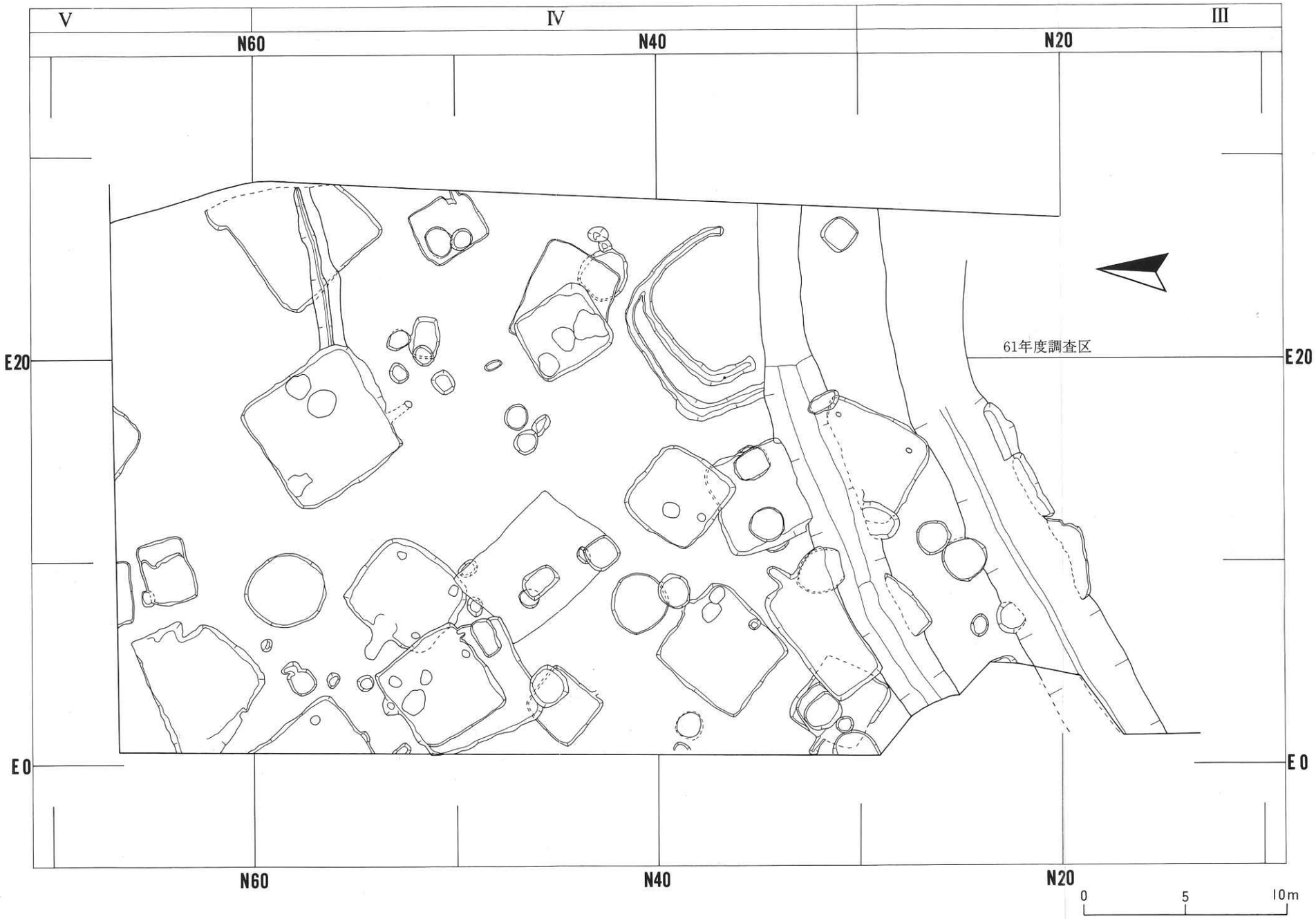
縄文時代―縄文後期前葉や晩期の土器片少量、石鏃2点、石器などが遺構内外から出土する。

奈良時代―土師器、土製の紡錘車、三角形状の扁平な砥石、磨石などである。土器は遺構内外、その他の遺物は住居跡、土坑から主に出土する。土器の器種は甕・坏である。

平安時代―土師器が中心である。器種は甕が主体、坏は少量である。珍しいものとして把手付土器の把手が住居跡カマド内と大溝跡埋土から1点ずつ出土している。甕はロクロ不使用の甕が圧倒的に多い。口縁部が短く外反している。体部外面調整はヘラケズリである。鎌、鉄製の紡錘車、鞴の羽口、刀子、砥石などが住居跡、鉄鏃、雁股、砥石が大溝跡から出土している。炭化した米、豆類、穀類、動物・魚類の骨片などが焼失住居跡やカマド内から見つかっている。

3．ま　と　め

昨年度のものも合わせると古代の住居跡は46棟(奈良時代6、平安時代40)である。住居跡、大溝跡は更に西に広がっており、本遺跡は平安時代を中心にした大規模な遺跡であることが判明した。平安時代については、今回の調査によって住居跡との切り合い関係から4時期以上の変遷があることがわかった。また、遺跡内のカマドの位置の変遷の傾向も把握できたことは、昨年度調査した大溝跡、住居跡の時期区分を考える上で重要である。今後、遺構、遺物を整理、検討していくことにより、住居跡と大溝跡、土坑との関連や大溝跡・遺跡の性格について明らかになると思われる。平安時代後期の人々の生活を知る上で、重要な資料を得ることができた。



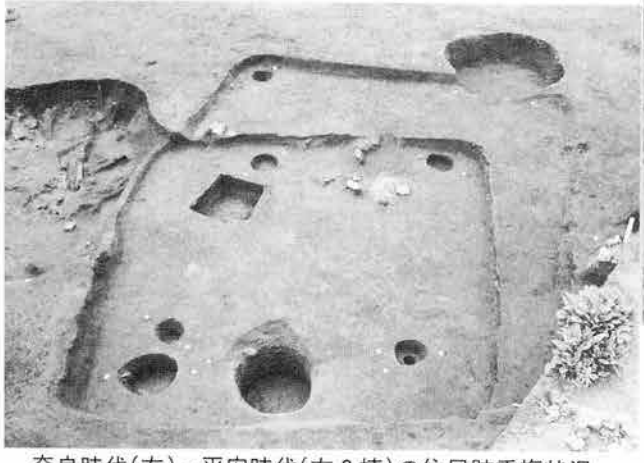
駒焼場遺跡遺構配置図

奈良・平安時代の住居跡・土坑・方形周溝跡

平安時代の大溝跡埋土断面

奈良時代の住居跡炭化材出土状況

平安時代の大溝跡



奈良時代(左)・平安時代(右2棟)の住居跡重複状況

駒焼場遺跡　遺構

奈良時代

紡錘車(土製)

砥　石

平安時代

鉄　鏃　　雁　股

鎌

砥　石

紡錘車

鉄製品

駒焼場遺跡　出土遺物

（3）馬場（ばば）遺跡

所在地	二戸市金田一字馬場50―3ほか
委託者	建設省東北地方建設局岩手工事事務所
発掘調査期間	昭和62年6月1日～9月19日
調査対象面積	6,000m²
発掘調査面積	6,000m²
遺跡番号・略号	ＩＦ80―0086・ＢＢ―87
調査担当者	工藤利幸・光井文行
協力機関	二戸市教育委員会

馬場遺跡位置図

1．遺跡の立地

馬場遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線金田一温泉駅の南東約0.6kmの河岸段丘上に位置している。遺跡をのせる段丘は、遺跡の東～北側を流れる馬淵川によって、その左岸に形成された沖積世段丘であり、調査区域の標高は83～85m、馬淵川との比高は13～15mほどである。

段丘の縁辺、特に北西～北東側には良好な湧水が多く存在し、以下に説明する住居跡や土坑が北北西側に偏って検出されたことはこれらの湧水と大きく関係していたものと考えられる。

2．調査の概要

本年度の調査区域は、北北西～南南東方向が約230m、東北東～西南西約30mで段丘縁から同中ほどに細長く伸びている。調査区域の堆積物は、基盤岩の上に３～４mの礫層、砂層が互層をなし、その上に70cmの南部浮石が堆積し、さらに浮石質黒褐色～暗褐色土、中掫浮石層、十和田ｂ浮石を混じえた黒色土、表土（耕作土）が堆積しており、基本的な堆積物の種類は馬淵川流域の各遺跡と同様である。なお、十和田ａ火山灰は古代の竪穴住居跡の埋土として堆積している。

発見された遺構は、古代の竪穴住居跡14棟、中世の竪穴住居跡１棟、縄文時代・古代・時期不明の土坑13基、陥し穴状遺構２基である。古代の住居跡と土坑のほとんどは、北西側段丘縁に近い区域の段丘縁から約120mまでで、南東側半分の区域では何らの遺構も検出されていない。また、古代の住居跡14棟のうち４棟は半分以上が調査区外にあり、全体形状・規模・カマドの位置が不明である。

＜竪穴住居跡＞

古代（奈良・平安時代）の住居跡14棟は、その平面形が方形を基調とした隅円方形のものがほとんどで、北西側の壁のほぼ中央にカマドを造りつけているが、３棟についてはその位置が不明である。また出土遺物の種類、埋土の状態から奈良時代に属すると考えられるもの11棟、平安時代と考えられるもの３棟である。規模は、１辺が2.5～３mほどのもの、４～５m前後のもの、６m前後のもの、とに区別される規模の大きなものほど隅円の度合いが小さい。埋土は、自然堆積層、人為堆積層が見られ、それらの層中には投げこまれた土器・石製品が多量に含まれる。また、住居跡の一部では、土器・土製品・鉄器などが置き去りにされたものや住居の焼失によって生じた炭化材や焼土層、あるいは十和田ａ火山灰層が堆積するものなどが見られる。柱配置は、床面で検出した柱穴の配置から４～６本が基本となり、それらの並びに小柱穴数本を伴うものも見られる。しかし柱穴の不明なものが大部分を占める。カマドは、袖部に基本土層を一部残したままの半造りだしのものが見られ、煙道部は掘りこみ式と刳り貫き式とがある。燃焼部や煙道部の焼土、あるいは焚口周辺には、獣骨のものと思われる骨粉が包含あるいは散

在している。

中世の竪穴住居跡は、出入口部と考えられる張り出し部をもつもので、焼失した状態で検出した。一部が調査区外にあるため全体形・規模は不明である。焼失材の形状使用部位は不明であるが、圧砕された曲物破片とその周辺からは炭化した大豆、ヒエなどが出土している。出土遺物は、大豆・ヒエ等の他に、鉄釘・鉄片などが出土しているが、遺構の時期を推定できるような陶器等は出土していない。

＜土　坑＞

陥し穴状遺構を除いた土坑は、計13基検出している。縄文時代の墓坑・貯蔵穴と考えられるもの２基、古代の隅円方形・小判形土坑６基、時代・時期が不明のもの５基である。古代の隅円方形のものは、炭火材や焼土を伴うもの、また土師器の甕形土器を伴うものなどがある。

＜陥し穴状遺構＞

あまり長くないが、深く溝のような形をしているもので、動物を捕獲するためのワナの一種と考えられるもの。

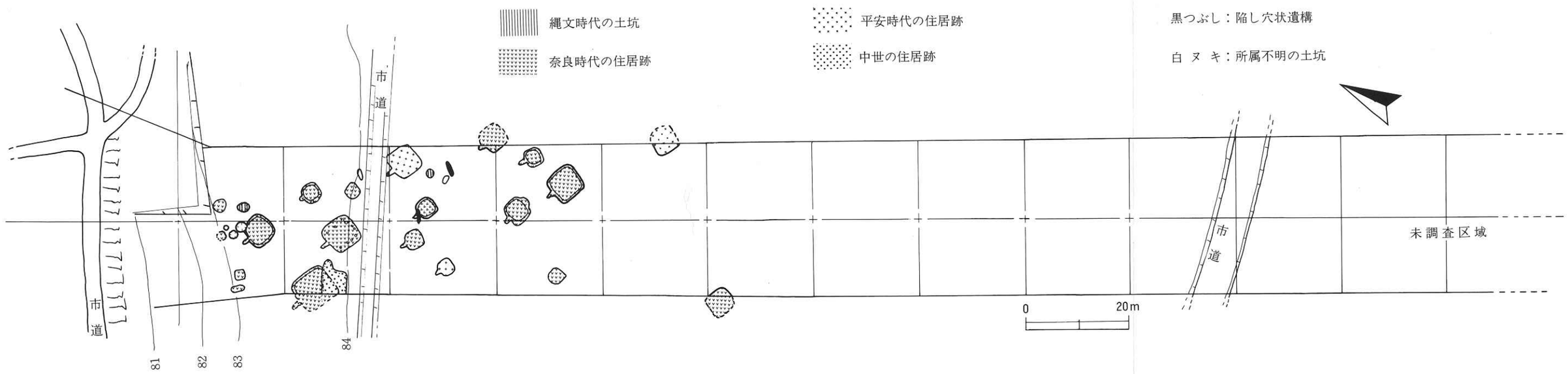
＜出土遺物＞

縄文時代の遺物は、後期・晩期に属するもので出土量は少ない。種類としては、土坑底部から出土した深鉢形土器以外の土器は古代住居跡の埋土や遺構外からの出土で細片である。石器・石製品は、石鏃・磨製石斧・礫石器数種であるが、ほとんどが遺構外からの出土である。

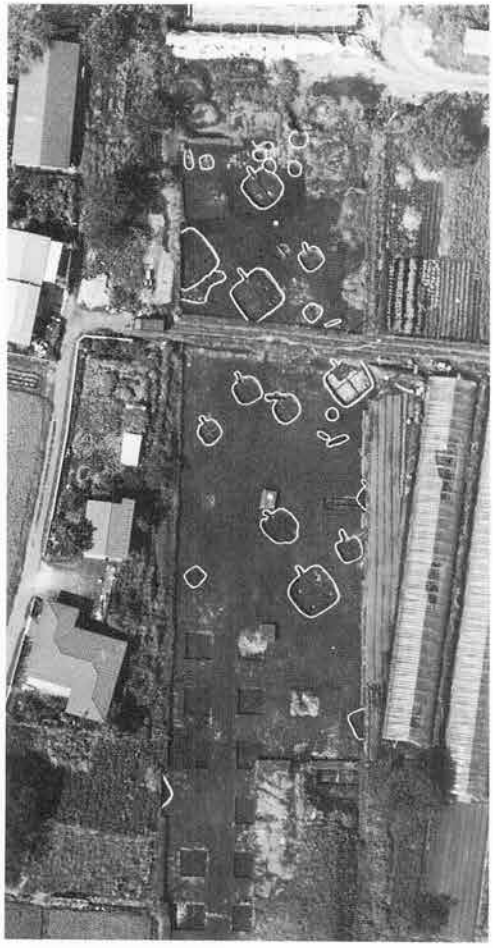
奈良時代の土器は、遺構内への置き去り、投げすてのものが大半を占め、遺構外出土は少ない。遺構内出土のものは復元可能なものが多量に存在する。器種としては、土師器の甕形・壺形・鉢形・坏形・高坏形・甑（こしき）などが見られるが、甕形土器が最も多い。須恵器は見られない。その他、土製・石製の紡錘車や刀子・鉄鏃の破片・鋤先・磨石・凹石・砥石が住居跡内から出土している。平安時代の遺物は出土量が少ないが、土師器の坏形、甕形の土器が出土している。坏形土器にはロクロ使用と不使用とが見られる。須恵器は見られない。

３．ま　と　め

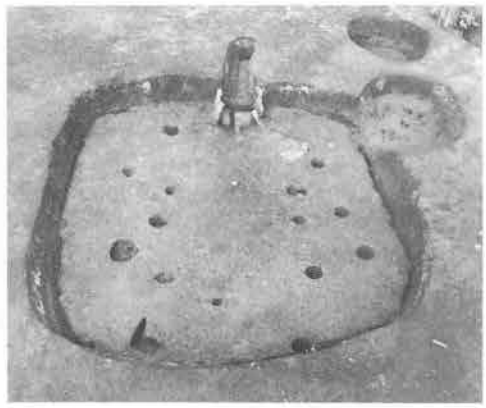
馬場遺跡は、段丘縁に沿った幅120m前後、長さ300mほどの範囲を中心とした遺跡であり、今回はその一部を調査したにすぎない。今回の調査区域からは奈良・平安時代の住居跡を中心とし、縄文・奈良・平安・その他の時代の土坑を検出している。縄文時代の住居跡は確認できなかったものの、貯蔵穴・墓坑と考えられる土坑が存在することから周辺の未調査分に存在する可能性が高い。また、古代の住居跡からは数種の礫石器、台石が出土しており、それらが古代の人々とどのような関係があったのか、整理の中で検討して行きたい。


縄文時代の土坑
奈良時代の住居跡
平安時代の住居跡
中世の住居跡
黒つぶし：陥し穴状遺構
白 ヌ キ：所属不明の土坑
市道
市道
市道
未調査区域
0
20m
81
82
83
84

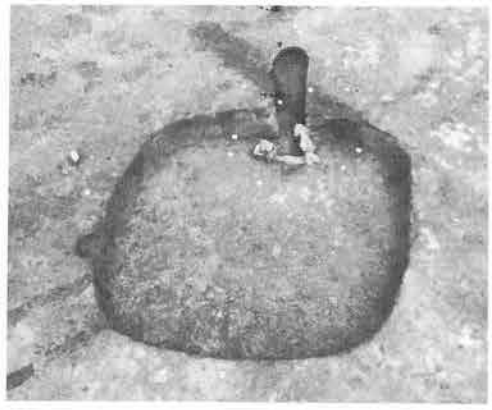
馬場遺跡遺構配置図



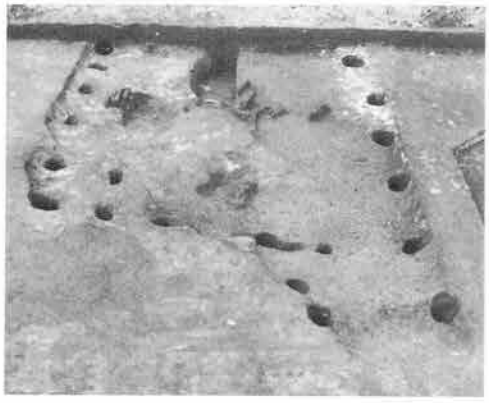
遺構分布状態



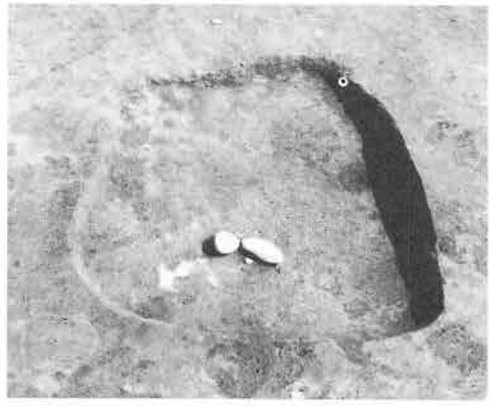
奈良時代の住居跡



奈良時代の住居跡
（縄文時代の陥し穴状
遺構を破壊している）



中世の住居跡



奈良時代の土坑

馬場遺跡　遺構

1

2

3

4

5

6

7

8

11

9

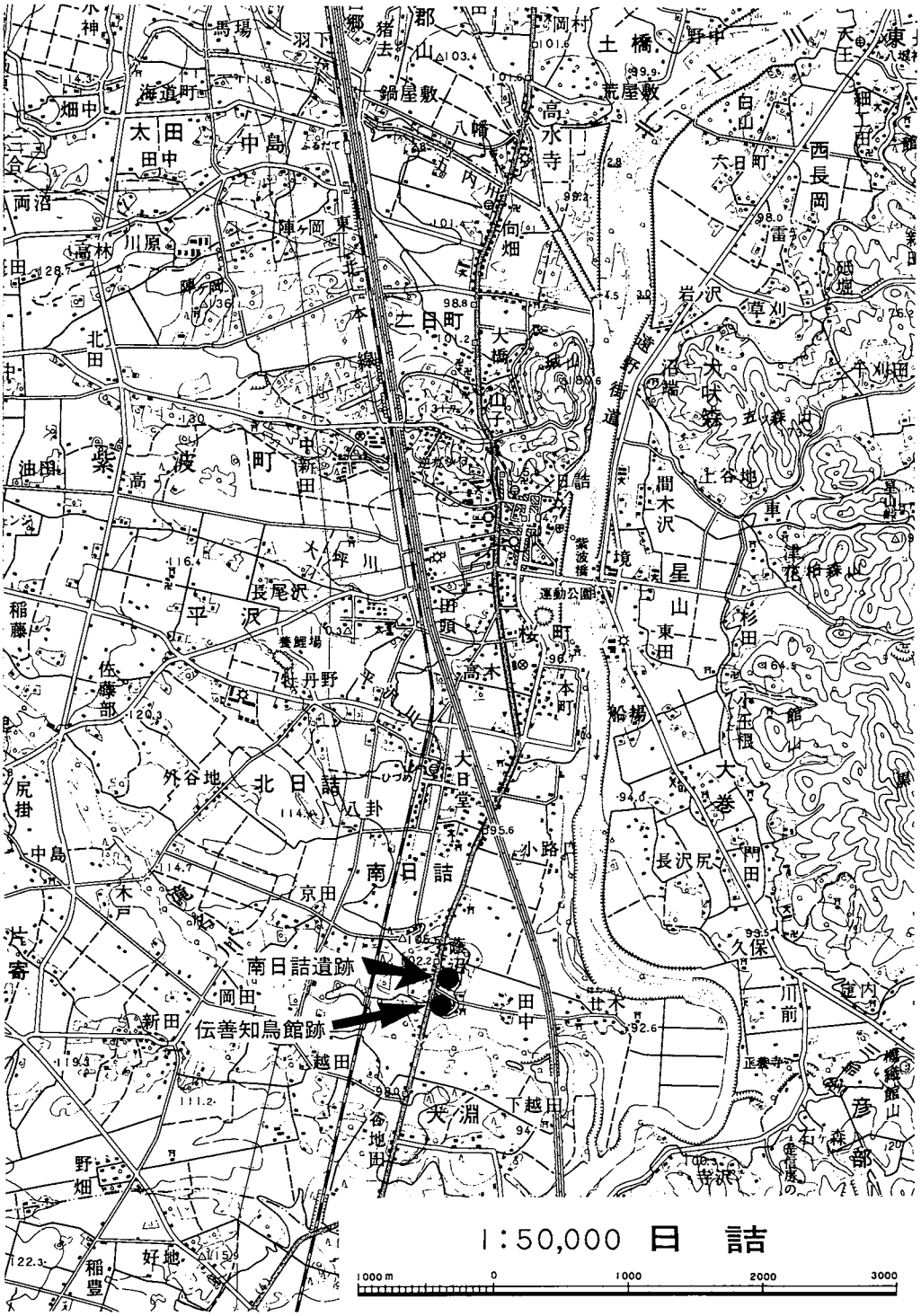
10　石製品

1～10は各種土器と紡錘車
9の底面には、性格不明の線刻がある
写真11は、鉄製鋤先と土器の出土状態
（奈良時代後半？）

馬場遺跡　出土遺物

（4）伝善知鳥館跡（でんうとうたてあと）
南日詰遺跡（みなみひづめ）

所在地	紫波郡紫波町南日詰字滝名川14—27ほか
委託者	建設省東北地方建設局岩手工事事務所
発掘調査期間	昭和62年5月1日～6月30日
調査対象面積 および 発掘調査面積	伝善知鳥館跡500m² 南日詰遺跡1,900m²
遺跡番号・略号	伝善知鳥館跡　ＬＥ77—2016・ＤＵ—87 南日詰遺跡　ＬＥ77—1086・ＭＨ—87
調査担当者	田村壮一・佐々木嘉直
協力機関	紫波町教育委員会



伝善知鳥館跡・南日詰遺跡位置図

1．遺跡の立地

両遺跡は東日本旅客鉄道東北本線日詰駅の南1.5kmに位置し、国道４号線沿いにある。南側が伝善知鳥館跡、北側に南日詰遺跡が隣接している。北上川右岸に形成された台地上に立地し、南方350mには滝名川が東流している。この台地は中位段丘（二枚橋段丘）に相当し、標高102～103m、東や南方に広がる河岸低地との比高は７mである。現状は宅地、畑地等である。

2．調査の概要

今年度の調査は遺跡を縦断する国道の主として東側にあたる幅10～12m、長さ265mの細長い範囲である。遺跡の北側は来年度調査する予定である。

伝善知鳥館跡にかかる区域では削平地と盛り土が大部分で遺構は検出されなかった。南日詰遺跡で検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡４棟、陥し穴状遺構12基、土坑１基、時期不明の溝跡８条、大溝１条、土坑３基である。

＜竪穴住居跡＞

縄文時代の住居跡は４棟が南側区域に集中している。表土除去後、すぐ床面という状況であったため、壁は確認できなかったが、あるいは平地式住居の可能性もある。炉を中心にして、主柱穴が長方形や六角形に配置され、その規模は長軸長3.7～5.6m、短軸長1.8～３mである。平面形は不明である。長軸方向はまちまちである。柱穴は径30cm、深さ50～60cmのものが多い。３棟は石囲炉をもち、他の１棟は土器埋設炉である。石囲炉は礫を楕円形に埋め込んでつくられ、長径60～80cmと比較的小さい。うち１基は炉の内壁と底面に大型深鉢の一個体の破片を敷きつめてある。もう１基では炉の中央に土器底部を埋設している。炉の位置をもとにして、それをとり囲む形で４棟としたが、方向の異なる柱穴もあり他の住居跡の重複も考えられる。住居跡の時期は埋設されていた一括土器や検出面上の出土遺物により、縄文時代中期前半（大木７ｂ式）である。

＜陥し穴状遺構＞

細長く深い溝形のものである。７基は住居跡と同様の南側区域にあり、他の５基は北側区域で離れて散在する。規模は長軸長2.7～4.1m、深さ75～130cmとバラつきが見られるものの、最も多いのは3.2m前後のものである。２基が並列するものと単独のものがある。住居跡に重複しているが、住居跡より上位で検出されていることから、後続する時期と考えられる。埋土からは中期の土器を出土したものがある。

＜土　坑＞

縄文時代と推定されるもの１基、時期が不明のもの３基である。前者は径80cm、深さ50cmの規模をもつビーカー形で、埋土がかたくしまっていた。他の３基のうち２基は埋土より近世以

降の陶磁器や鉄釘が出土しており、ごく新しいものである。北側区域の１基は径2.5mの半円形に検出し、調査区外に続いている。性格や時期は不明である。

＜溝　跡＞

８条の溝跡は検出が下位になってからのものが多く、底部のみ浅く残った部分もある。幅は70～80cmで、深さ５～40cmを測り、断面形は逆台形を呈している。国道と平行し、南北方向に長くのび東西に屈曲しているものが４条、東西方向のみ確認されたもの４条である。底面や壁に凹凸があり、部分的に細くなることから、地区割の溝とか水路、道路の側溝、柵列等と推定される。ただ底面に水の流れた形跡はない。埋土より陶磁器数点出土している溝もあるが、時期の特定はできない。

＜大溝跡＞

大溝跡は調査区北端の東隅で検出された。幅4.7m、深さ1.3mで調査区外に続き、東方向にのびている。前述の溝跡のうち３条が屈曲してこの大溝に連結している。規模や埋土から空堀の可能性もある。

＜その他＞

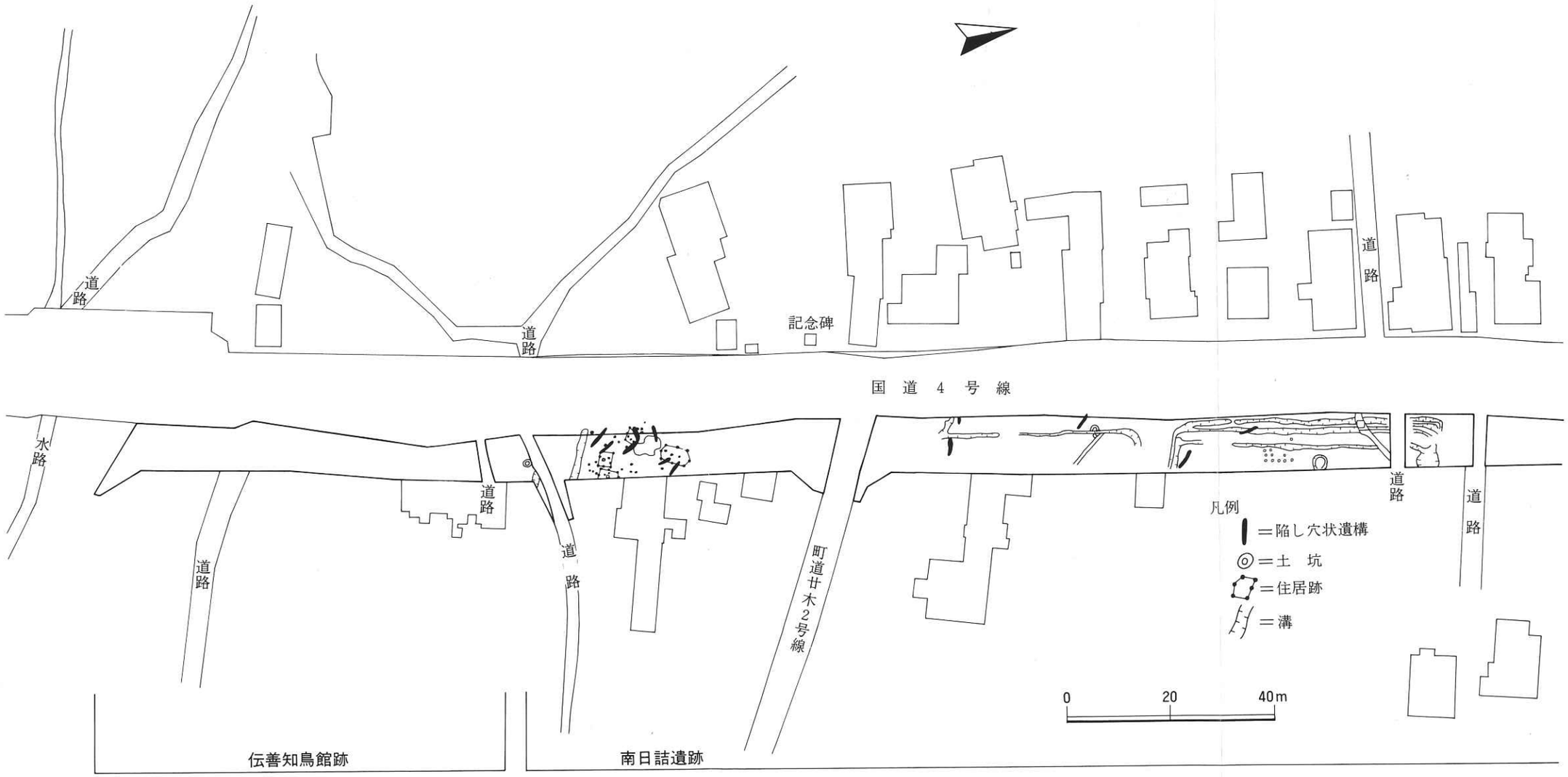
南側区域には戦前の土取穴もしくはゴミ穴と思われる土坑があり、埋土より多量の陶磁器片やガラスが出土している。また北側区域には１号溝の東側に小穴が並ぶ箇所がある。５cm程度の深さしかなく、不整な形で底面にも凹凸があり、柱穴のようではない。柱穴とみると桁行４間、梁行２間の小屋程度の建物跡となる。

＜出土遺物＞

縄文時代中期の土器や石器、平安時代の須恵器、近世以降の陶磁器などの他、若干の古銭・鉄釘などである。縄文土器は主に大木７ｂ式で約2,500点、石器は石匙や石篦、スクレーパーなど20点である。須恵器の６点や陶磁器類は溝跡からのものを除けば、ほとんどが遺構外からの出土である。

３．ま　と　め

調査の結果、伝善知鳥館跡では遺構が確認されず、主として南日詰遺跡において遺構、遺物が発見された。南日詰遺跡の南端は縄文時代中期の集落の一部であったことが明らかになった。また北側を中心に検出された溝跡は時期や用途は不明だが、道路や館跡に関連する遺構の可能性がある。



伝善知鳥館跡・南日詰遺跡遺構配置図

縄文時代の住居跡

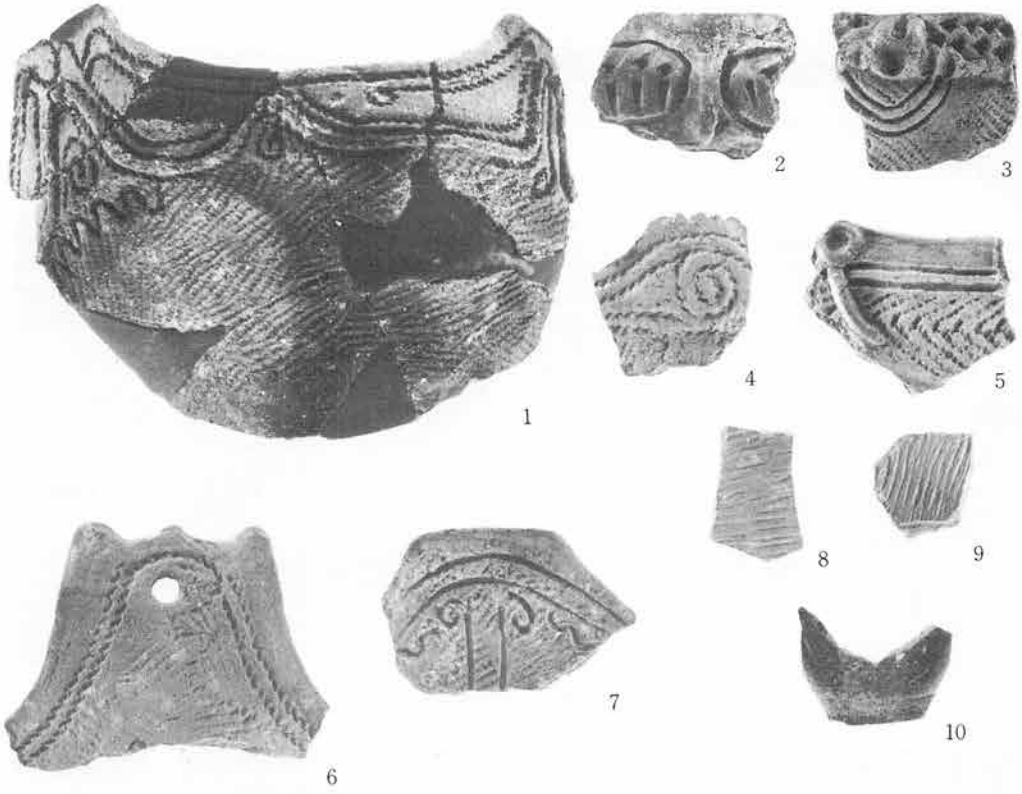
石　囲　炉

石　囲　炉

縄文時代の住居跡

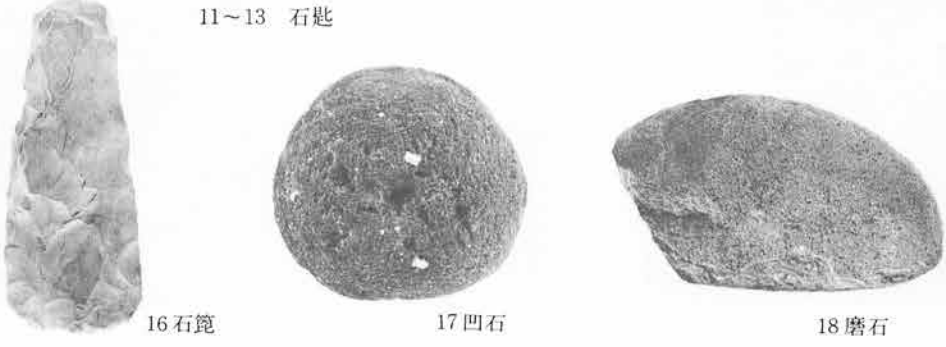
溝　　跡

南日詰遺跡　遺構



1～7　縄文土器　　8・9　須恵器(平安時代)　　10　陶器(近世)

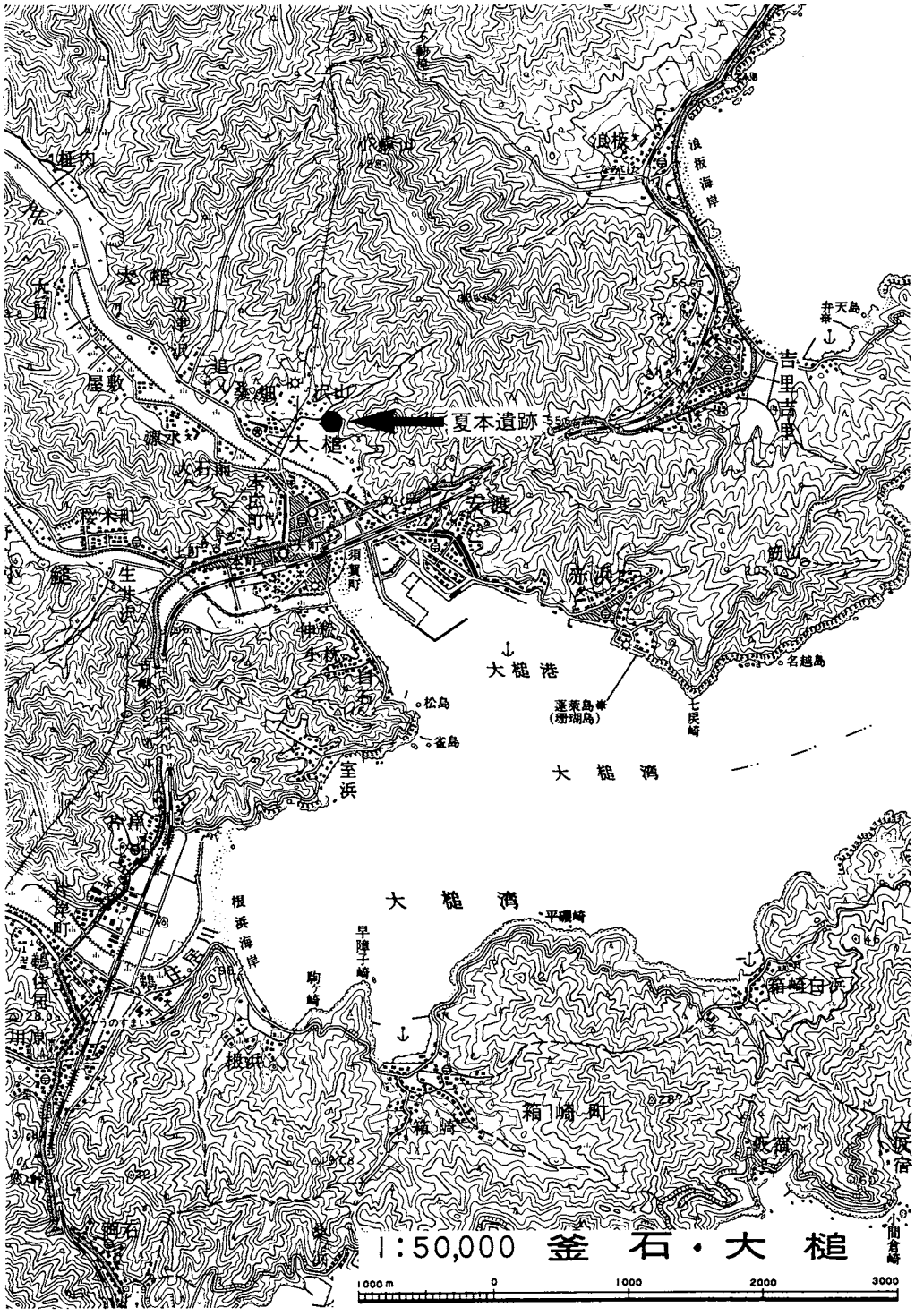
11～13　石匙



南日詰遺跡　出土遺物

（5）夏本（なつもと）遺跡

所在地	上閉伊郡大槌町大槌第24地割字夏本48ほか
委託者	建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所
発掘調査期間	昭和62年4月7日～6月30日
調査対象面積	5,300㎡
発掘調査面積	5,300㎡
遺跡番号・略号	MG53—1008・NM—87
調査担当者	高橋与右エ門・酒井宗孝
協力機関	大槌町教育委員会


夏本遺跡
大槌
大槌港
大槌湾
釜石・大槌
1:50,000
1000m
0
1000
2000
3000
浪板
浪板海岸
吉里吉里
天島
屋敷
追分
沢山
安渡
赤浜
名越島
七戸崎
蓬莱島
(珊瑚島)
松島
雀島
室浜
根浜海岸
早障子崎
駒ヶ崎
根浜
箱崎
箱崎町
箱崎日浜
平磯崎
小間倉崎
大槌宿
釜石

夏本遺跡位置図

1．遺跡の立地

夏本遺跡は、山田線大槌駅の北約1.2kmに位置する。遺跡は大槌川左岸の山地縁辺部に発達した小規模な崖錐性扇状地に立地する。中央部に小さな尾根が南北に張り出し、便宜上この尾根を境として、調査区をA・B２地区に分けた。A区は尾根の南西斜面及びこれに続く平坦地で、標高は４～９mである。中央に涸れ沢が南北に走る。この沢の西側では扇状地堆積物が厚く、遺構・遺物とも検出されなかった。B区は尾根の東側に形成された埋積谷部分で、標高は17～20mである。両地区とも現状は畑地と果樹園である。

遺跡の北側は沢山遺跡と隣接し、南西約1.2kmには大槌川をはさんで大槌城が望まれる。

2．調査の概要

調査は国道45号大槌バイパス建設に伴い、東西約180m、南北約38mの範囲を対象とした緊急事前調査である。

検出された遺構は、縄文時代（中期中葉～末葉）の竪穴住居跡24棟、土坑４基、弥生時代の竪穴住居跡１棟、古代（奈良～平安時代）の竪穴住居跡５棟、住居跡状遺構７棟、土坑５基、平安時代の鍛冶工房跡１棟、近世の墓坑11基、時期不明の土坑８基などである。

＜竪穴住居跡ほか＞

縄文時代の竪穴住居跡24棟は、時期別に中期中葉17棟、末葉７棟となる。中葉期の住居跡は、A・B両地区から検出された。平面形には円形・隅丸方形・長方形があり、円形の住居跡が長方形の住居跡を切る重複関係がみられた。これらのうちで最大のものは、円形を呈する住居跡で径6.2mを測る。また最小は、長方形のもので３×2.2mである。炉は石囲炉が主体で、長方形を呈する住居跡では中央部に、円形の住居跡ではやや斜面下位に寄った位置に設けられている。

末葉期の住居跡７棟は全てB区から検出された。形状には円形・楕円形・隅丸方形などがあり、規模は最大で径６m前後、最小で径2.3mである。炉は地床炉・石囲炉のほか、複式炉をもつ住居跡が３棟ある。

弥生時代の住居跡はA区から検出された。遺物量が少なく、現段階では時期の詳細は不明である。大半は流失しているが、残存部からの推定では１辺5.5m前後の隅丸方形を呈していたものと考えられる。炉は円形の石囲炉で、住居跡中央部に設置されている。

古代の住居跡５棟の時期は、奈良時代４棟、平安時代１棟である。これらはいずれもA区から検出された。奈良時代の住居跡のうち３棟は、北壁中央部にカマドをもつ。他の１棟は東壁やや南寄りにカマドが設けられている。規模には斉一性はなく、最大で６×５m前後、最小のもので2.5×２m前後である。

平安時代の住居跡は、南壁の東寄りに煙道部の短いカマドをもつ。西側半分が流失している

が、規模は１辺５m前後と考えられる。なお、カマドの内から魚骨や獣骨片が出土した。

古代の住居跡状遺構はＡ区で５棟、Ｂ区で２棟検出されている。現時点では個々の所属は明らかではないが、出土遺物や重複関係から奈良時代のものと平安時代のものに分けられる。また、床面に炉跡と考えられる焼土を有するものもあり、住居跡や工房跡との関係も検討課題である。

＜鍛冶工房跡＞

Ｂ区から検出された。床面出土の土器から、平安時代の遺構と考えられる。竪穴住居跡と同様に、半地下式の構造をとる。残存状況が悪く、形状や規模の詳細は不明であるが、１辺４m前後の規模で隅丸方形を呈していたものと推定される。床面には新旧３基の鍛冶炉跡が確認された。鍛冶炉跡は径60～30cm、深さ10～25cmの浅い凹みで、床面は非常に硬くしまっている。埋土や床面からは、鉄滓や木炭の他に、鉄を鍛える段階で生じる「スケール」と呼ばれる薄い鉄片が多量に出土した。

埋土中に鉄滓が多く含まれることから、周辺部には同様の遺構が存在するものと思われる。

＜土　坑＞

時代・時期が把握できる土坑は全てＡ区から検出された。縄文時代の土坑４基は、いずれもフラスコ形である。径は1.5～２m、深さは1.5m以上と大型である。出土遺物等から中期中葉のものと考えられるが、同時期の住居跡との重複もみられる。

古代の土坑５基は、出土した土器から奈良時代の遺構と考えられる。平面形には円形・楕円形・隅丸方形があるが、隅丸方形を呈するものは他に比べてやや規模が大きい。なお、円形を呈する土坑１基の埋土から、多量の貝殻や獣骨が廃棄された形で出土した。

＜出土遺物＞

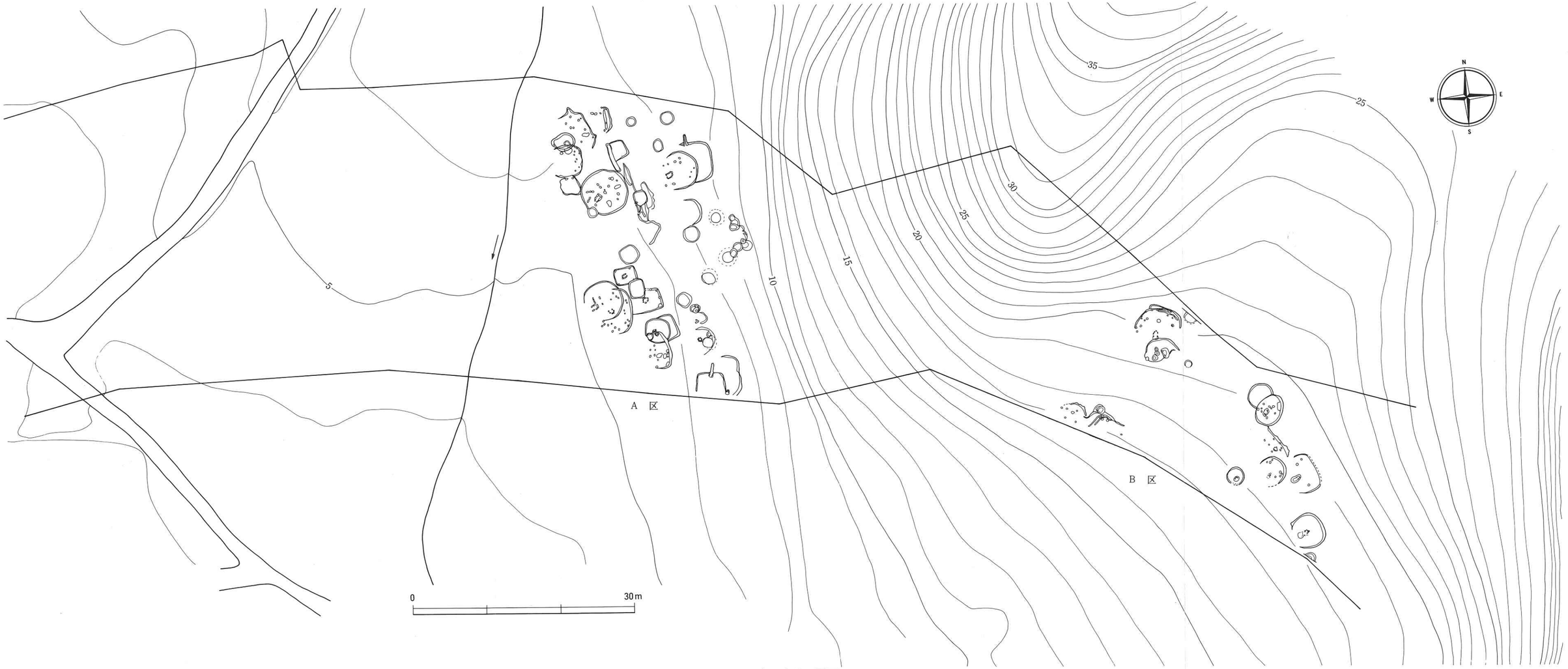
土器では縄文土器が卓越し、土師器がこれに次ぐ。弥生土器は極めて少ない。縄文土器は深鉢を主体とするが、口縁部に等間隔に穿たれた小孔をもち、器面に朱が塗られた壺が土坑から出土している。土師器には坏・甕・壺があり、平安時代のものではロクロ成形された高台付坏もある。また、口縁部内外面と体部外面に朱彩が施された壺が奈良時代の住居跡から出土した。

鉄器は古代の遺構から多く出土した。器種には馬具（轡）・鉄鏃・刀子・鋤先などがある。

特殊な遺物としては、硬玉（翡翠）製の垂飾りが縄文時代の住居内から出土した。

３．ま　と　め

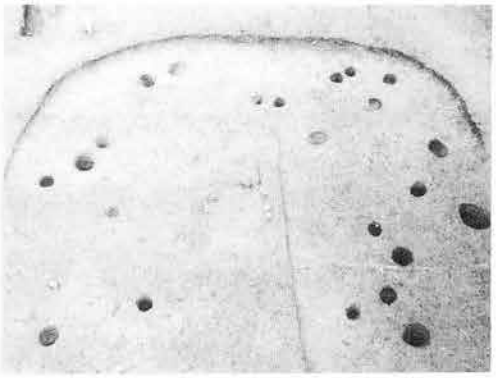
調査の結果、夏本遺跡は縄文～平安時代までの複合遺跡であることがわかった。遺跡は周辺部の同様な地形面に広がるものと考えられる。また、今回の調査で得られた資料は、岩手県沿岸部における原始・古代の生活を知る上で格好の材料となろう。



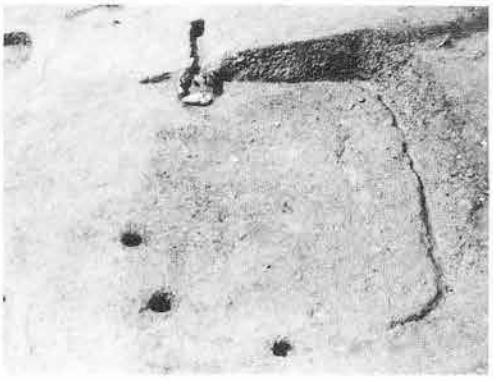
夏本遺跡遺構配置図

調査区域空中写真（南から）

縄文時代の住居跡



弥生時代の住居跡



奈良時代の住居跡

平安時代の鍛冶工房跡

夏本遺跡　遺構

1

2

3

4

1～3　縄文土器
4　硬玉製垂飾り（縄文時代）
5～10　土師器（奈良時代）
11～14　鉄製品（奈良～平安時代）

5

6

7

8

9

10

11

12

13

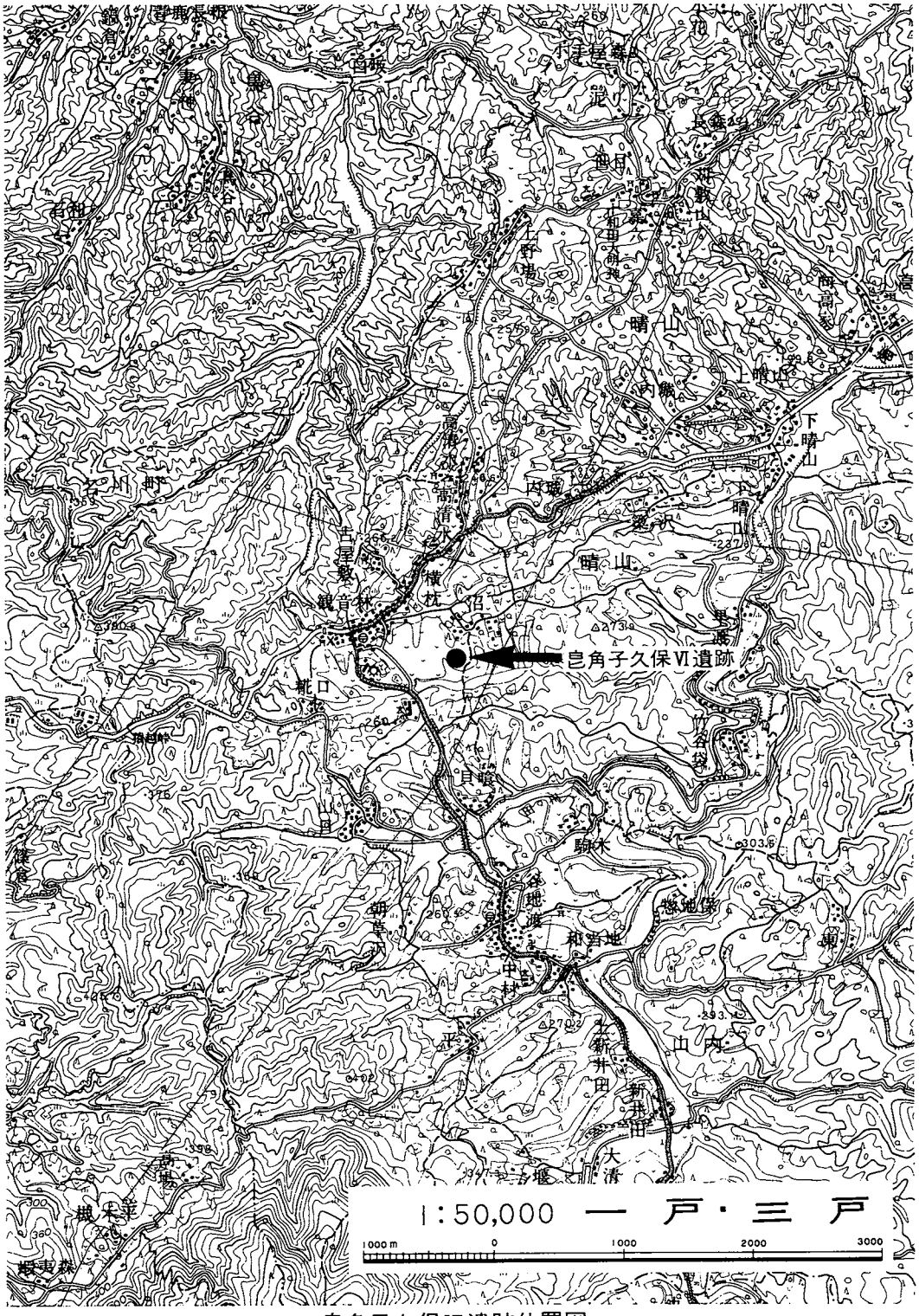
14

夏本遺跡　出土遺物

II　岩手県関係

（1） 皀角子久保（さいかちくぼ）VI遺跡

所　在　地	九戸郡軽米町大字晴山第21地割字小沼４－３ほか
委　託　者	岩手県土木部　二戸土木事務所
発掘調査期間	昭和62年７月１日～10月24日
調査対象面積	5,000㎡
発掘調査面積	5,000㎡
遺跡番号・略号	ＩＦ81－0323・ＳＫVI－87
調査担当者	平井　進・田村壮一
協力機関	軽米町教育委員会



邑角子久保Ⅵ遺跡位置図

1．遺跡の立地

皂角子久保Ⅵ遺跡は軽米町の西辺にあり、観音林の中心部から東方約1㎞に位置する。本遺跡から北へ約3㎞行くと青森県境に至る。本遺跡がのる観音林丘陵は起伏量が少なく、河川によって開析された低いなだらかな尾根が広がる。本遺跡は南北にのびる尾根とその斜面に形成され、標高は約240～250mである。遺跡の現状は尾根の頂部付近に一部植林されているほかは畑地として利用されている。

2．調査の概要

発掘調査は、一般国道340号の改良工事に伴う緊急発掘調査である。調査区は南北約20m、東西約250mの帯状となっており、ほぼ中央に調査区を横断するように尾根がよこたわっている。本遺跡は縄文・平安・江戸～明治の複合遺跡であるが、各時代ごとに遺構が集中しており一部をのぞきその占地が異なり、縄文は尾根、平安は西斜面、江戸～明治は東斜面に占地する。

検出された遺構は、縄文時代の円筒状陥し穴11基、溝状陥し穴6基、ピット15基、平安時代の竪穴住居跡5棟、周溝を伴う掘立柱建物跡1棟、掘立柱建物跡2棟、円形周溝1棟、溝跡1条、ピット4基、畑跡約600㎡、等、江戸時代（幕末）～明治時代（初頭）の掘立柱建物跡1棟、井戸跡1基である。

出土した遺物は縄文土器、土師器、土製品、須恵器、石器、石製品、鉄製品、木器、木製品、陶磁器、布、種子等である。

＜竪穴住居跡＞

すべて平安時代中頃のもので埋土中には十和田a降下火山灰が小ブロック状となって混入する。3棟は一部が調査区外に延びるため詳細は不明であるが、全体を調査できた2棟はどちらも埋土最上位に白頭山火山灰が層状に厚く堆積する。この埋土の観察からは5棟の住居跡相互に大きな時期差は認められない。また、それぞれの住居跡は一定の間隔をもって点在し、重複はない。規模と形状は1辺が3.5～4mの方形で、5棟ともほぼ同じである。カマドの方向は北向きと東向きで一定しないが、煙道部の作りはともに刳り貫き式である。明瞭な柱穴を有するのは1棟のみであるが、大半が調査区外に延びているため柱配置等は不詳である。焼失した住居跡は1棟である。

＜ピット＞

縄文時代のピットは15基であるが、断面形の形状からフラスコ状ピット11基、皿ないしビーカー状ピット4基に分けられる。規模は底部径が2m弱で、フラスコ状ピットの深さは1m前後、皿ないしビーカー状ピットは50cm以下と小型のものである。遺物を出土したピットは6基であるが、うち2基は同一個体の土器片が1個ずつ埋土上位に流れ込んだものである。1基は

底部の壁際に小型の鉢2個を倒立させていた。鉢の間は50cmの間隔である。2個のうち1個は口縁部が若干破損はしているがほぼ完形であるのに対し、他の1個はほぼ同一の大きさになるように上部を打ち欠いたものである。また、もう一つのピットから出土した遺物は三叉文をもつ壺形土器である。これらの遺構内から出土した土器はすべて晩期である。このほか時期不明の土器を出土したピットが2基ある。また埋土の堆積状況はすべて自然堆積である。

平安時代に属するピットは4基である。いずれも浅い擂鉢状で平面形は不整形である。底部の一部には淡い焼土が形成されている。底部から草木炭や土器片等が出土する。いずれも住居跡から離れた場所に単独で作られる。

＜陥し穴＞

陥し穴は円筒状のものが11基、溝状のもの6基が検出された。円筒状陥し穴は尾根の西側斜面に沿って緩やかなカーブを描きながら並ぶ。検出面は中掫浮石の下である。規模は概ね直径1m、深さは1.2～1.5mである。ほとんどの陥し穴は水が湧き出るため底部に杭跡があるかどうかは調査できなかった。出土遺物はない。縄文前期に属すると思われる。

溝状陥し穴は尾根の頂部に4基が連続して作られる。また、やや離れた所に1基が作られる。これらは幅が非常に狭いものと、やや広いものとがあるが、どちらも底部に杭跡は発見されなかった。また、斜面の下方に円筒状陥し穴と重複するものが1基検出されたが、大部分が調査区外にあるため概要は不明である。

＜溝　跡＞

溝跡は円形周溝1基と直線状の溝跡1条が検出されたが、いずれも調査区外に遺構が延びるため全容は不明である。円形周溝は斜面の下位に位置し、規模は直径4.9m、溝幅50cm、深さ35cmである。溝の底部には鋤状の工具痕が2列に並ぶ。周溝によって区画された内側には明瞭な掘り込み等はみられない。

直線状の溝跡は斜面の中位に位置し、斜面と直交するように北から南に向かって作られている。これは埋土中～下位に砂が厚く堆積することや溝の作り方から用水路跡と思われる。

以上の溝跡遺構は平安時代に属すると思われる。

＜畑　跡＞

平安時代の遺構が検出された西側斜面で、同時代の畑跡が約600m²検出された。畝は流失しているが畝間の溝跡は残存しており、その埋土最上位に十和田a降下火山灰がのる。畝間の標準的な長さは約5m、幅は20～30cmである。深さは概ね20cm程であるが所々にやや深い凹みが見られる。畝の部分には一切の掘り込みは見られない。畑跡は何回かにわたって耕作されたものである。今のところ栽培種は不明である。

＜周溝のある掘立柱建物跡＞

周溝は隅丸方形で一辺の長さが約６ｍ、溝の幅は60cm、深さは35cmである。この溝によって区画された内側に４本柱の掘立柱建物跡が検出された。柱間は2.1m、埋土は周溝の埋土と同じで十和田ａ降下火山灰が混入している。

＜掘立柱建物跡＞

平安時代に属するもの２棟と近世（江戸時代末）に属するもの１棟の計３棟が検出された。平安時代のものは１間×２間で柱間は2.1m前後である。近世のものは尾根の東側に位置し、民家跡である。南端の柱穴列のみ検出したため梁行は不明である。各柱穴は直径１ｍ、深さ90cmと比較的規模が大きい。柱間は2.1mである。

＜井戸跡＞

近世の民家に付属するもので、民家の南東隅に位置する。素掘りであるが上部には灰白の粘土を貼り付ける。柱穴も１基検出されたことから上屋を持たないハネ釣瓶式のものである。規模は直径1.2m、深さ約５ｍである。湧口は地上から1.2mほどの所にある。

＜出土遺物＞

縄文時代の遺物は縄文土器、土製品、石器である。総量はコンテナ１箱である。縄文土器の大部分は晩期の粗製鉢形土器片と思われる。文様体から時期が判明するのは帯状に三叉文を配する大洞Ｂ式の壺形土器があげられる。土製品は円盤状土製品１点である。石器はフレークと半製品のスクレイパー状のものが若干出土している。

平安時代の遺物は土師器、土製品、須恵器、石器、鉄製品及び植物種子である。土師器は口縁部が短く外反する甕と内面黒色処理した坏である。甕はロクロ不使用のものが主であるが、口縁部及び体部上半をロクロで整形したものも含まれる。坏は１点のみがヘラ切り再調整であるが、他はすべて回転糸切り無調整である。土製品は土玉、土鈴状のもの等が出土した。須恵器は大甕、甕、坏及び坏の蓋、瓶または壺が出土したが完形のものや復元できるものはない。石器は砥石、磨石である。鉄製品は腐食が進んでおり器種は不明であるが刀子状のものである。また、坩堝の破片や鉄滓が出土している。種子は住居跡からヒエ、アワ、米と思われる穀類が、畑跡からは穀類状のものとモモが出土した。

幕末から明治初頭にかけての遺物は石器、木器、木製品、鉄製品、古銭、磁器、布及び植物遺体としての種子等である。鉄製品と古銭４点は掘立柱建物跡から、他はすべて井戸跡内から出土した。石器は砥石である。鉄製品は環状の鉄製品、釘、棒状や刀子状の製品等である。古銭は腐食が進んで種類が判然としないものもあるが「寛永通宝」がある。木器・木製品は柄杓、膳（？）、俎、釣瓶、鍬台、蛸胴突、井戸枠、板材、杭等多種にのぼる。磁器は小片７点である。布は麻と思われる。種子は、モモ、ソバ、イネ等々少なくとも６種類以上が出土している。

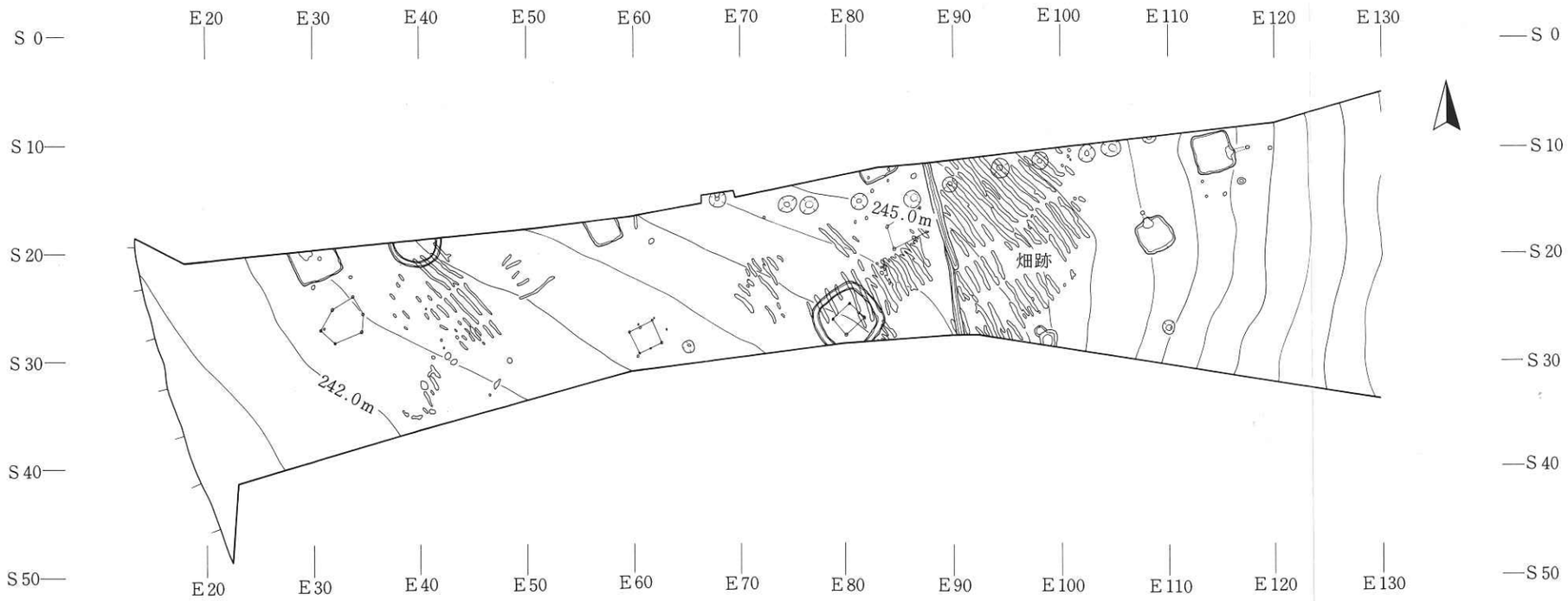
3．ま　と　め

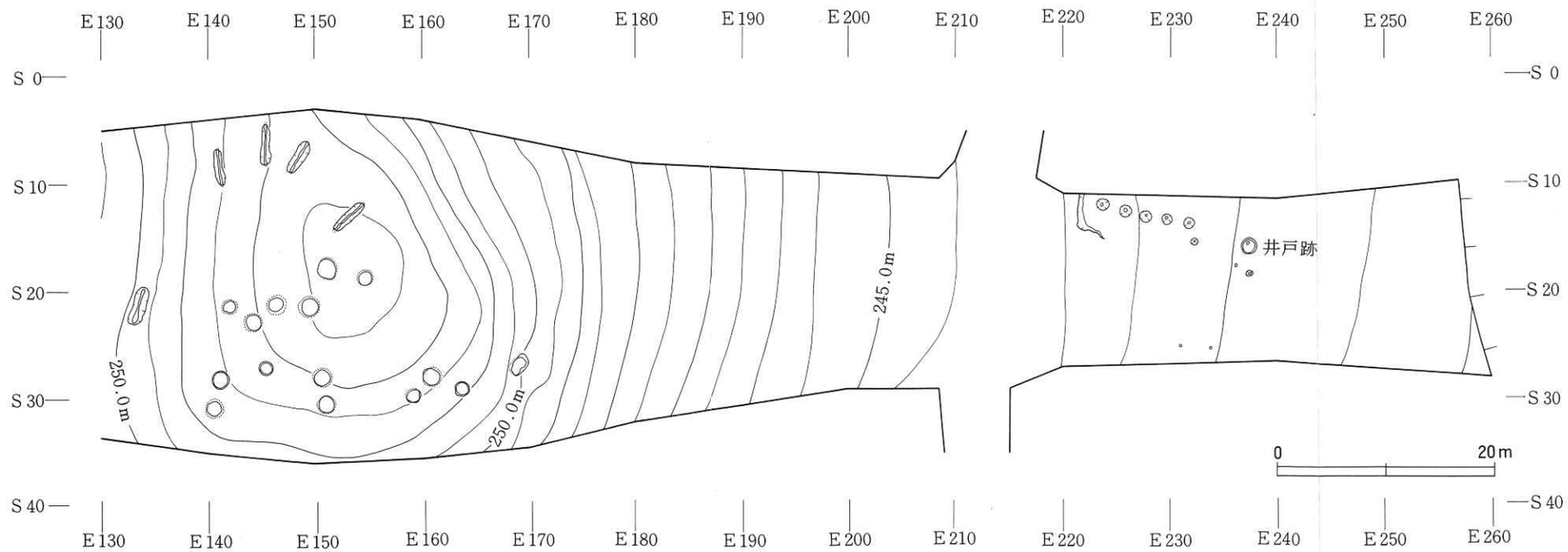
皀角子久保VI遺跡は縄文・平安・江戸～明治の複合遺跡であることが判明した。しかも各時代ごとに遺構が分かれて占地している。

縄文時代は狩場など食料獲得・保存の場であったと思われる。

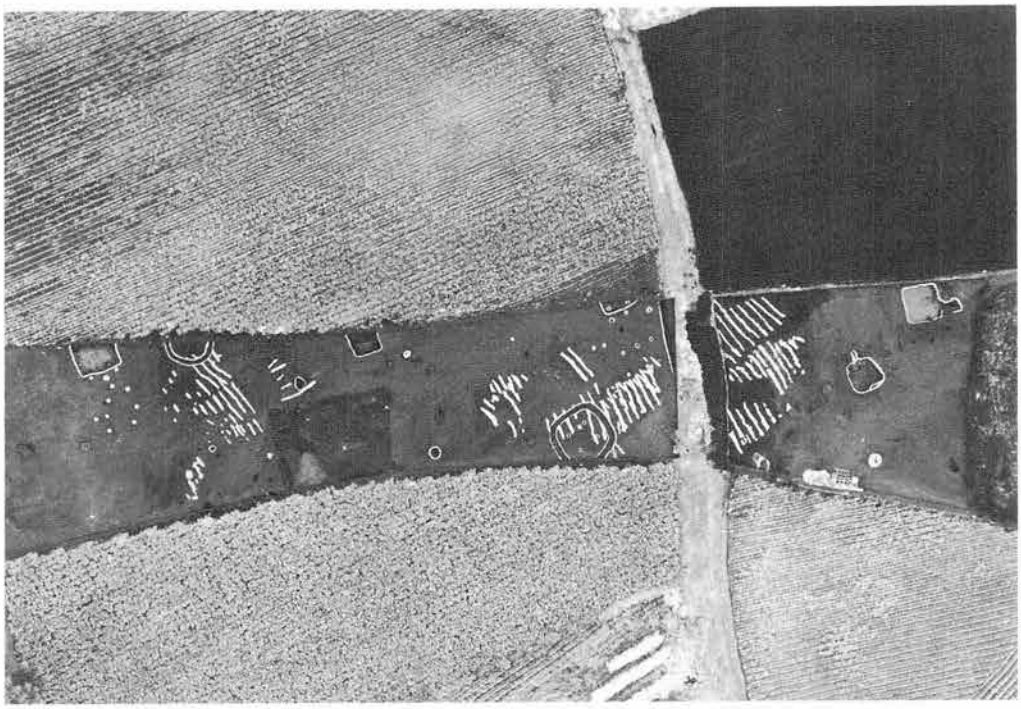
平安時代は住居の近くに畑を耕作し、付属する建物を擁し、生活用水は水路を作って引いてきていた。これらの遺構配置を検討することによって当時の山村集落の構成を解明する手がかりが得られるものと思われる。また、畑地及び種子が出土しており、当時の農耕文化を考えるうえで貴重な資料となり得ると思われる。

近世末と思われる遺構と明治初頭と思われる遺物が出土した。特に井戸跡内から出土した民具は比較的良好な遺存状態にあり、また、種子も多数出土したことから当時の生活を知るうえで一つの資料を提供できると思われる。

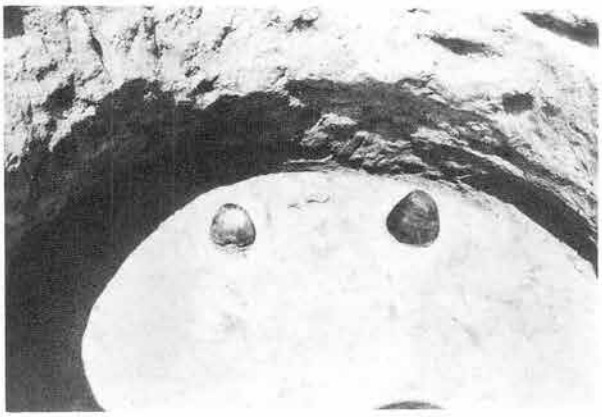




皂角子久保Ⅵ遺跡遺構配置図



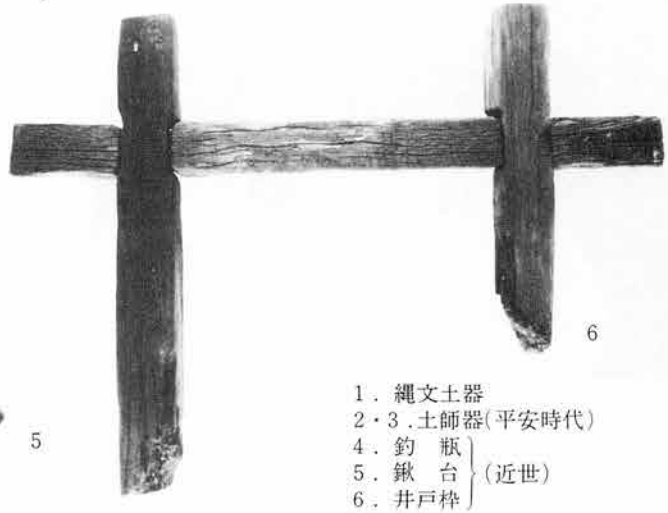
遺跡の西側全景
（古代の遺構集中区―筋状は畑跡）



縄文時代晩期のフラスコ状ピット

近世の掘立柱建物（民家）跡

皂角子久保Ⅵ遺跡　遺構

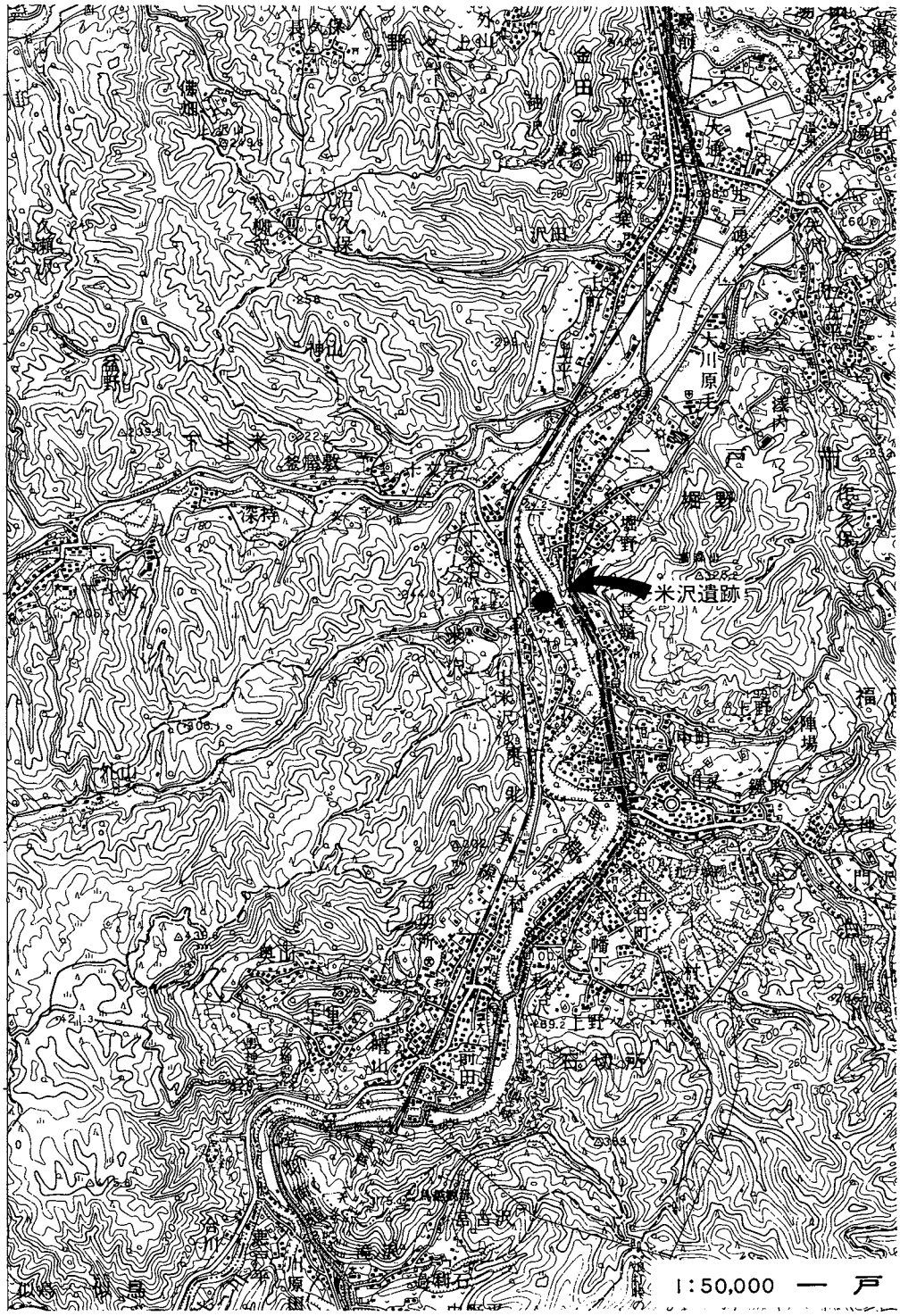


1．縄文土器
2・3．土師器（平安時代）
4．釣　瓶
5．鍬　台　（近世）
6．井戸枠

皂角子久保Ⅵ遺跡　出土遺物

（2）米沢（まいざわ）遺跡

所　在　地　二戸市米沢字荒谷57－5ほか
委　託　者　岩手県土木部　二戸土木事務所
発掘調査期間　昭和62年9月1日～10月21日
調査対象面積　3,000㎡
発掘調査面積　3,000㎡
遺跡番号・略号　ＩＥ99－0390・ＭＺ－87
調査担当者　工藤利幸・光井文行
協力機関　二戸市教育委員会



米沢遺跡位置図

1．遺跡の立地

米沢遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線斗米駅の東約250mに所在する。遺跡は、二戸市内を北流する馬淵川左岸に形成された冲積世の高・低２面の段丘とその間の斜面部に広がっている。調査区域の標高は91～98mで、馬淵川との比高は10～17mである。

調査前の地目状況は畑地と宅地であり、畑地の高い区域は改変されている。

2．調査の概要

調査区域は、南西～北東方向約110m、南東～北西方向最大約60mの区域で、北東に向いている。調査区域の土層堆積物は、段丘礫層の上位に２次堆積の浮石層・砂層等の互層が見られ、その上には十和田火山を噴出源とする南部浮石層、中掫浮石層、十和田ｂ降下浮石混在層、十和田ａ火山灰層などが堆積している。以下に述べる縄文時代、平安時代の遺構は、段丘２面のうち低い面での検出である。

発見された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡１棟、古代（平安時代）の竪穴住居跡２棟、円形土坑１基、溝状の陥し穴状遺構１基、そして近代～現代と考えられる土取り跡３ケ所である。

＜竪穴住居跡＞

縄文時代の住居跡は、およそ2.8m×2.0mの不整楕円形で、中心付近に石囲炉をもっている。柱穴は将棋の駒形に配置された五角形を基本とし、補助・補強のための柱穴と考えられるものを含めて７穴確認されている。出土遺物としては、粗製の深鉢形土器２個体、数点の礫器が出土しており、深鉢形土器の形態から縄文時代後期と考えられる。また、埋土上部の一部が攪乱を受けており、その攪乱部からは小型の土師器が出土している。

古代の竪穴住居跡２棟は、何れも全形を確認していないが、１棟は１辺が2.4m前後の小型隅円方形の住居跡で大半が調査区域外に存在するためカマドの位置は不明である。出土遺物はロクロ成形の甕形土器破片が埋土から出土している。もう１棟は、カマドが設けられた１辺が7.2m、その対辺は６m前後の平面形が台形をなす住居跡で、カマドは北西壁に設けられている。出土遺物としては、坏形土器(土師器、須恵器)、甕形の土師器、土製小玉、砥石、鉄製品などであるが、量的には少ない。なお、坏形土器はロクロ成形である。

＜土　坑＞

土坑は、平面形が不整な円形で底面中央付近に浅い小穴をもっている。所属時期を推定できるような遺物は出土していないが、埋土の性状から縄文時代後期の可能性が高い。

＜陥し穴状遺構＞

陥し穴状遺構は、溝状と呼ばれる細長いもので長さ約2.6m、最大幅約0.6m、ほどである。所属時期を特定できる遺物は出土していないが、検出層位から縄文時代と考えられる。

土取り跡は、旧土地所有者の住宅等建設に伴い、壁土を採取した跡と考えられる。採取した土の種類は浮石質粘性土と中砂質土の２種であり、埋めもどし土の中には手うちの角釘などが含まれていた。

＜出土遺物＞

出土遺物は、縄文時代早期の貝殻文土器片、同前期と考えられる口縁部に綾繰り文を施こした繊維混在の平底土器、同中期～後期前葉の土器、同晩期の土器、そして前述した平安時代の各種土器、土製品、石器、石製品、鉄製品などである。出土量としては、縄文時代前期の土器が最も多く、早期・晩期の土器は極めて少量である。

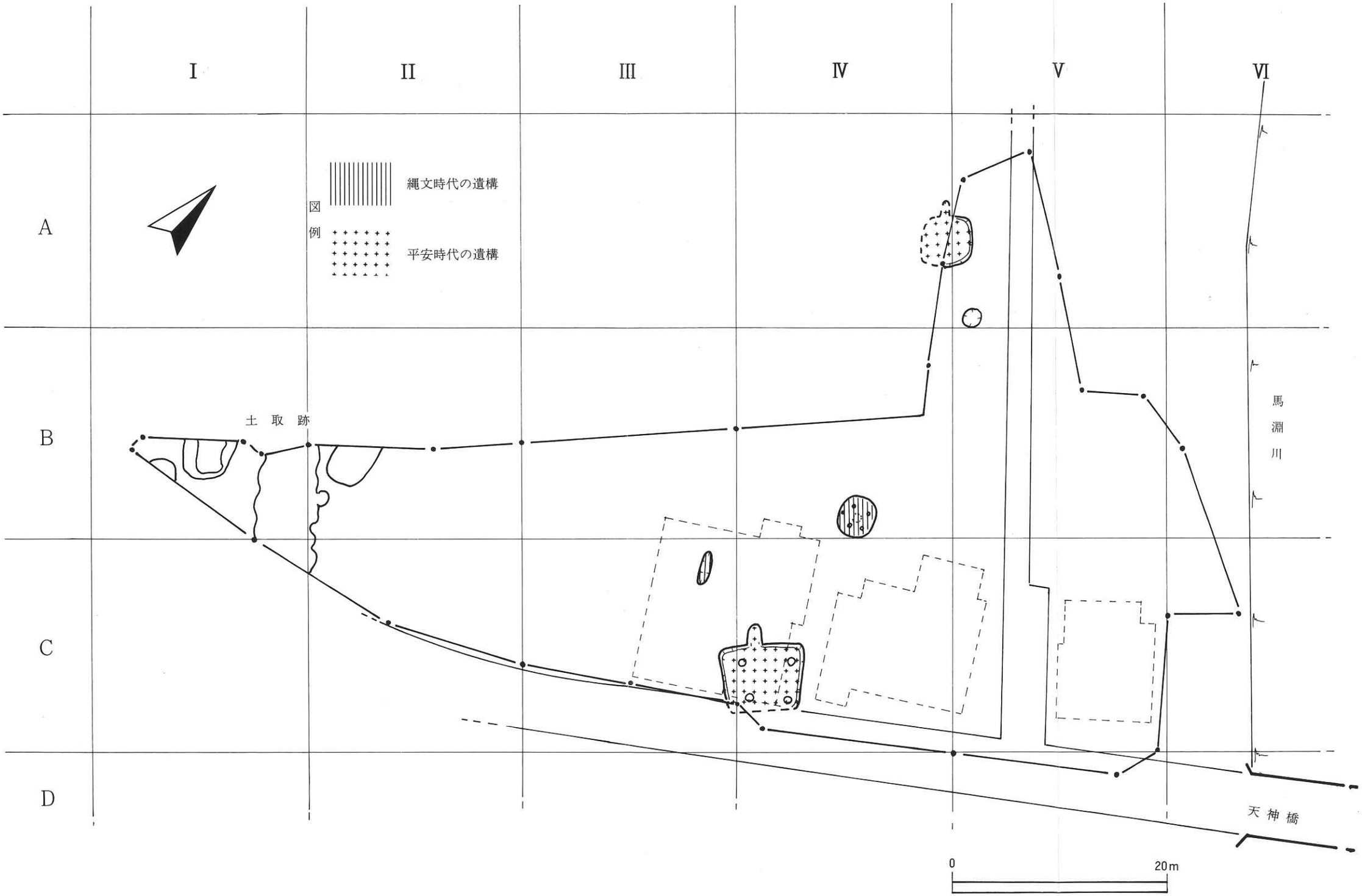
土器の中で注目されるのは、狩猟模様の一部と考えられる文様をもつ土器片（14点）である。この土器は、大波状の口縁をもつ深鉢形土器と考えられるが、全形は不明である。

石器・石製品としては、石鏃、掻器、不定形石器、磨製石斧、打製・磨製の石製円盤、数種の礫石器であるが、定形的な剝片石器は少ない。

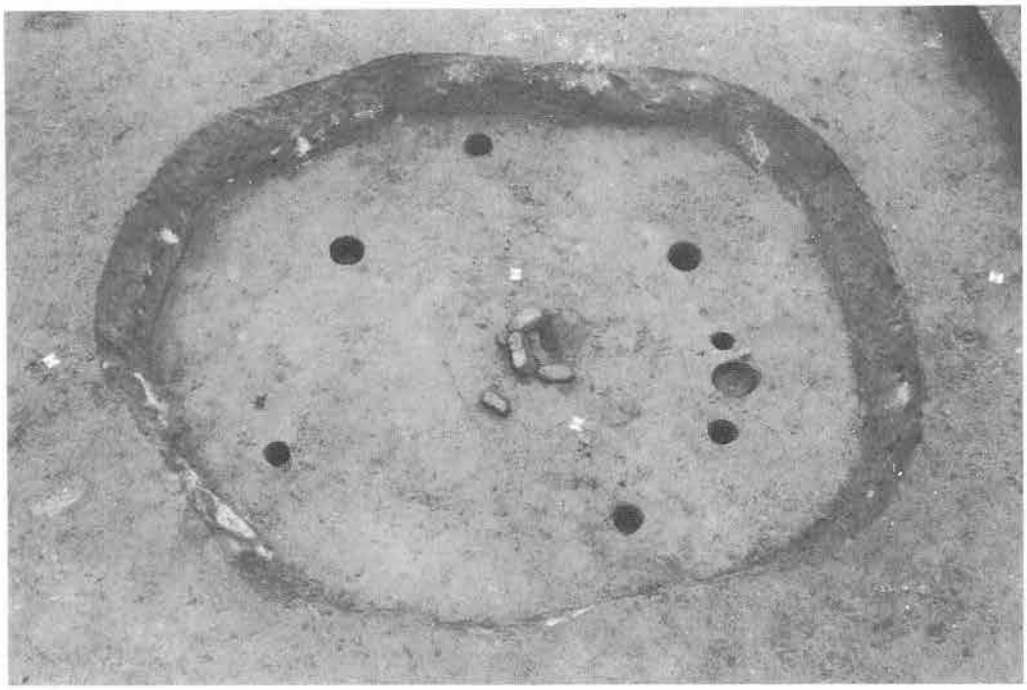
土製品としては、前述した平安時代の小玉の他に、縄文時代後期の土器片でつくった土器片製円盤が存在する。土偶その他の土製品は出土していない。

３．ま　と　め

米沢遺跡は、縄文時代と平安時代とが重複した遺跡であり、調査区外の西に続く集落の一部であることが明らかとなった。また、縄文時代の狩り場跡としても利用されており、陥し穴状遺構も調査区域外に存在することが予想される。



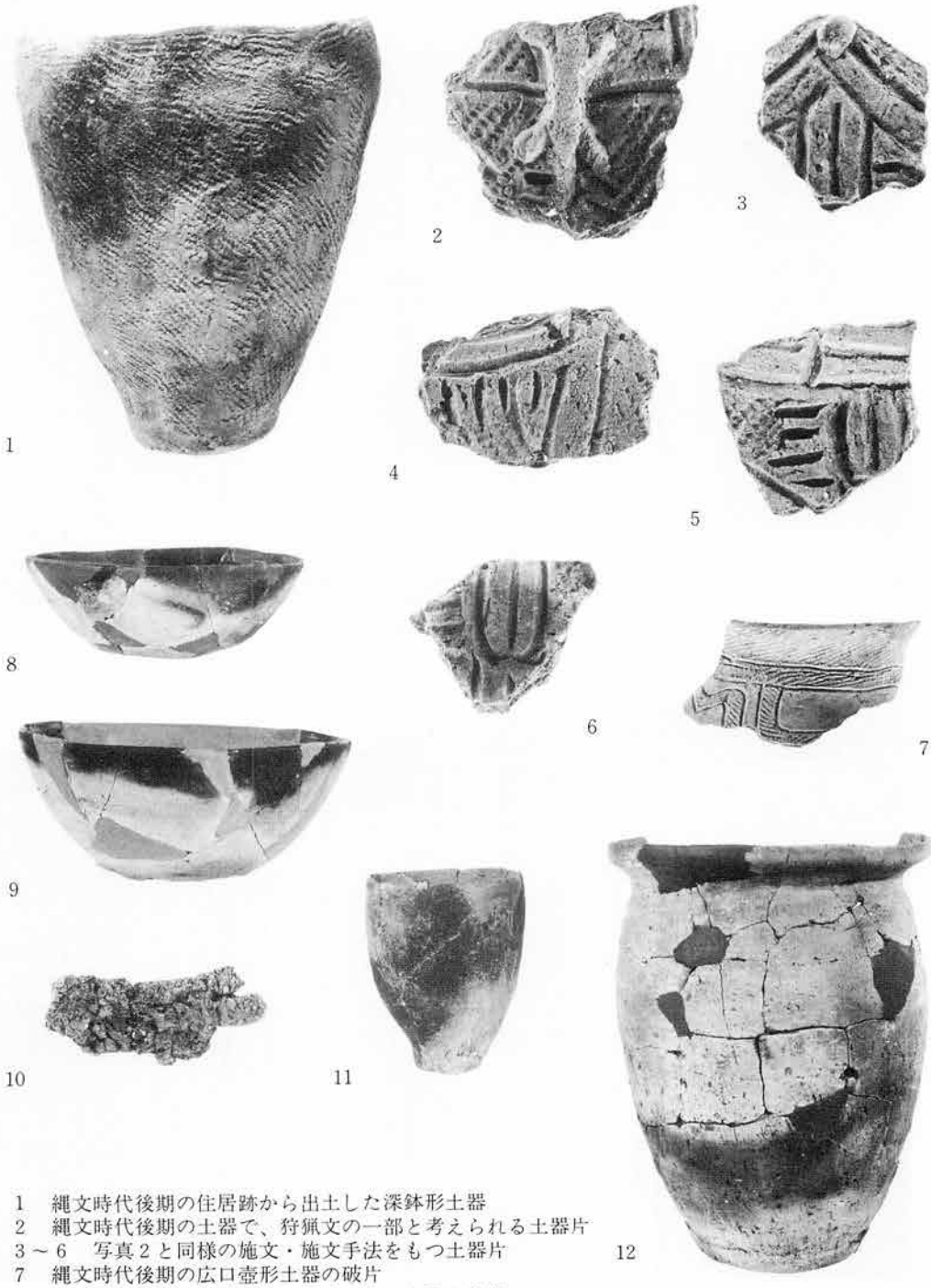
米沢遺跡遺構配置図



縄文時代後期の住居跡

平安時代の住居跡

米沢遺跡　遺構



1　縄文時代後期の住居跡から出土した深鉢形土器
2　縄文時代後期の土器で、狩猟文の一部と考えられる土器片
3～6　写真2と同様の施文・施文手法をもつ土器片
7　縄文時代後期の広口壺形土器の破片
8～12　平安時代の住居跡他から出土した土器と鉄器

米沢遺跡　出土遺物

(3) 野口(のぐち) I 遺跡

所在地	岩手郡西根町寺田第22地割27ほか
委託者	岩手県農政部　岩手北部土地改良事業所
発掘調査期間	昭和62年4月7日～5月31日
調査対象面積	3,700㎡
発掘調査面積	3,700㎡
遺跡番号・略号	KE05—0383・NGI—87
調査担当者	玉川英喜・中川重紀
協力機関	西根町教育委員会

野口Ⅰ遺跡位置図

1．遺跡の立地

野口Ⅰ遺跡は東日本旅客鉄道花輪線平館駅の北々東約５kmに位置する。国道282号沿いの平館から県道を５km程北上した野口地区の西北西0.8kmの町道上斗内線沿いに所在する。

遺跡は涼川右岸の丘陵地に立地し、東向きの緩斜面上にある。調査地はその一部で、標高335～345m、涼川との比高は35～45m、現況は畑地である。

2．調査の概要

調査区域は道路建設予定地に沿った南北約20m、東西約160m余りの範囲である。調査の結果、検出された遺構は住居状竪穴遺構１棟、ピット２基、焼土２基である。出土遺物は縄文土器と石器である。

＜住居状竪穴遺構＞

2.6×2.0mの長方形を呈し、炉跡や柱穴等はない。底面はほぼ平坦で、壁高は斜面上方部で25cm±、斜面下方の東側は削平されて残存しない。遺物はなく、時代・時期は不明である。

＜ピット＞

２基とも住居状竪穴遺構付近で検出されている。１基はその南側隣り、もう１基はその北東６mの位置にある。前者は径35cm前後の円形を呈し、深さ18cmの小ピットで底部が開口部よりふくらむ。埋土から縄文土器の破片が出土している。後者は一辺170cmの隅丸方形を呈し、深さ約80cmである。底面は平坦で壁は直立する。底部に炭化材と焼土が混在している。

＜焼　土＞

調査区西寄りから２基検出されている。１基は40×50cm、他は70×80cmの範囲に不整形に広がり、層厚はどちらも10cm前後である。

＜出土遺物＞

縄文時代後期・晩期等の土器と石器が出土している。土器の出土量はコンテナ１箱分で、数点の復元可能な土器の他は破片である。石器は石鏃等の剝片石器と石斧・磨石・凹石等の礫石器合わせて20数点である。遺物は表土及び表土下位の黒色土中から出土している。

3．ま　と　め

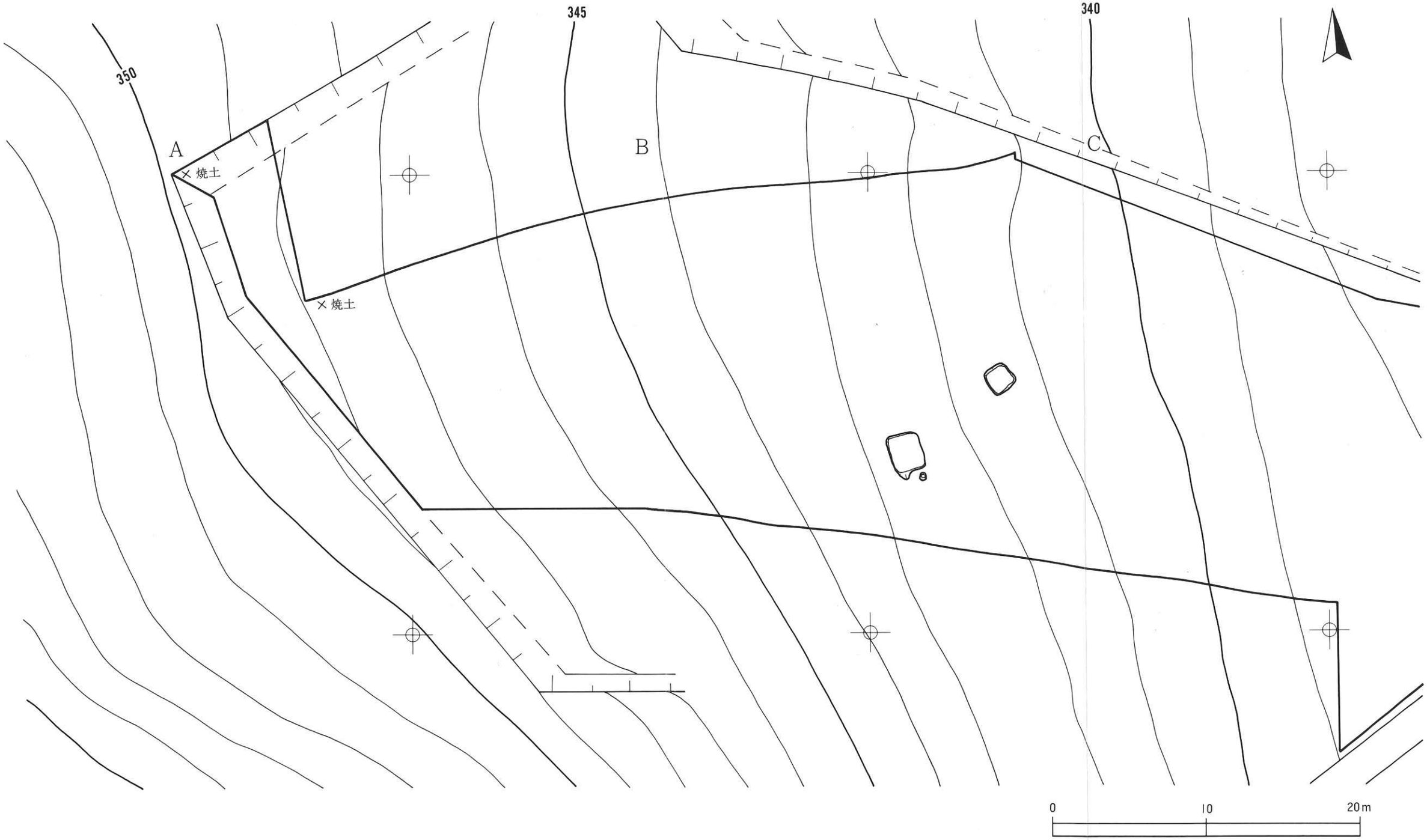
調査の結果、縄文時代の遺構は明らかではないが、出土した遺物からみると、縄文時代後期と晩期の集落が調査区外の斜面上方に存在した可能性が考えられる。

遺跡近景（東から）

住居状竪穴遺構

出土遺物

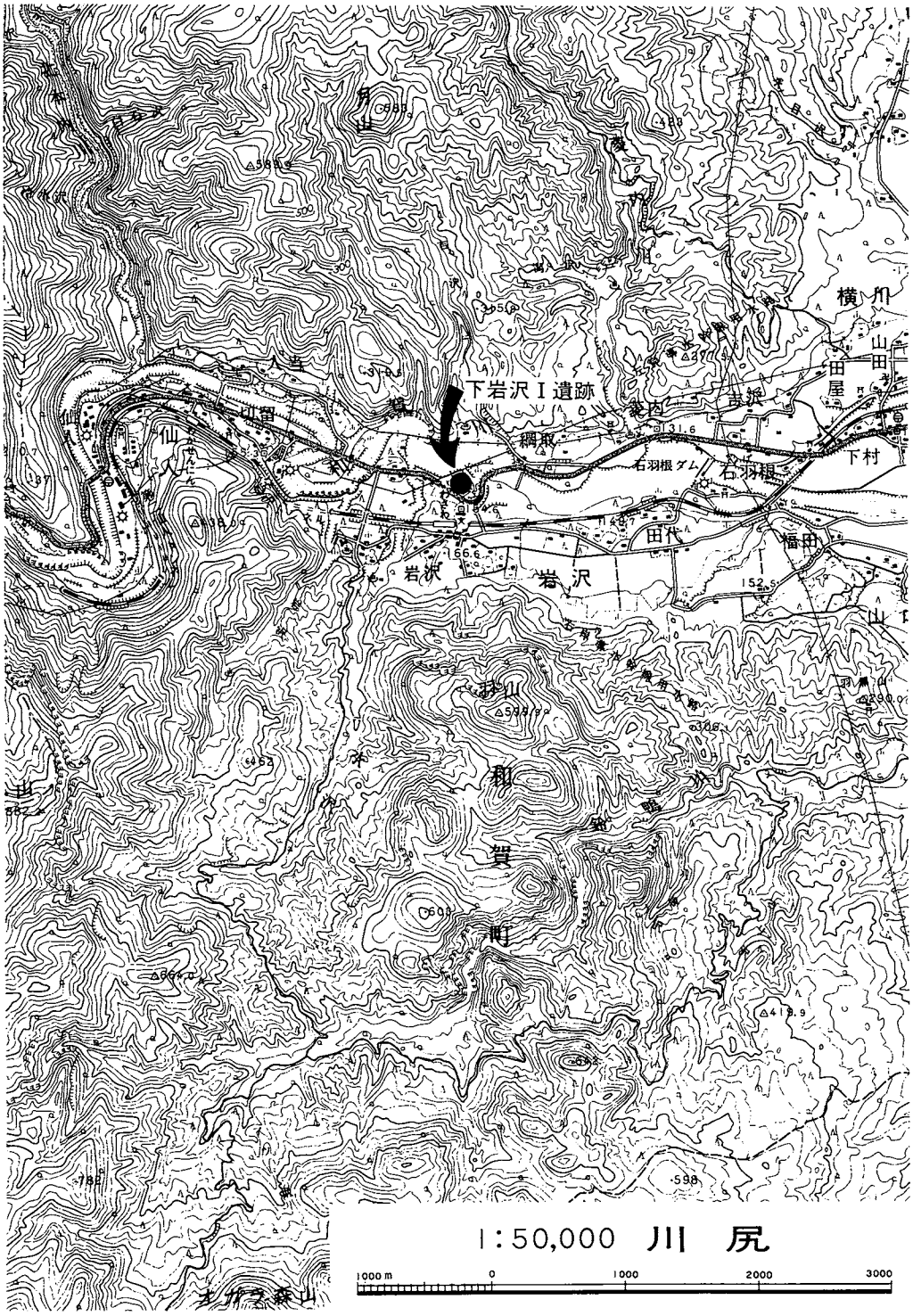
野口Ⅰ遺跡　遺構・出土遺物



野口Ⅰ遺跡遺構配置図

(4) 下岩沢(しもいわさわ) I 遺跡

所　在　地　和賀郡和賀町岩沢第9地割12—2ほか
委　託　者　岩手県土木部　北上土木事務所
発掘調査期間　昭和62年4月7日～4月30日
調査対象面積　3,832m²
発掘調査面積　3,832m²
遺跡番号・略号　ME52—2068・S1I—87
調査担当者　田村壮一・佐々木嘉直
協力機関　和賀町教育委員会


下岩沢Ⅰ遺跡
横川
山田屋
下村
石羽根
石羽根ダム
田代
福田
岩沢
岩沢
仙人
川留
人吉
羽山
和賀
町
1:50,000 川尻
1000 m
0
1000
2000
3000

下岩沢Ⅰ遺跡位置図

1．遺跡の立地

下岩沢Ⅰ遺跡は東日本旅客鉄道北上線岩沢駅の北方約300mに所在する。国道107号沿いにあり、北上市より西へ約15kmである。

遺跡は奥羽山脈の東縁に位置し、東流する和賀川によって形成された右岸の河岸段丘上に立地する。当地域の基盤は新第三紀中新統の大石層、綱取層などで構成されるが、和賀川による下方侵食が顕著で、河岸段丘が連続してみられる。これらの段丘は高位～低位に大別されるが低位段丘はさらに３～４段に細別できる。低位段丘は岩沢段丘と称され、北上川中流域の金ケ崎段丘に相当する。遺跡の載る段丘面は低位段丘の下位にあたり、標高は147～151mである。

調査範囲は遺跡の中央部を東西に幅20mで横切り、東半部は西半部より一段低く、その高低差は３mである。現状は東半部で水田、西半部は畑と山林となっている。周辺には和賀仙人などの後期旧石器の遺跡や法ケ松や岩沢など縄文時代の遺跡がある。

2．調査の概要

国道の改良工事に先立つ調査で、今年度は粗掘と遺構検出まで実施し、来年度精査の予定となっている。粗掘は畑地を主に人力で行ない、水田と林野の大部分は重機を使用した。遺跡の土層は４層に分けられる。Ⅰ層は表土、Ⅱ層はにぶい黄褐色土と暗褐色土との混土で主な遺構検出面、Ⅲ層は褐色～黄褐色の粘土質シルト～砂質土で地山、Ⅳ層は段丘の構成層となる砂礫層である。Ⅲ～Ⅳ層は起伏があり、所々に20～50cm大の円礫が表土中に露出する。

検出された遺構は縄文時代と推定される住居跡状遺構１棟、土坑９基、近世以降の墓壙と思われる跡が３基である。

＜住居跡状遺構＞

調査区東端の段丘崖の縁に検出された。直径3m程の円形である。埋土は小～中円礫の混入した黒色土で、一部から炭化物や縄文晩期の地文のみの土器片２点が出土している。礫の多さからすると遺構でない可能性もある。

＜土　坑＞

いずれも段丘面の縁辺部に占地している。東端部（N～O区）が多く６基、その他Ⅰ区に２基、西端部のB区に１基である。２～３基が隣接してまとまっている様相である。黒褐色土の埋土で円形に検出されたが、これらのうち２基のみ半分だけ試掘した結果、直径１m深さ60～80cmのビーカー形の貯蔵穴であった。他の土坑も同様と考えられる。埋土上面で縄文土器片が見られるものがあり、時期は縄文時代と推定される。

＜墓　壙＞

調査区中央のH～Ⅰ区に３基である。黒色土の円形プランとして検出したが、この区域はⅣ

層の自然礫が多く露出しており検出に難航し、その埋土や平面はやや不明確である。この南方10mの地点に近世以降の墓地があり、その墓域の一部と考え、墓壙としたものである。周囲には縄文土器も出土し、縄文時代の土坑となる可能性がある。その時期や性格については精査の結果を待たなければならない。

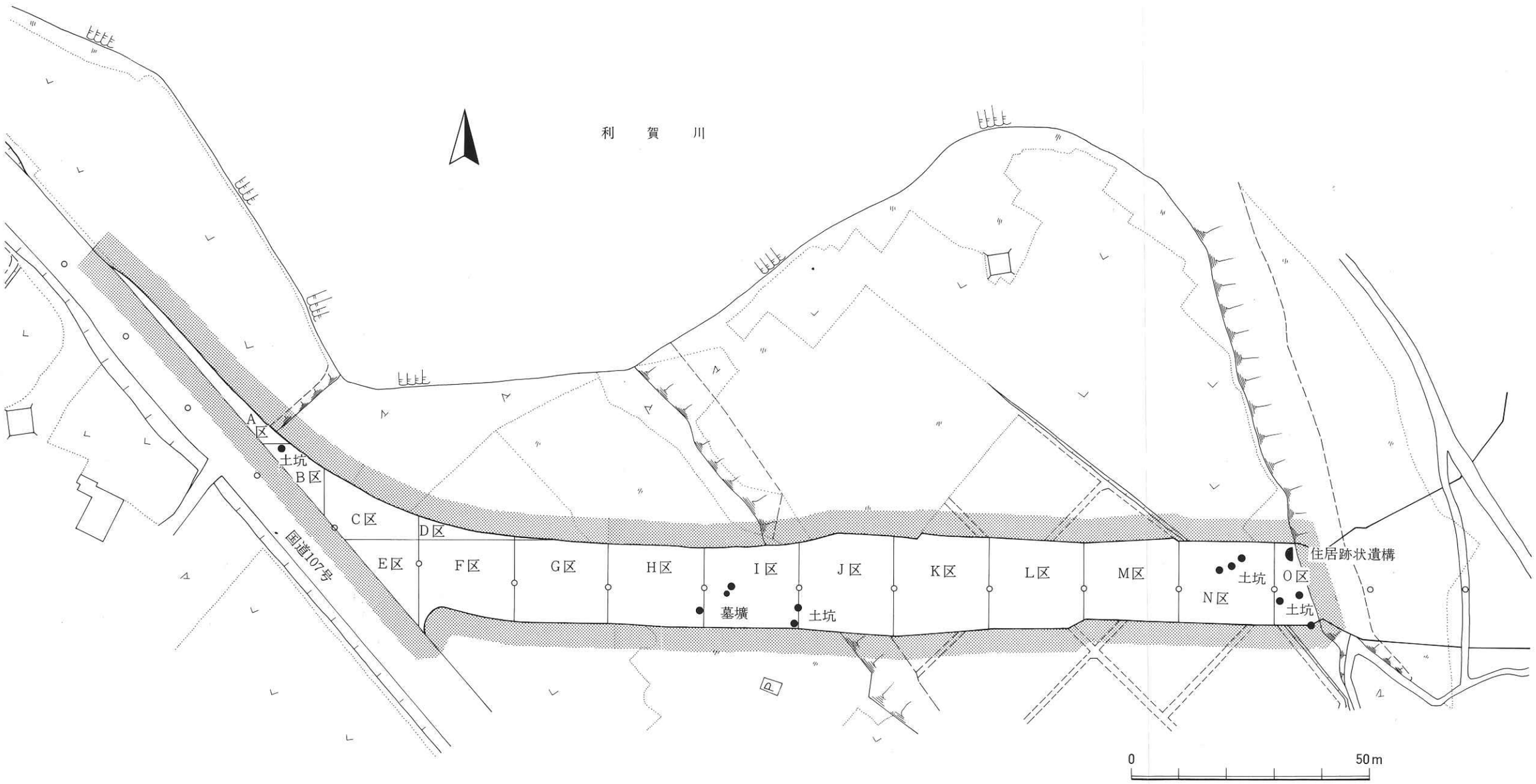
＜出土遺物＞

縄文時代前期～晩期と弥生時代後期の土器75点、石器29点である。低位の東半部域では縄文前期と後・晩期の土器が多く、高位の西半部では縄文晩期、弥生時代の土器が出土している。時期の判明するものでは晩期が多く、次いで前期である。特に東端部のN～O区でまとまっている。検出された遺構もこれらに伴うものであろう。

石器には尖頭器、石匙、掻器がある他、大部分は剝片と石核である。やはり東端部からの出土が多い。ほとんどは縄文時代の石器と思われるが、後期旧石器に関連性を求めるとすれば尖頭器や掻器の一部、剝片などがあげられる。

3．ま　と　め

調査の結果、土坑等の遺構と縄文～弥生時代の土器や石器が発見された。遺物量や分布傾向から縄文時代晩期が主体の遺跡である。全体的に出土量は少なかったが、調査区外の隣接する畑地では遺物が表採されるため、集落の存在が考えられる。また当地域には後期旧石器時代の遺跡が知られており、本遺跡でも同時代か、やや後続するものが発見されてよい段丘面である。そのためトレンチを設けて一部黄褐色土層を下位まで掘り下げてみたが、明確な手がかりは得られなかった。来年度の精査で遺跡の性格がより明らかになるであろう。



下岩沢Ⅰ遺跡遺構配置図

東端部のＮ区とＯ区　遺構検出状況

Ｂ区の土坑検出状況

Ｉ区の土坑検出状況

西半部区域の粗掘

東半部区域の粗掘

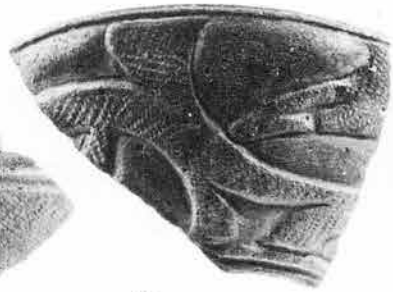
下岩沢Ｉ遺跡　遺構

1．縄文土器(前期)

2．縄文土器(中期)

3．縄文土器(後期)

4．縄文土器(晩期)



5．縄文土器(晩期)

6．弥生土器

7．弥生土器

8．尖頭器

9．石匙

10．掻器

11．掻器

12．剥片

13．掻器

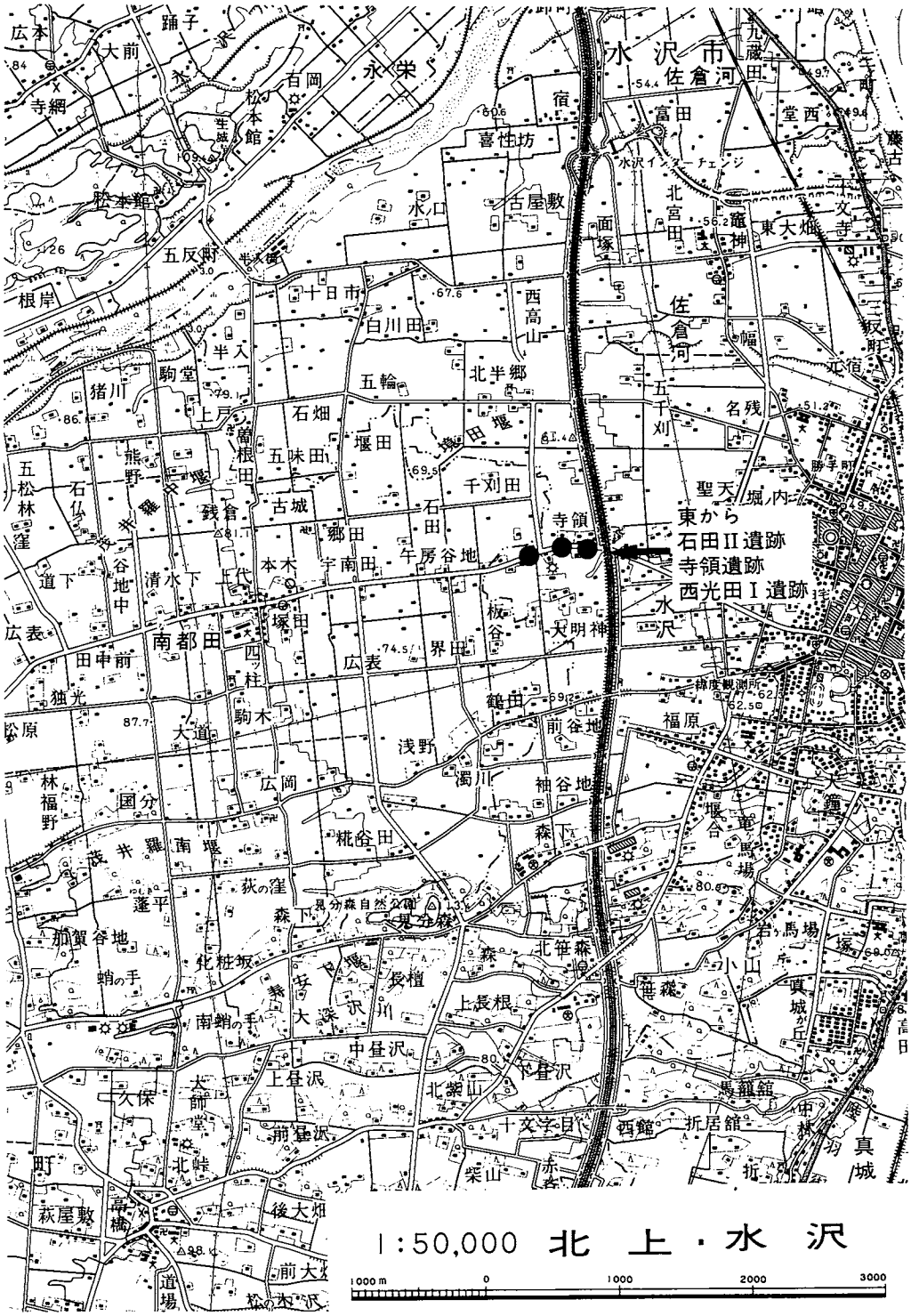
14．剥片

15．剥片

下岩沢Ⅰ遺跡　出土遺物

（5）石田（いしだ）II遺跡
寺領（じりょう）遺跡
西光田（にしこうでん）I遺跡

所在地	水沢市字寺領126―1ほか
委託者	岩手県土木部　水沢土木事務所
発掘調査期間	昭和62年8月1日～10月31日
調査対象面積 および 発掘調査面積	石田II遺跡　1,500㎡ 寺領遺跡　2,000㎡ 西光田I遺跡　500㎡
遺跡番号・略号	NE16―2018・IDII―87 NE16―2016・JR―87 NE16―2023・NKI―87
調査担当者	三浦謙一・佐藤嘉広
協力機関	水沢市教育委員会・胆沢町教育委員会



石田II遺跡ほか位置図

1．遺跡の立地

石田II・寺領・西光田Ⅰ遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線水沢駅の西約3kmの国道397号沿いに位置し、東からそれぞれ順に隣接している。

3遺跡は、胆沢扇状地の中央やや北寄りに立地する。胆沢扇状地は、河岸段丘がよく発達し、高位のものから順に一首坂段丘・胆沢段丘・水沢段丘と区分されている。遺跡ののる水沢段丘は胆沢川の南側で広い面を有している。遺跡付近は、微地形がやや複雑に入り組んでおり、段丘の縁辺部分では、段丘崖および沖積面がみられる。標高は62～65m、胆沢川沿いの沖積面との比高は約10mである。遺跡の現況は、水田・畑地・宅地等である。

2．調査の概要

調査は、国道397号の車線拡幅に伴う緊急調査である。国道をはさんで両側それぞれ4m前後、長さ約560mが調査対象地域であり、調査面積は3遺跡合計で4,000m²である。基本層序は、Ⅰ表土、II　黄褐色土、III　黒色土で、遺構はII層上面で確認される。

調査の結果、奈良時代の竪穴住居跡13棟、平安時代の竪穴住居跡25棟、古代の土坑68基、古代の溝跡35条、古代もしくは中世の掘立柱建物跡・柱穴跡が検出された。

＜竪穴住居跡＞

奈良時代の竪穴住居跡は、遺跡東側（石田II遺跡）に分布する。平面的な規模は変異が大きいが、掘り込みの深さは遺構確認面から30cm内外と、ほぼ一定している。カマド煙道部は北西方向に延びる。焼失住居は4棟で、いずれも炭化材の残りは良好である。遺跡東端に検出された2号住居跡は、一辺6.8mの方形で、奈良時代の住居跡中最大規模である。主柱穴は径60cm程度の掘方に握りこぶし大の礫を入れて形成されている。また、カマド付近の床面には広く焼土が形成されている。住居跡内に土坑は確認されていない。

これらの住居跡は、互いに重複がなく、層位的な前後関係は不明である。

平安時代の竪穴住居跡は、遺跡西側（寺領・西光田Ⅰ遺跡）に分布する。平面規模・掘り込みの深さともに変異が大きい。カマドは1棟にのみ検出された。煙道は南向き、両袖は人頭大の礫で構成され、床面に10cm程度埋め込まれている。天井部には平坦な長径70cmの礫が用いられている。焼失住居は認められない。比較的規模の大きな住居跡は柱穴・周溝を伴っているが、規模の小さなものには、それらが伴わない場合が一般的である。また、16号住居跡は、北東隅に、浅く掘り込んで両側に礫を配した方形の張り出し部を有している。出入口施設に関連するものと考えられる。

これらの住居跡は、一部について重複関係があり、層位的に前後関係を判断することができる。また、溝跡等との前後関係が判断できるものもある。

両時代の住居跡とも、埋土中に火山灰を含むものはなく、絶対年代の決定は住居跡内の土器等の遺物に依らなければならないと考えられる。

＜土　坑＞

土坑をその平面形態でみると、円形11基・楕円形16基・方形11基・不整形30基である。時期を特定できるものは少ない。これらの土坑のうちには、土器を多量に含むもの３基、炭化材を底面近くに含むもの２基、焼土ならびに炭化材を含むもの１基、鉄滓を含むもの１基、人頭大の礫を含むもの４基等、いくつかの種類がある。

＜溝　跡＞

溝跡は、遺跡のほぼ全域に分布するが、幅１m以上のものはおおむね南北方向に走っている。これらは断面がU字形を呈し、深いものは最深部で50cmを超える。埋土中には人頭大の礫を含んでいる場合が多い。遺物量は一般に少なく、土器は小片となって出土する。幅１m未満のものは、その方向・形状とも変異があり、一定の傾向はない。遺物の含まれないものもある。28号溝跡は、その底面付近は小礫混じりの砂層で、土器が不規則に混在する。明らかに水の流れとともに一部の埋土が堆積している。また、同溝跡には灰黄白色の粒子の細かい火山灰が流れ込んでいる。

＜掘立柱建物跡・柱穴跡＞

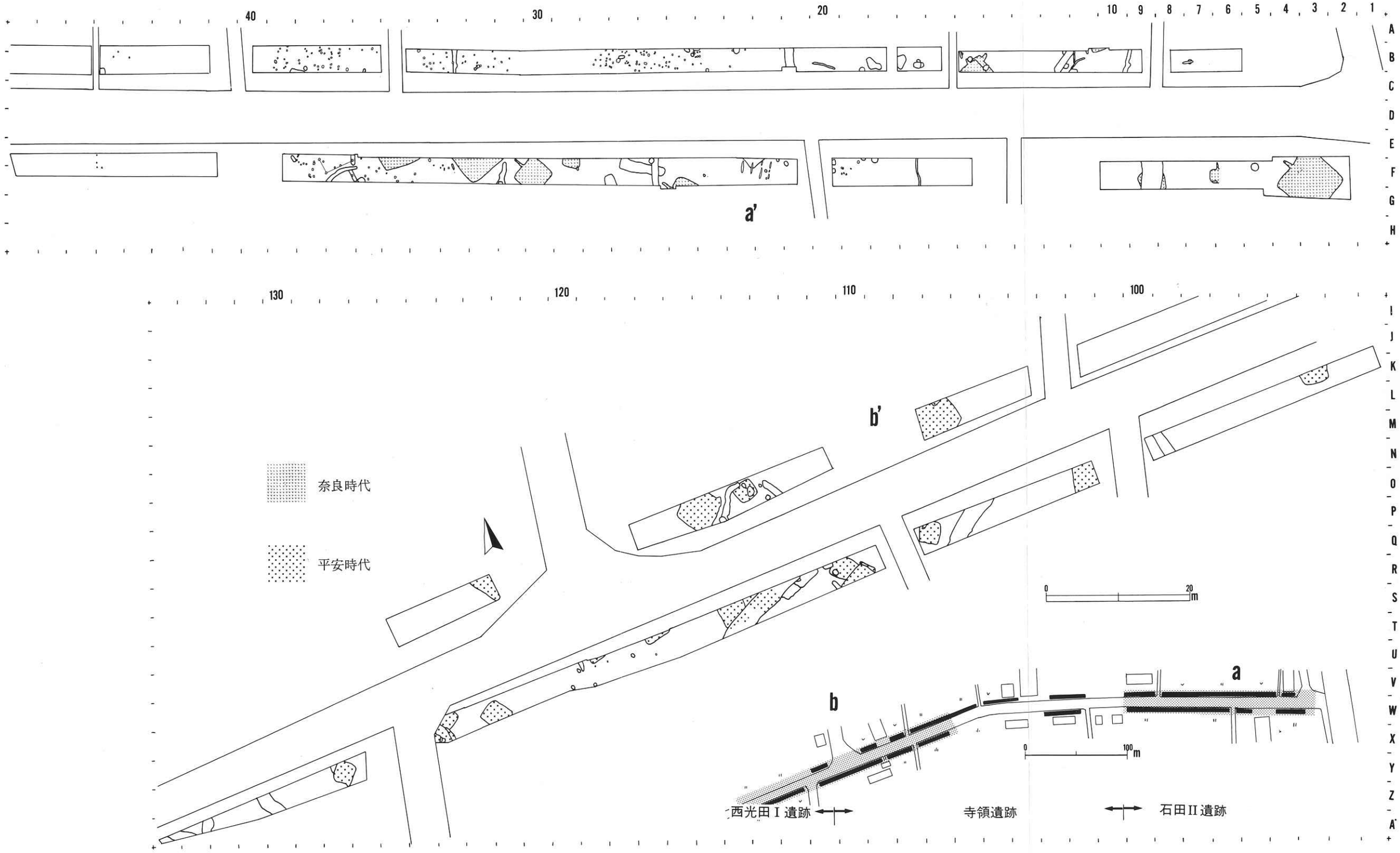
柱穴跡は遺跡東側に多数検出されている。掘方径30cm前後、柱あたり15cm前後、深さ20cm前後の小規模なものがほとんどである。掘立柱建物跡としたものは、これらの柱穴跡のうち比較的大きく整然と配列されるものである。北西―南東方向に１間、北東―南西方向に２間の柱穴列が確認される。これらの柱穴跡の一部から中世の遺物が少量出土している。

＜出土遺物＞

出土遺物は、縄文土器、土師器、須恵器等の土器（整理箱22箱）と、土製紡錘車、骨片等である。縄文土器はごく少量である。土師器は８世紀後半頃のものから平安時代のもので、甕・坏が主体である。

３．ま　と　め

今回の調査によって、胆沢扇状地における奈良時代～平安時代の集落の一部が明らかになった。竪穴住居跡は微高地の縁辺に存在し、土坑・溝跡とともに当時の集落景観の一端をうかがうことができる。



石田Ⅱ・寺領・西光田Ⅰ遺跡全体図および遺構配置図

奈良時代の住居跡(焼失状況)

奈良時代の住居跡

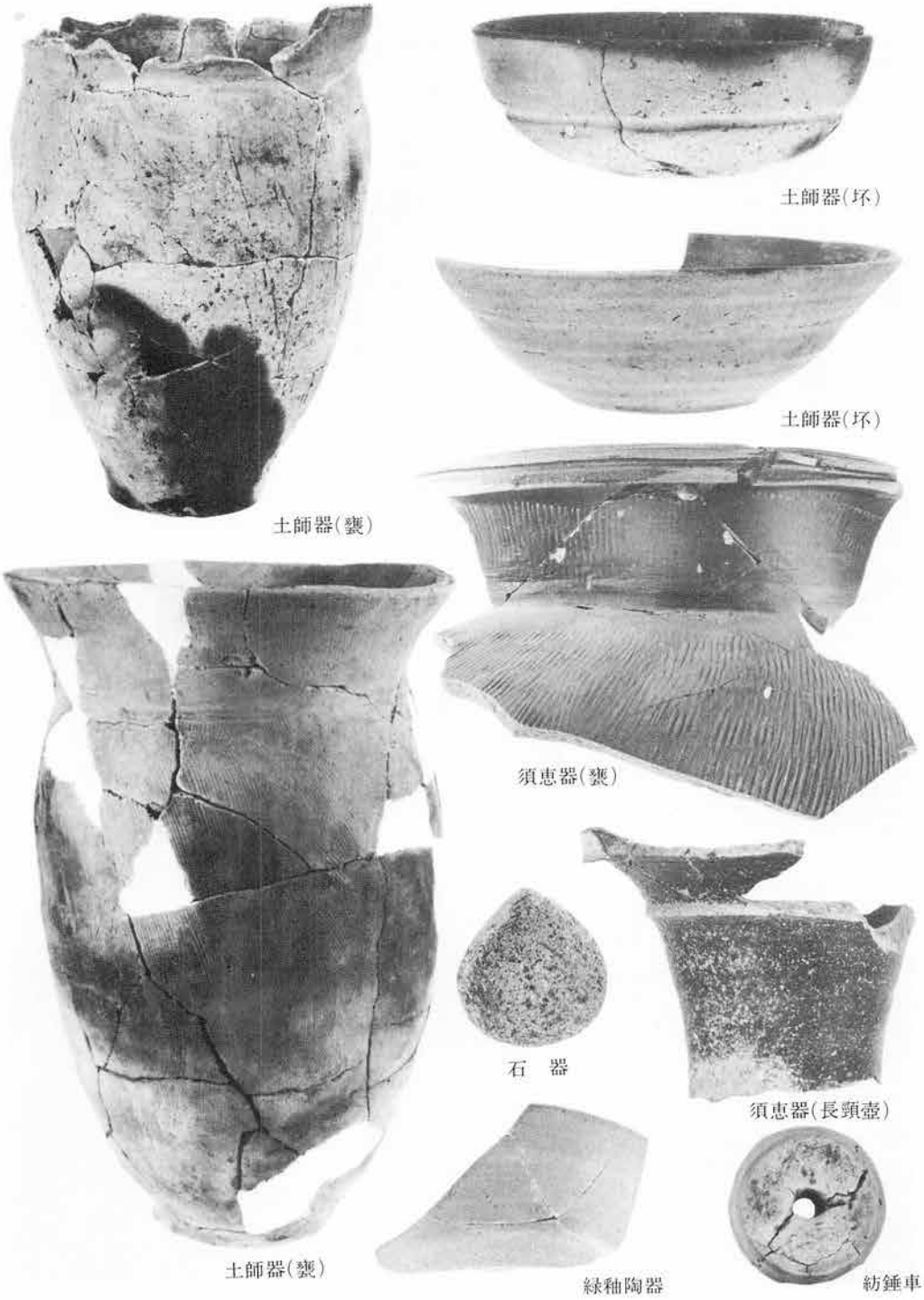
古代の溝跡

平安時代の土坑

平安時代の住居跡

柱 穴 跡 群

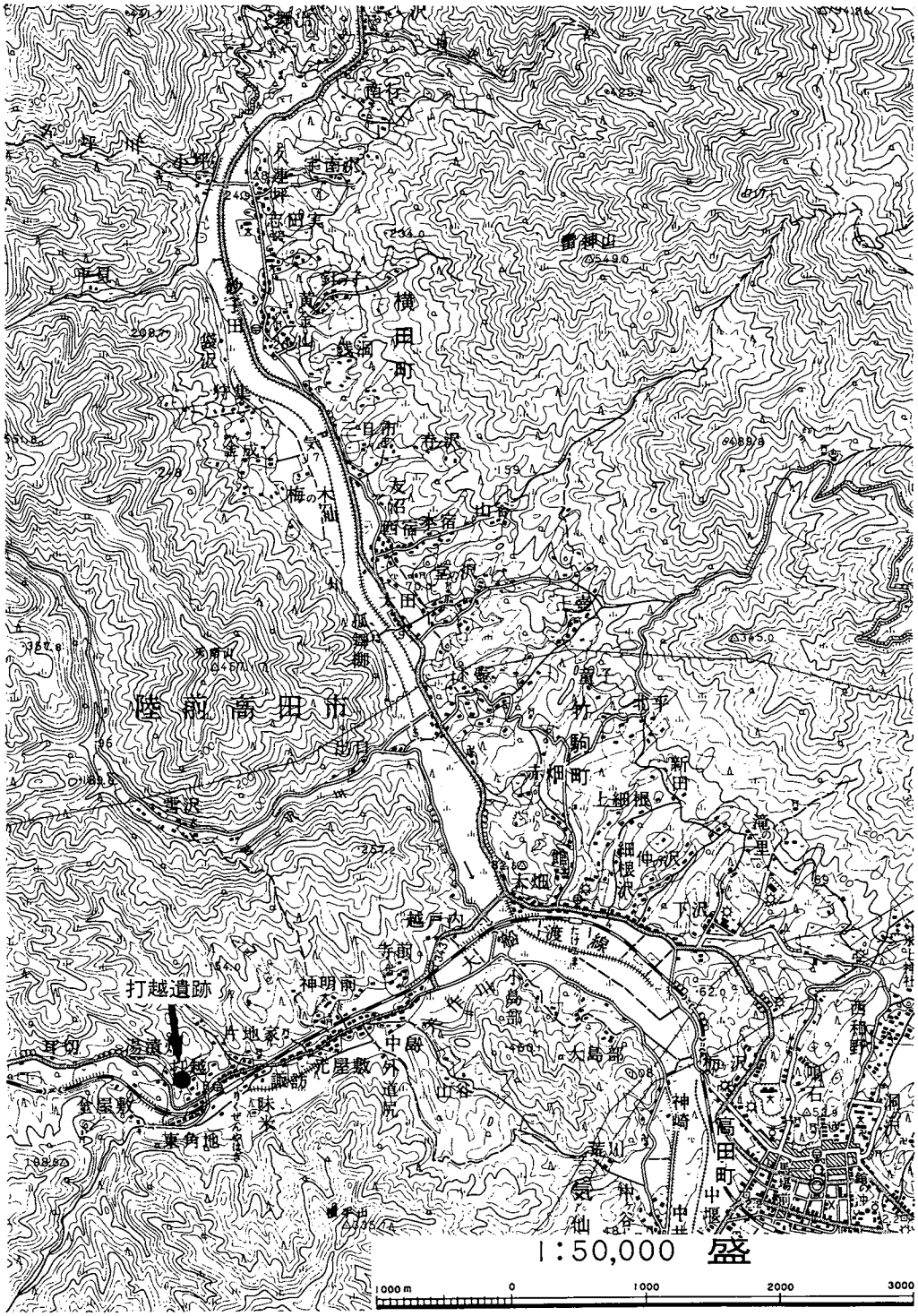
石田II・寺領・西光田I遺跡　遺構



石田II・寺領・西光田I遺跡　遺物

（6）打越（うちこし）遺跡

所　在　地　陸前高田市矢作町字東角地３ほか
委　託　者　岩手県土木部　大船渡土木事務所
発掘調査期間　昭和62年６月１日～８月５日
調査対象面積　4,632㎡
発掘調査面積　4,632㎡
遺跡番号・略号　ＮＦ66―0065・ＵＫ―87
調査担当者　高橋与右エ門・玉川英喜・中川重紀・酒井宗孝
協力機関　陸前高田市教育委員会


陸前高田市
横田町
雪御山
駒
赤畑町
新田
上細根
細根沢
滝里
下沢
末畑
越戸内
寺前
神明前
打越遺跡
打越
中島
光屋敷
外道
山谷
大島部
小島部
神崎
高田町
中堰
1:50,000
盛
1000 m
0
1000
2000
3000

打越遺跡位置図

1．遺跡の立地

打越遺跡は東日本旅客鉄道大船渡線陸前矢作駅の西北西約350mに位置する。遺跡は松倉山（標高425.5m）から南東に延びる尾根筋の山地縁辺部緩斜面上に立地する。遺跡の西側及び南側は東流する矢作川が蛇行し、遺跡をとり巻くように流れている。遺跡の載る緩斜面と矢作川によって形成された沖積地との間は、部分的に比較的勾配のきつい斜面が見られる。遺跡付近の標高は35～45m、矢作川との比高は20～30mである。調査地の現況は山林・畑地・牧草地である。

2．調査の概要

調査区域は道路建設予定地に沿った南北約40m、東西約120mの範囲で、東端は沢筋を境として東角地遺跡の調査区域へと続く。調査の結果、検出された遺構は方形周溝１基、ピット３基、採掘跡13基である。出土遺物は土器片・石器・陶磁器・古銭等で、出土量は非常に少ない。

＜方形周溝＞

調査区西寄りで検出され、規模は東西約12m、南北約14mである。北辺中央部と南東隅で溝がとぎれる。西辺や南辺は攪乱等で一部削平されている。溝は最大幅2.7m、深さ10～35cmを測る。出土遺物はなく、時代等は不明である。

＜ピット＞

３基検出されているが、規模・形状等はまちまちである。大型のものは、規模が400×265cm、深さ105cmを測り、歪んだ楕円形を呈する。他は規模が２m以下、深さ40cm前後である。出土遺物はなく、時代等は不明である。

＜採掘跡＞

坑道掘りによるものや露天掘りのものがあり、規模も一様ではない。坑道掘りのものは幅１～３m、長さ5.5mのスロープ状の出入口を設け、奥行10m以上の枝分れした横穴の坑道が続く。坑道の内部には一部に川原石等による石垣が組まれている。露天掘りの中には、径８m、深さ４m以上の規模で摺鉢状をなし、南端に階段状の出入口を設けたものもある。この露天掘りの埋土上部からは石鏃・北宋銭・陶磁器片等が出土している。時期等を明確にする資料はないが、古い時代のものではないと思われる。

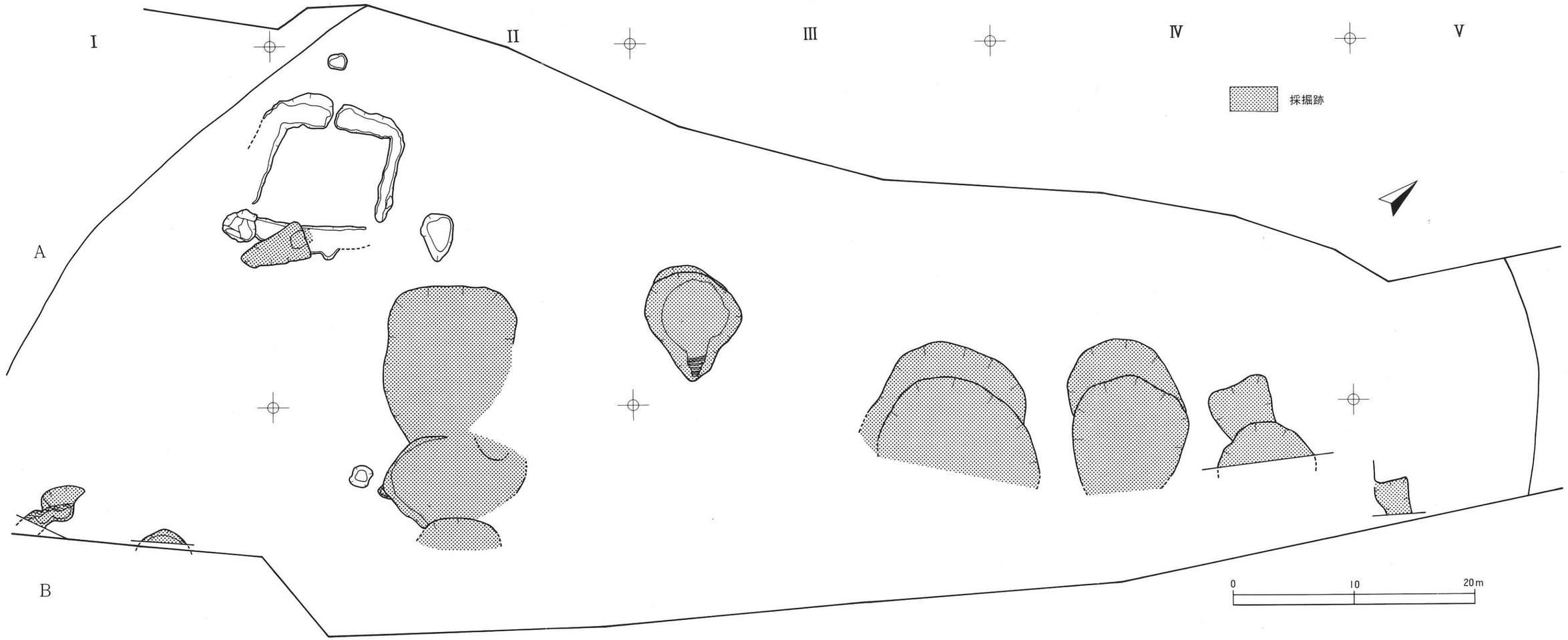
＜出土遺物＞

縄文時代前期・晩期、弥生時代の土器片が少量と石鏃・剝片などの石器類約150点、陶磁器４点、古銭９点が出土している。石器類のうち120点余は剝片で、特定の範囲から集中して出土しており、その多くは微細な剝離痕を持つ。陶磁器は天目茶腕の小破片１点と舶載の染付などの小破片３点である。古銭は採掘跡の埋土上部から出土した元豊通宝１点、粗掘り中に出土した

寛永通宝３点・仙台通宝５点である。

３．ま　と　め

今回の調査によって、出土遺物から、縄文時代から弥生時代にかけての遺跡であることが判明した。明らかに当時の遺構と思われるものは検出されなかったが、調査区外にその存在が予想される。また、時代は明確でないが、採掘跡が確認されたことは、気仙地方の鉱山史、とりわけ産金史を探る上で、その一助になると思われる。



打越遺跡遺構配置図

遺　跡　近　景

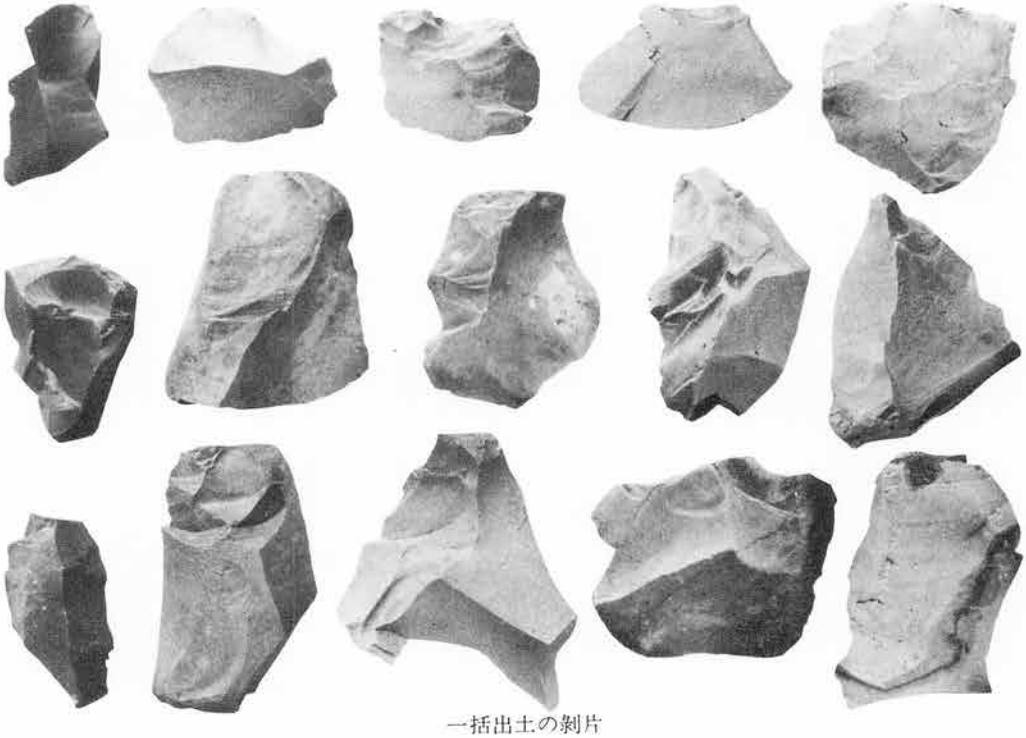
採　　掘　　跡
打越遺跡　遺構

弥生土器

石　匙

打製石斧

石　鏃

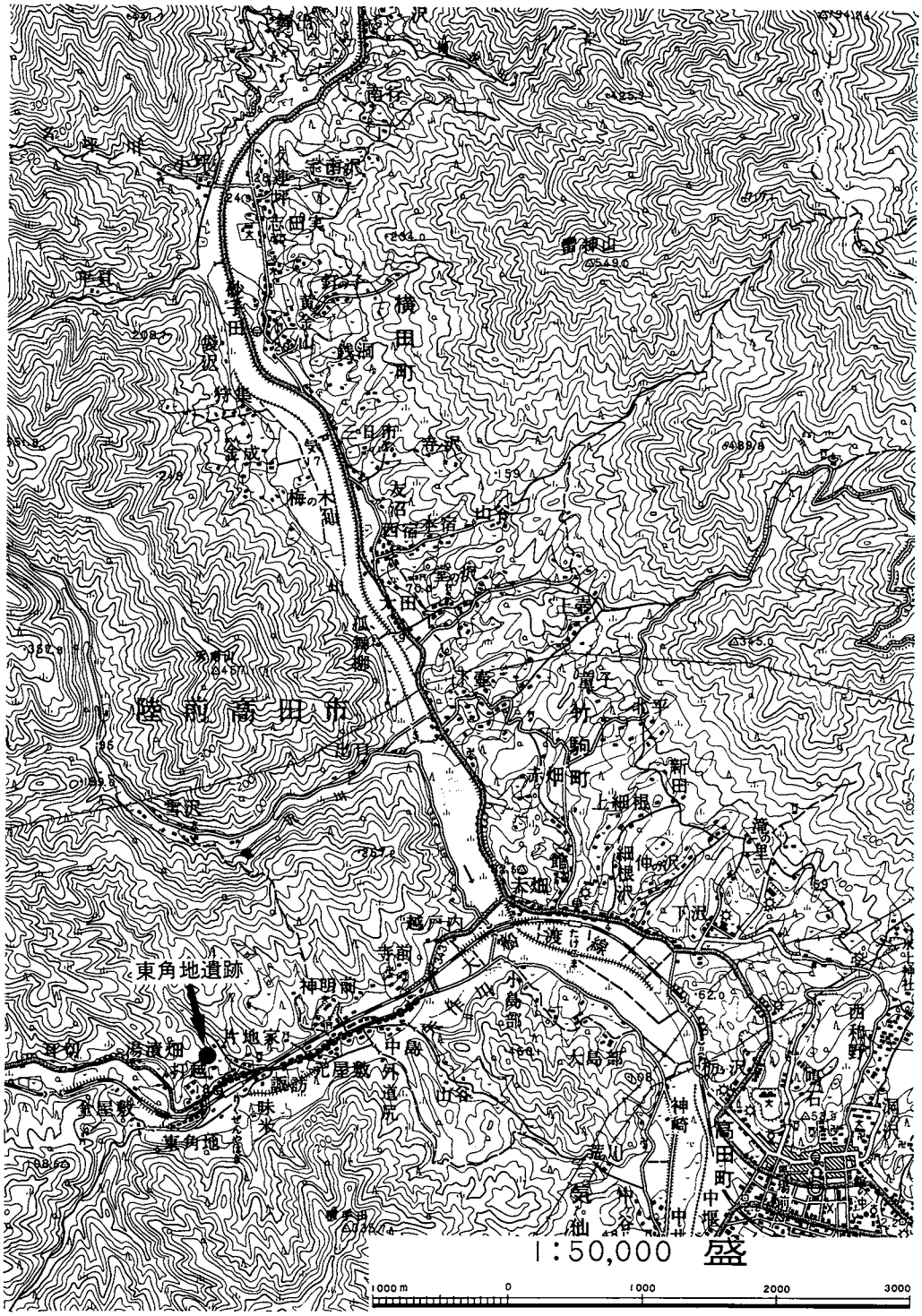


一括出土の剥片

打越遺跡　出土遺物

（7） 東角地遺跡

所在地	陸前高田市矢作町字東角地10ほか
委託者	岩手県土木部　大船渡土木事務所
発掘調査期間	昭和62年7月1日～10月31日
調査対象面積	6,829㎡
発掘調査面積	6,829㎡
遺跡番号・略号	ＮＦ66―0037・ＨＫ―87
調査担当者	高橋与右エ門・玉川英喜
協力機関	陸前高田市教育委員会



東角地遺跡位置図

1．遺跡の立地

東角地遺跡は東日本旅客鉄道大船渡線陸前矢作駅の北西約250mに位置する。調査地は西端で打越遺跡に接しており、立地する地形は打越遺跡に同じ山地縁辺部緩斜面である。微地形で見ると遺跡は南北に走る沢筋で大きく２つに分けられる。現況は山林・畑地・牧草地等である。

2．調査の概要

調査区域は幅６～20m、長さ約320mと東西に細長い範囲である。調査の便宜上、南北に走る沢筋を挟んで西側約110mをＡ地区、東側約210mをＢ地区とに分けた。調査の結果、検出された遺構は住居状竪穴遺構１棟、ピット１基、水路跡１条等である。出土遺物は縄文時代の土器と石器などである。

＜住居状竪穴遺構＞

径約３mの円形状を呈し、底面の一部に炭化物が散在するが、炉跡や柱穴等はない。壁高は斜面上方部で25cm前後、斜面下方部は削平されている。出土遺物はなく、時代は不明である。

＜ピット＞

190×80cmの不整な長楕円形で、深さは約45cmである。底部は椀状を呈し、若干凹凸がある。出土遺物はなく、時代や性格は不明である。

＜水路跡＞

Ｂ地区のVI区に湧水地点があり、そこに端を発している。東へ14m、その後東南東に向きを変え、調査区内で22m検出し、調査区外へと続く。石組みの水路で、その構造は幅60～80cm・深さ50cm前後の規模で箱型に掘り込んだ後、側壁に袖石を積み上げ、上部は蓋石を置いて閉じている。底部には石を敷いていない。石組みの間を部分的に粘土で補っている所もある。内部の埋土は黒褐色土で、下部には砂礫が多い。水路の上位にも水路に沿って黒褐色土が堆積している。石組み直上の黒褐色土中から小破片であるが、16世紀末の舶載の染付磁器１点と近世末と思われる陶器１点が出土している。

＜その他の遺構＞

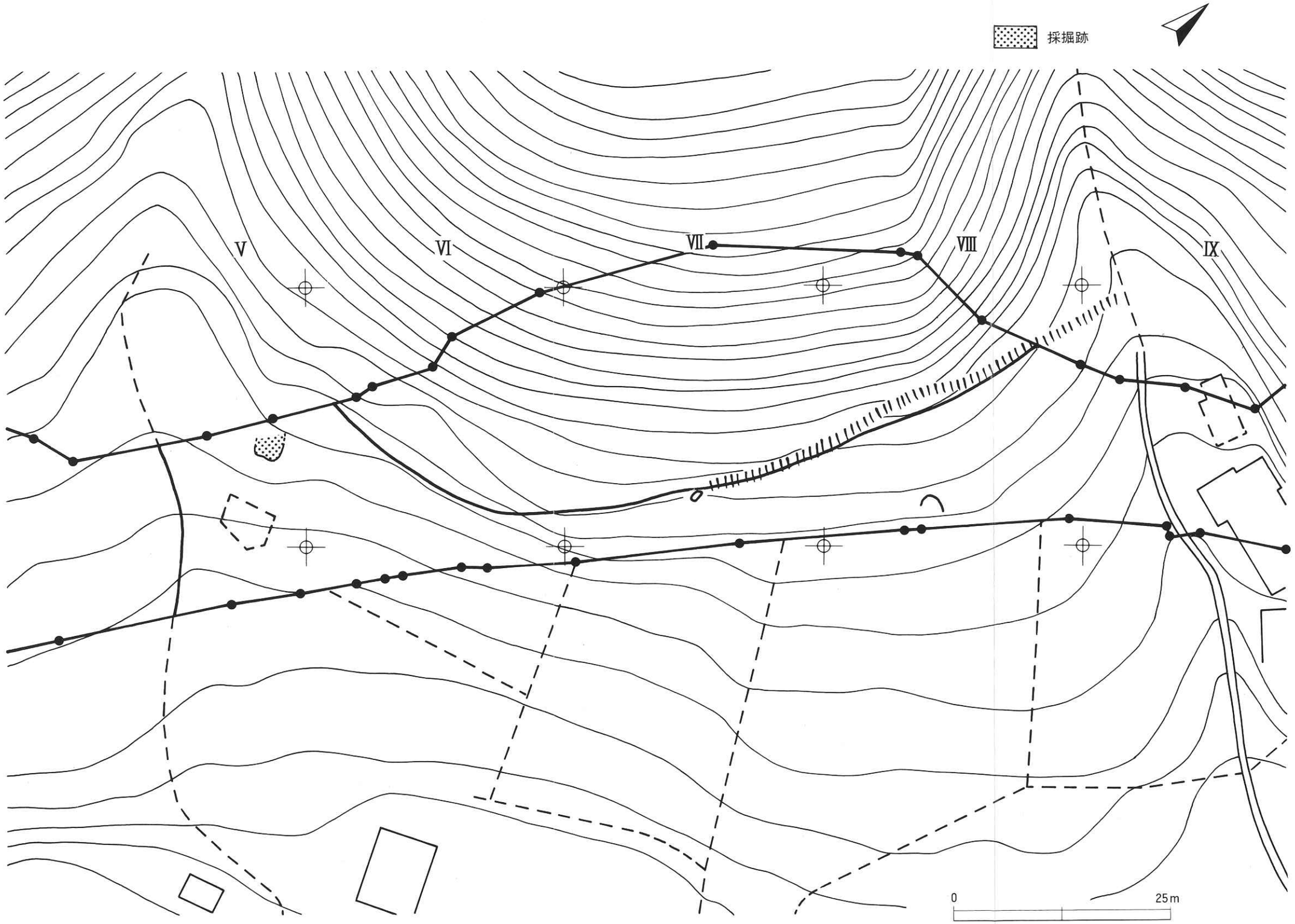
採掘跡と思われる落ち込みがＡ地区で１ケ所Ｂ地区で２ケ所見られた。Ａ地区のものは確認できた部分の規模は径約３m、深さ約1.5mで、不整な円形を呈する。Ｂ地区の落ち込みは土層変化部分による推定で径10数mの不整な円形状を呈し、深さは３m以上である。

＜出土遺物＞

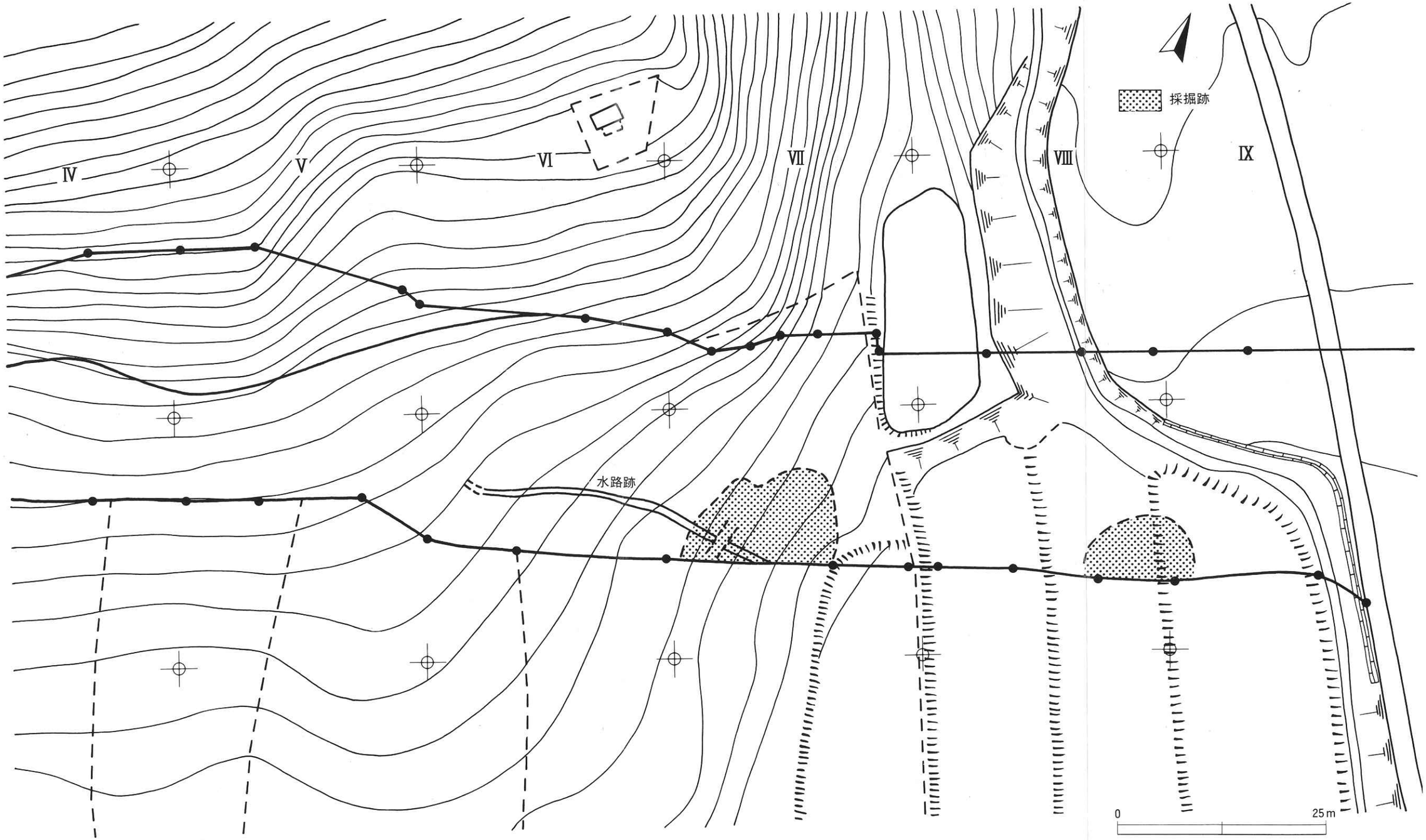
先述した遺物の他には縄文時代前期・後期・晩期の土器片や石鏃・石匙・磨石などの石器10数点、それに石製品として玦状耳飾り１点が出土している。土器の総量はコンテナ２箱程で、前期の大木系のものが主体である。

3．ま　と　め

今回の調査によって、東角地遺跡が縄文時代前期からの遺跡であることが判明した。住居跡は検出されなかったが、調査区域外の南側には該期の集落の存在も予想される。ただし、開田等による削平を受けており、その一部は消滅した可能性もある。水路跡について時代を明確にする資料はないが、地元の古老による言い伝えでは近世初め頃に当地にあった寺院に関連した水路とされている。



東角地遺跡遺構配置図（A地区）



東角地遺跡遺構配置図（Ｂ地区）

遺　跡　近　景

水　路　跡

住居状竪穴遺構

水路跡断面

東角地遺跡　遺構

縄文土器片

玦状耳飾

縄文土器

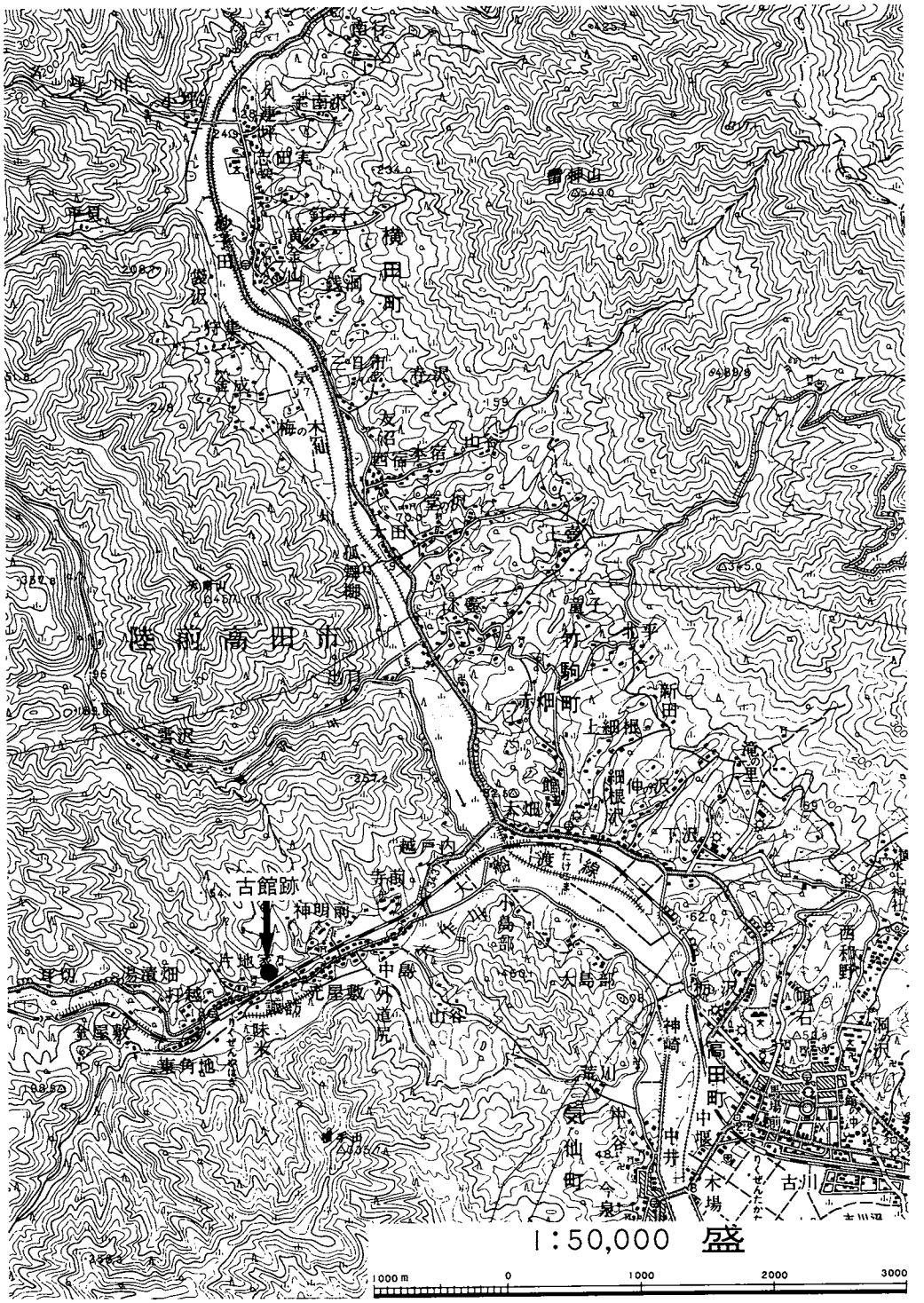
石匙

石鏃

東角地遺跡　出土遺物

(8) 古館跡

所在地	陸前高田市矢作町字諏訪35ほか
委託者	岩手県土木部　大船渡土木事務所
発掘調査期間	昭和62年7月1日～10月31日
調査対象面積	5,030m²
発掘調査面積	5,030m²
遺跡番号・略号	ＮＦ66―0103・ＦＤ―87
調査担当者	中川重紀・玉川英喜
協力機関	陸前高田市教育委員会



古館跡位置図

1．遺跡の立地

古館跡は、東日本旅客鉄道大船渡線矢作駅の北東約900mに位置し、国道343号の北側に所在する。館跡は、東流する矢作川の左岸の山地緩斜面縁辺部にあり、舌状に張り出している自然地形を利用して堀や平場を作り出している館である。標高は頂部で43m、低い所で25mである。現状は山林であるが、以前には畑地として利用されたこともあるところである。

2．調査の概要

調査は国道343号矢作地区道路改良工事に伴い、館跡の中央部を東西に横断する東西140m、南北43mの範囲を対象に実施したものである。館跡の現状は、東側と西側の沢に挟まれた舌状に張り出している山地部分の北側を東西に切って堀を構築し、平場は東西85m、南北45m、の規模があり、東側と南側に4段、西側に1段の犬走り状の段が見られる単郭の館である。

検出遺構は、縄文時代の遺構が住居跡6棟、土坑13基、館跡に伴うと思われる遺構は建物跡1棟分、堀、土橋、近世以降の遺構は採掘跡13ケ所、墓壙3基であり、他には縄文時代か中世と思われる柱穴群が北側と、西側の2区域に分かれて検出されている。

＜住居跡・住居跡状遺構＞

住居跡はいずれも縄文時代の住居跡であり、調査区II、III－D、E区に6棟検出された。そのうち中期末葉の住居跡4棟、現段階では時期を把握できない住居跡2棟である。

中期末葉の住居跡4棟は直径6m前後で平面形は円形状を呈し、炉は石囲い複式炉で、土器埋設を伴っている。また、調査区東側の住居跡は複式炉の他に石囲い炉を複式炉の長軸線上で住居の奥まった位置にもう1ケ所設けている。調査区南側の住居1棟は住居の造り替えをしており、直径4m前後から6m前後に拡張し、その際に炉も拡張以前の炉の一部を利用して造り直している。時期不明の住居跡2棟は大半が調査区域外にあり、全体形を捉えることが出来ないが、1棟は方形か長方形の住居跡と思われ、東西辺が約6mである。この住居跡は、拡張か重複か判断できないが焼土が3ケ所に見られた。

住居跡状遺構は3ケ所に見られるが、南側の2棟のうち1棟は平面形が楕円形状であり、1棟は採掘坑跡に切られ大半が調査区外にあるため平面形は不明である。北側の1棟は壁面や床面がはっきりしないが柱穴と思われるものが6本台形状に配置されている。

＜土　坑＞

土坑は13基検出された。そのうち11基はフラスコ形土坑であるが2基は土坑か今後検討をする必要がある。11基のフラスコ形土坑の規模は検出面で直径1～2mで、深さ0.50～1.20mである。これら土坑の埋土中には土器や石器が入っている。

＜建物跡＞

館跡に伴うと思われる唯一の建物遺構であるが、大半が調査区外にあることから全体形を捉えることが出来なかったが、棟方向が北東～南西にあり、北西側に半間の庇がつく建物で棟方向の柱穴間の長さは約２ｍである。

＜堀　跡＞

堀跡は、調査区外にその大半があり、しかも調査区内では採掘坑跡によって攪乱されているため堀の規模等を解明するに至らなかったが、現状では上端で約20mの幅で見られる。

＜土　橋＞

館跡の、北西側の平場と堀の境にあり、全長約10mで、一部地山を削り出しそのほかは盛り土と思われるが攪乱等を受けているため詳細は不明である。

＜採掘跡＞

調査地区のほぼ全域に発見された。いずれも直径５ｍ前後で平面形が円形状、断面形が円筒状の掘り込みであり、深さ４ｍ以上である。これらのなかには出入口と考えられる幅２ｍの溝のつくものが数基あり、断面形は台形状で掘り込み部分に向かって緩やかなスロープとなっている。また、１ケ所であるが掘り込み部分で検出面から約４ｍの深さの位置で壁の横に径２ｍ程の坑道の出入り口部分が見つかっている。坑道は落盤のためよく判らないが人が立って入れる位の大きさであったと考えられ、この坑道は枝分かれし、奥行き約25m以上あることが確認された。

＜墓　壙＞

３基あり、１基は堀の部分で検出した採掘坑跡の埋土中にあり、２基は平場の西側にある。埋葬品は寛永通宝とキセルである。

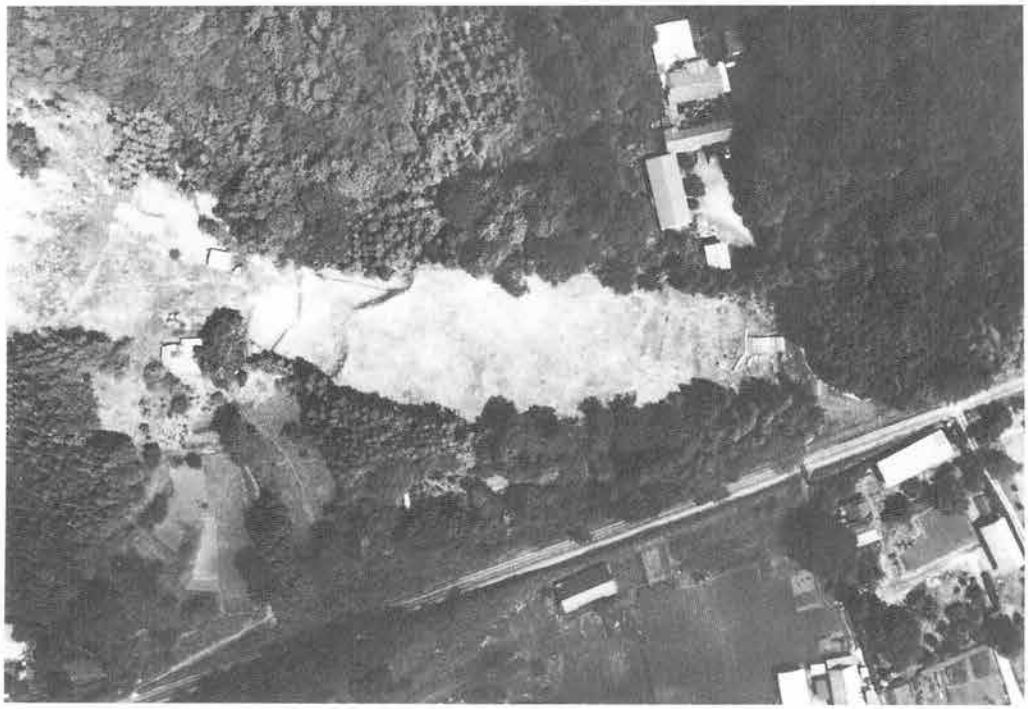
＜出土遺物＞

出土遺物は、縄文時代の土器、石器、弥生時代の土器、石器、中世以降の陶磁器、古銭である。縄文時代の土器は中期前葉（大木７式）と末葉（大木10式）のもの等であり、前葉のものは主に土坑から多く出土し、末葉のものは住居跡からの出土である。石器は遺構内外から出土している。弥生土器は調査区北側ＩＩＣ区から出土している。陶磁器、古銭は少ない。遺物の出土量は総体的に多くない中で縄文時代の土器、石器が多い。

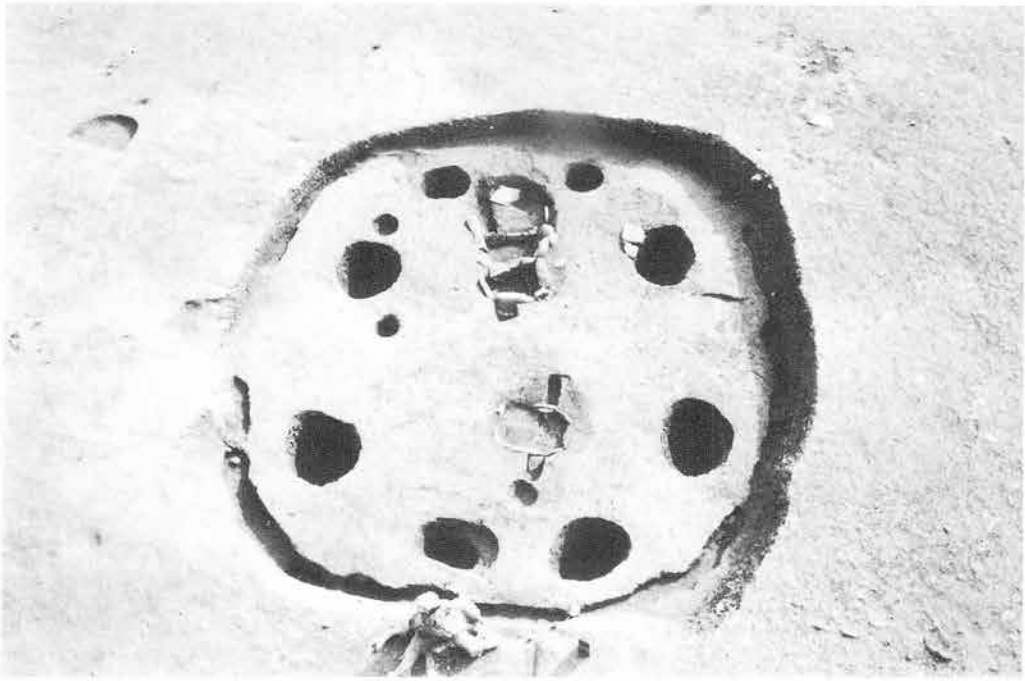
３．ま　と　め

今回の調査で、古館跡は建物跡や遺物が少なく常時人が住んでいたとは思われないことから館跡の機能を考える上で今後検討をしなければならない。また、縄文時代の遺構が検出され、縄文時代の集落のあり方を考える上での貴重な一資料となろう。いずれこの古館跡では縄文時代から現代まで様々な利用のされかたをしてきたことが窺える。

古館跡地形・グリッド・遺構配置図



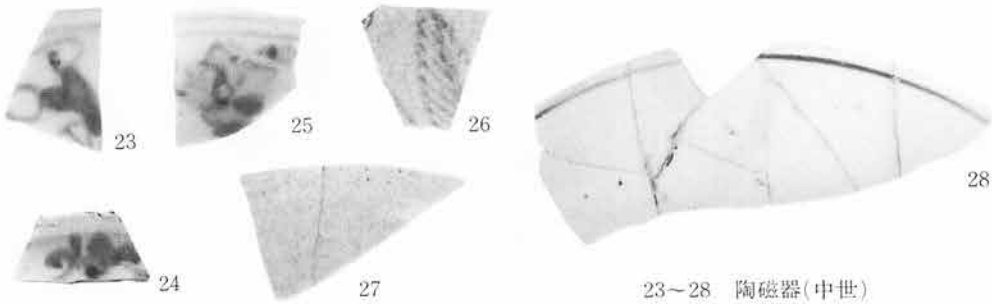
遺　跡　全　景



縄文時代の住居跡
古館跡　遺構

1～16　土器、土偶、石器(縄文時代)

17～22　土器、石器(弥生時代)



23～28　陶磁器(中世)

古館跡　出土遺物

(9) 赤畑遺跡

所在地	宮古市大字山口第11地割字赤畑8ほか
委託者	岩手県土木部　宮古土木事務所
発掘調査期間	昭和62年9月1日～10月9日
調査対象面積	2,250㎡
発掘調査面積	1,200㎡
遺跡番号・略号	ＬＥ23―2215・ＡＨ―87
調査担当者	中村良一
協力機関	宮古市教育委員会

赤畑遺跡
1:50,000 田老・宮古
1000m 0 1000 2000 3000
宮古大橋
宮古湾
藤原
小山田橋
上鼻
八木沢

赤畑遺跡位置図

1．遺跡の立地

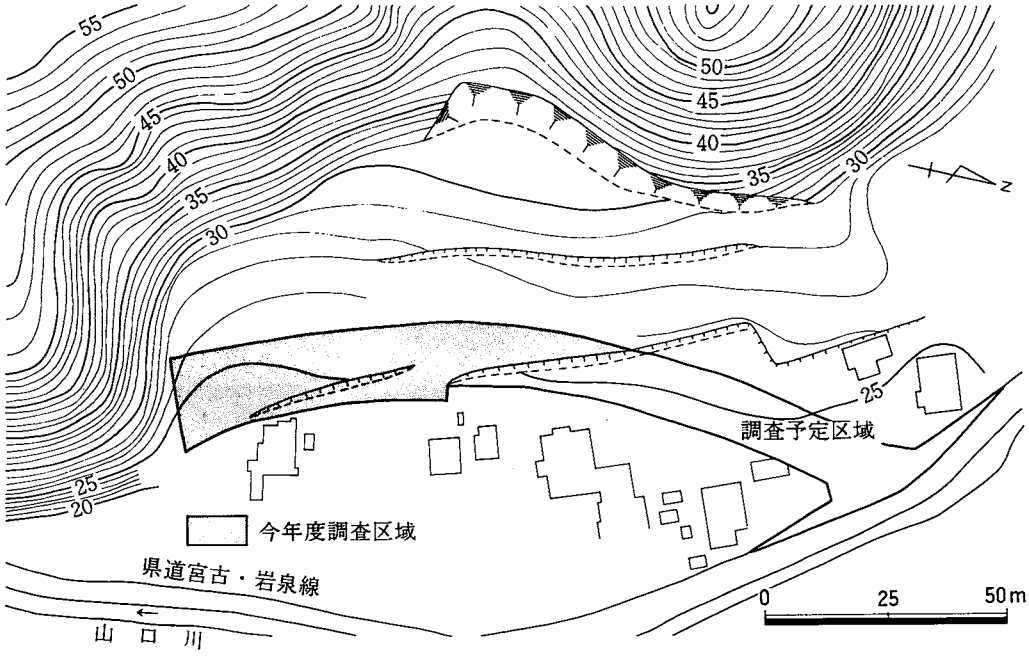
赤畑遺跡は、東日本旅客鉄道山田線宮古駅の北西約2kmに位置する。遺跡は黒森山山地を開析する山口川上流域右岸の谷底平野に立地する。標高は24～26mで、現況は大部分が畑地である。周辺には、北側に高根遺跡、南側に天神山遺跡がある。

2．調査の概要

調査は県道宮古・岩泉線の特殊改良工事に伴い、南北約150m、東西約15m、面積2250m²のうち、南側約２分の１を対象として実施したものである。調査の結果、遺構は検出されていないが、縄文土器186点、土師器１点、石器４点が出土している。縄文土器はいずれも破片で、器形の捉えられるものはない。文様施文等の比較的明瞭なものから判断すると、野島式・ムシリⅠ式に相当すると思われる細隆起線文系の早期の土器片や、中期及び晩期の土器片が含まれている。土師器は平安時代の内黒の坏片である。石器は石鏃が１点、磨石が３点である。

3．ま　と　め

今回の調査では遺構は検出されなかったが、土器の出土状況等から調査範囲外西側の平坦部に住居跡等の遺構が存在する可能性がある。また、南及び西側が丘陵に限られることから、北側の未調査部分に遺構が存在することも予想される。



赤畑遺跡調査範囲図

調査区近景（南から）

1

2

3

4

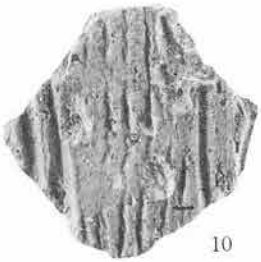
5

6

7

8

9



10

11

12

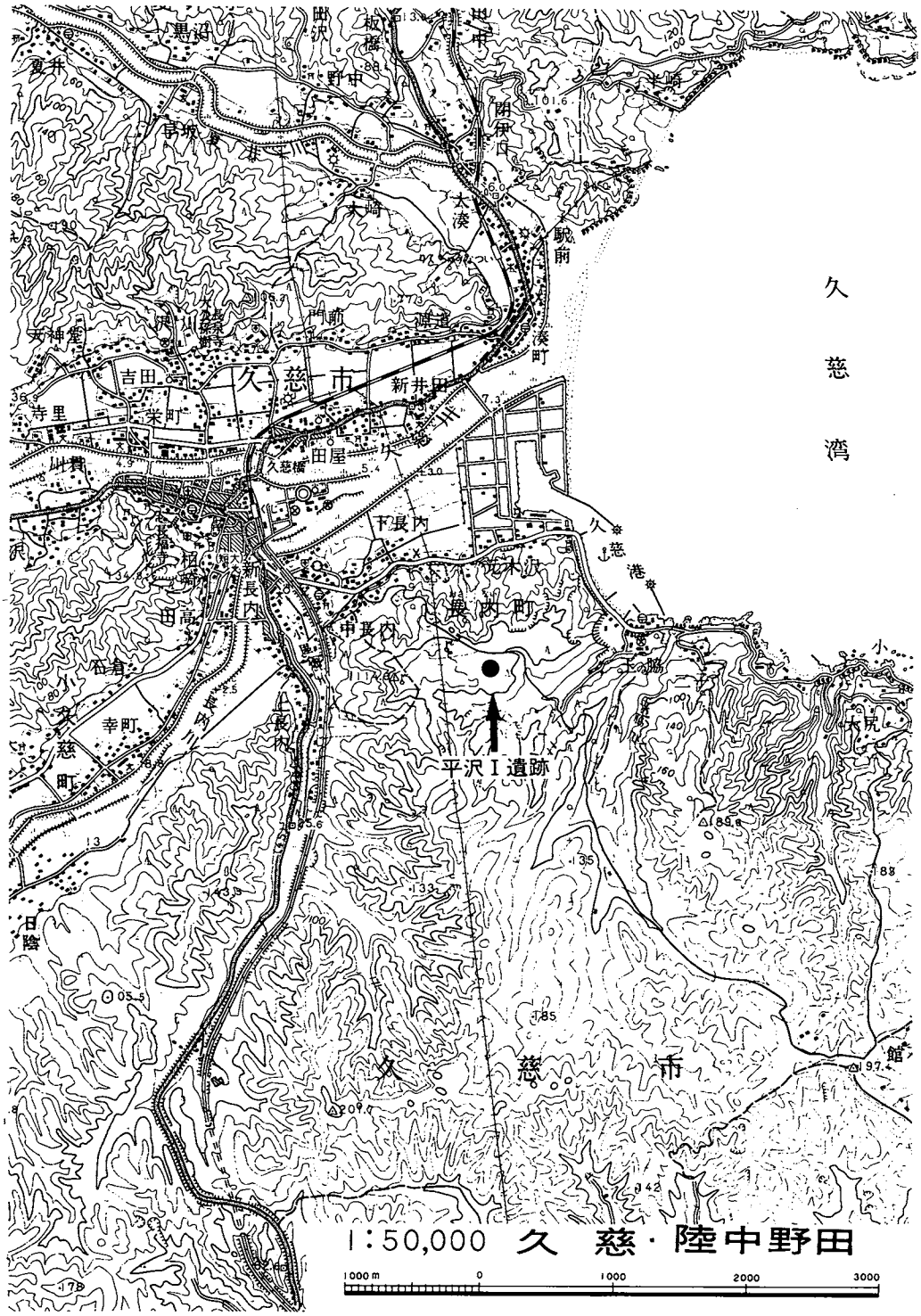
1・2　石器
3～5　縄文土器(早期)
6～10　縄文土器(中期)
11・12　縄文土器(晩期)

赤畑遺跡　調査区域・出土遺物

III　市町村関係

(1) 平沢(ひらさわ) I 遺跡

所　在　地　久慈市長内町20—105—1
委　託　者　久慈市
発掘調査期間　昭和62年4月15日～7月31日
調査対象面積　3,272m²
発掘調査面積　3,272m²
遺跡番号・略号　JG30—0282・HSI—87
調査担当者　三浦謙一・平井　進・佐藤嘉広
協力機関　久慈市教育委員会


久慈湾
久慈市
吉田
寺里
栄町
新井田
田屋
久慈橋
下長内
新長内
田高
仙倉
幸町
慈町
日陰
平沢Ⅰ遺跡
久慈港
大尻
館
1:50,000 久慈・陸中野田
1000m 0 1000 2000 3000

平沢Ⅰ遺跡位置図

1．遺跡の位置

遺跡は久慈市役所の南東約２kmの位置にある。市街地が形成された地形面に比べると100mほど高い麦生段丘に相当する海成段丘面に立地する。海岸へは直線距離で約１kmである。調査区は東西14m、南北200mと細長く、標高は約103～108mである。東西に走る浅い開析谷が調査区の中ほどに形成されているほかはほぼ平坦である。

2．調査の概要

調査は陸上競技場建設に伴うものである。検出された遺構と遺物は縄文時代と古墳～平安時代に属するものが大部分である。時代別の遺構の種類と数は次ぎのようになる。

縄文時代：竪穴住居跡８棟・ピット19基・落とし穴28基

古墳・奈良時代：竪穴住居跡２棟

平安時代：竪穴住居跡12棟・住居状遺構１棟・ピット10基

現代：炭窯１基

以上のほかに、所属時期を明らかにできないピット６基や焼土遺構12基がある。

＜竪穴住居跡・住居状遺構＞

縄文時代に属する８棟の時期別の内訳は、前期６棟と後期２棟である。前期とした６棟は、現時点では前葉のものと推定しているが、今後、出土遺物を検討して時期を確定してゆきたい。開析谷を中心にした付近にまとまって検出され、５棟はその南側にある。住居跡同士の重複例があるものの、すべて同時期である。平面形がわかるものは、隅丸長方形４棟と円形１棟がある。床面積が計測できる３棟のうち、２棟が約７㎡であるのに対し、１棟は29.5㎡とおおよそ４倍である。後期の２棟は初頭～前葉のもので、北端に検出された。

古代の住居跡14棟の内訳は、古墳・奈良時代１棟ずつ、平安時代12棟である。床面積は前者の２棟が20.9㎡と33.8㎡であるのに対し、後者は5.9～24.4㎡とバラツキがある。火災にあった痕跡を示すのは６棟で、約43％の比率を示す。柱穴を伴うのは古墳・奈良時代の２棟で、四隅から内側に入った位置にある四主柱式である。平安時代の住居跡は埋土に含まれて鍵層になる広域火山灰や住居形式からいくつかの時期に細分が可能であろう。

＜ピット＞

35基が検出された。所属時期の内訳は、縄文時代19基・古代10基・不明６基である。縄文時代のものは開析谷の北側と南側では時期が異なる。北側が後期主体であるのに対し、南側が前期主体である点は、住居跡の分布と密接に関連するものである。古代のピットは谷の南側に限定される。内部に焼土を伴う焼土ピットや貯蔵穴としての用途が推定される方形や円形のやや大型のもの・その他がある。

＜落とし穴＞

28基は調査区全域の広い範囲に分布する。すべて溝状の形態を示すもので、両端が円形に膨らむ形態のもの２基を含んでいる。所属時期を確定できる資料はないが、名地での検出例をもとに、縄文時代に分類しておく。重複例は、縄文時代前期の住居跡と重複する場合はすべてそれよりも新しく、古代の遺構との重複ではすべてそれよりも古い。なお、縄文時代のピットとして分類した１基は円筒形の落とし穴の可能性があり、検討が必要である。

＜焼土遺構＞

現地性焼土12基はすべて小規模なものである。所属時期を決定する資料を欠くが、検出層位や重複関係からは縄文時代に分類できる例が今後出てくるであろう。

＜出土遺物＞

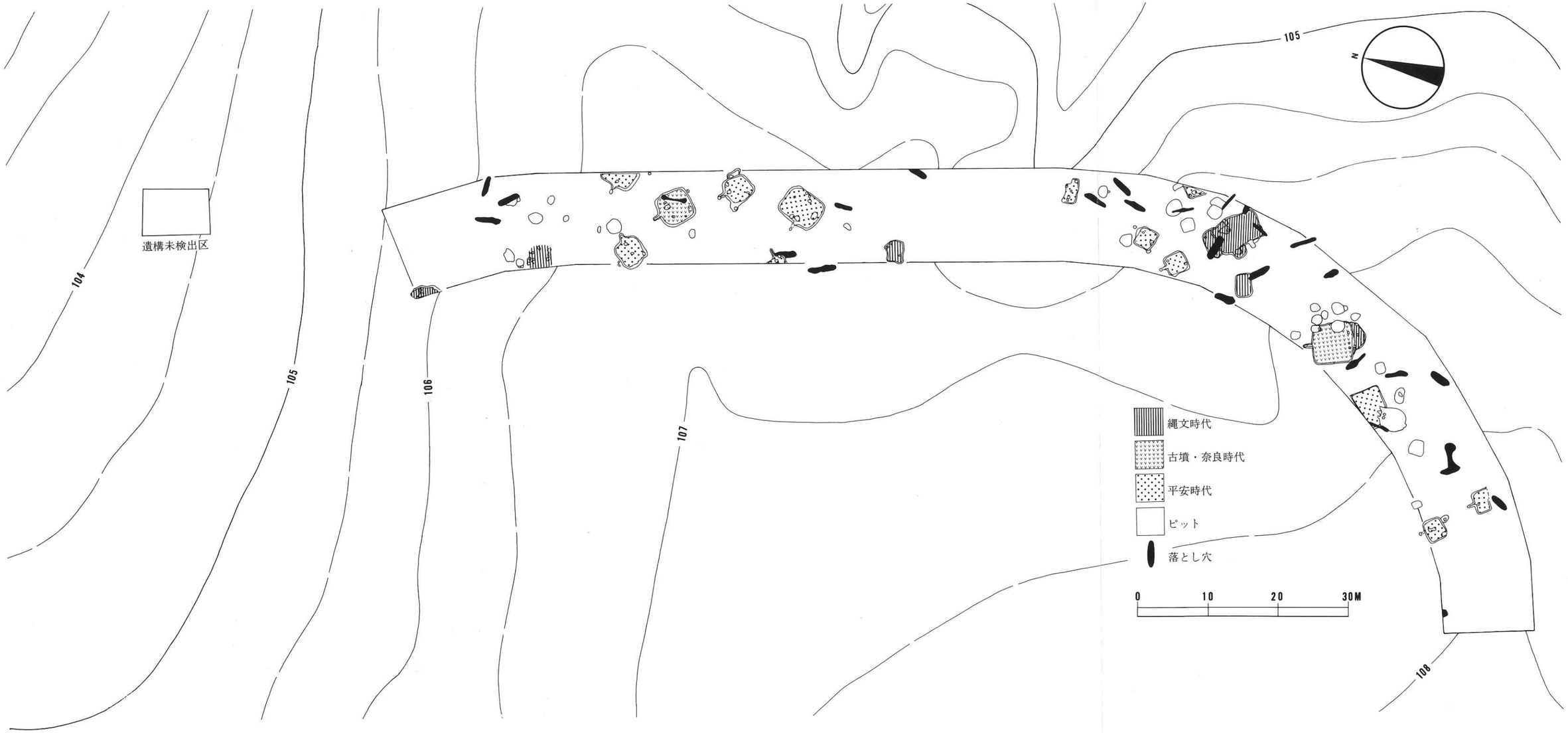
縄文時代の遺物は、土器・石器・土製品・石製品・琥珀がある。土器は前期前葉と後期初頭・前葉がほとんどで、分布は住居跡やピットのそれと重なり合っている。石器は剥片石器・礫石器とも種類・数量が豊富である。剥片や砕片が多いことも特徴のひとつである。また、片刃石器や両刃石器・円盤状打製石器など特徴的な器種も多い。琥珀は後期前葉のフラスコ形ピットほかから数点が出土している。次ぎの弥生時代は末期の土器片数点があるにすぎない。

古代の遺物は、土器・琥珀・鉄製品・鉄滓・鞴の羽口・砥石・土製紡錘車・貝類・炭化した堅果類がある。土器は土師器が大部分を占め、須恵器は少量である。古墳・奈良時代の１棟に器種組成を示す良好な資料がある。琥珀は、量の多少や出土層位ということを問わなければ、12棟（86％）から出土している点が注目される。多くは出土の際に破砕してしまうが、製品数点を確認している。鉄製品は刀子・鉄鏃？・刺突具？ほかがあるが、量は少ない。貝類は平安時代の住居跡２棟に廃棄されていたもので、１棟ではいくぶん厚い層を形成していた。

３．ま　と　め

久慈市教育委員会が数年前に遺跡の全域に及ぶ試掘調査をしている。その結果、縄文時代早期から平安時代までの複合遺跡であることが知られていた。今回の調査は、広大な遺跡の一部分を発掘したにすぎないが、内容的にそれを裏付けることができた。

縄文時代では、前期前葉と推定される住居跡が検出され、なかに相対的に大型の住居跡１棟を含む点が集落のあり方を考えるうえで注目される。また、自然面を残した剥片が多量にあり、石器製作と原材料の入手との関係を知る資料としても良好である。試掘調査で確認されている古代の住居跡は80棟前後である。久慈市の遺跡としての独自性は琥珀や貝類の存在などの一部に見ることができる。居住地として反復利用される背景を検証してゆく必要があろう。


遺構未検出区
104
105
106
107
108
N
縄文時代
古墳・奈良時代
平安時代
ピット
落とし穴
0
10
20
30M

平沢Ⅰ遺跡遺構配置図

空中写真（東から）

縄文時代の住居跡

古墳時代の住居跡（焼失）

縄文時代のフラスコ形ピット

平安時代の住居跡（焼失）

平沢Ⅰ遺跡　遺構

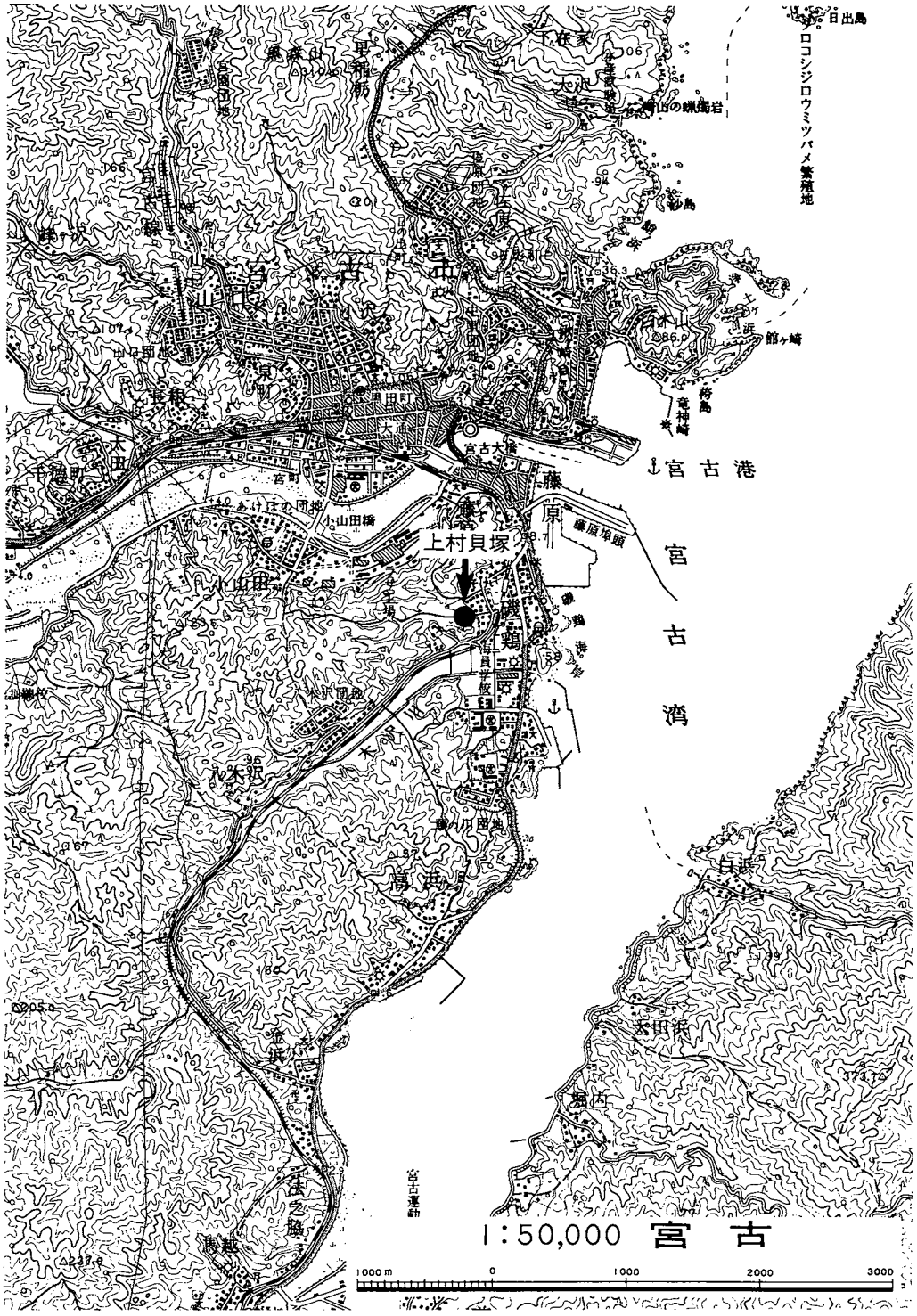
縄 文 時 代

古　　代

平沢Ⅰ遺跡　出土遺物

（2） 上村貝塚遺跡

所在地	宮古市大字磯鶏第3地割字上村186
委託者	宮古市
発掘調査期間	昭和62年6月1日～9月30日
調査対象面積	2,500㎡
発掘調査面積	2,500㎡
遺跡番号・略号	ＬＧ34—1086・WM—87
調査担当者	小田野哲憲・高橋義介
協力機関	宮古市教育委員会


上村貝塚
宮古港
宮古湾
藤原
長根
小山田
高浜
白浜
玉田浜
堀口
1:50,000 宮古
1000 m
0
1000
2000
3000

上村貝塚遺跡位置図

1．遺跡の立地

上村貝塚は、国道45号の西側、東日本旅客鉄道山田線磯鶏駅の西南500mにあり、海岸までの直線距離は約700mである。遺跡のある一帯は、磯鶏地区の平地をのぞむ八木沢段丘と呼ばれる丘陵地に位置し、標高は17.5〜23.5mである。上村貝塚の近辺には小沢田貝塚、磯鶏蝦夷森貝塚が知られている。特に蝦夷森貝塚からは昭和40年代に縄文時代の屈葬人骨一体が発見されており、これら磯鶏地区一帯は重要な貝塚遺跡群として捉えられる。

2．調査の概要

今回調査した区域は上村貝塚の約半分であり、貝の出土は予期したより少量であった。むしろ隣接する西側の畑地の方が、より貝が多く散布しており、獣骨・魚骨なども豊富に採集できる。貝塚の主体はむしろ西側にあるものと推定される。調査区域の東側はすでに宅地化されているが、道路のノリ面から４棟以上の竪穴住居跡(平安時代)が検出されており、遺跡が広がっていた可能性が高い。

大まかにいうと、今回の調査区内では北側の高い部分には縄文時代中期の竪穴群が集中し、中ほどには弥生時代初頭の竪穴群があり、東側には奈良・平安時代の竪穴住居跡が集中する傾向が認められた。南側の低い部分は数箇所に炉、集石、焼土が確認されたのみである。

＜竪穴住居跡＞

縄文時代の住居跡は11棟で１棟が前期、他はすべて中期である。平面形は円形、隅丸、楕円形で中期のそれは一箇所に集中して切り合いかつ斜面に構築されている例がほとんどで、全形を知り得るものは少ない。このうち１棟の床面には薄い貝層が伴っていた。また祖型的な複式炉をもつ例もある。

弥生時代の住居跡は５棟で、いずれも本県の弥生時代初頭に属し、沿岸地域では初めての発見である。平面形は隅丸方形に近く、柱穴は６ないし９本と考えられる。中央部に石囲炉が設けられているが、複式炉の形状を示すものが１例ある。

古代の住居跡は奈良時代２棟、平安時代15棟で、奈良時代の２棟は地点が大きく離れているがいずれも遺跡の北側にある。土取りで削除された部分にさらに存在していた可能性がある。カマドは２棟とも西側にある。平安時代のものは小型でほぼ正方形であるが、１棟だけが大型である。カマドは東カマドが多い。

＜土　坑＞

平安時代の大型住居を切って長方形の土坑１基がある。遺物はなく、性格を知り得る材料に乏しいが、墓坑の可能性が高い。

＜出土遺物＞

縄文時代の土器は、90％以上が大木８ｂ～９式期に属するものである。特に住居跡の埋土、床面から出土した土器は復元可能なものが多く発見されている。

石器類は縄文時代に一般的な石鏃、石斧、石匙、石槍、石錐、磨石、凹石、石皿などであり住居跡の埋土から石棒も発見されている。水晶製石鏃も数点ある。装飾品にはヒスイ大珠（垂飾)がある。7.1×4.1×1.2cmの逆三角形型で本県では有数の大きさである。他に有孔の石製品が数点出土している。骨角牙製のものは皆無である。貝層中からの人工品はほとんど無く、刺突具らしい破片が一片出土したのみである。土・石錘も発見されていない。

貝類ではコタマガイが最も多く、次いでカキ、イガイ、チヂミボラ、アサリなど、哺乳類ではシカ、イノシシ、キツネ又はタヌキなど、魚類ではアイナメ、アジ、スズキ、サメ（歯）などがある。

弥生時代は、土器がほとんどである。谷起島式と呼ばれる一群あるいはそれよりやや古い時期に属するタイプで磨消縄文をもつものは少ない。器種は壺、高坏、甕が主体で現段階で蓋らしいものは不明である。弥生時代に特徴的な遺物として石製の紡錘車が出土した。石製のものとしては本県で初めての例である。他の石器類も住居の埋土中から多く出土しているが、一緒に縄文土器も出土しており、所属する時期については今後検討を要する。

古代は土師器、須恵器が主体であり、量的にはそれ程多くはない。カマド周辺、貯蔵穴状ピット内から数点づつ出土している。鉄製品の数は多いが、形状を知り得る資料は少ない。この外に土製紡錘車、砥石、穿孔しているコハク玉、土玉、墨書土師器などが出土している。

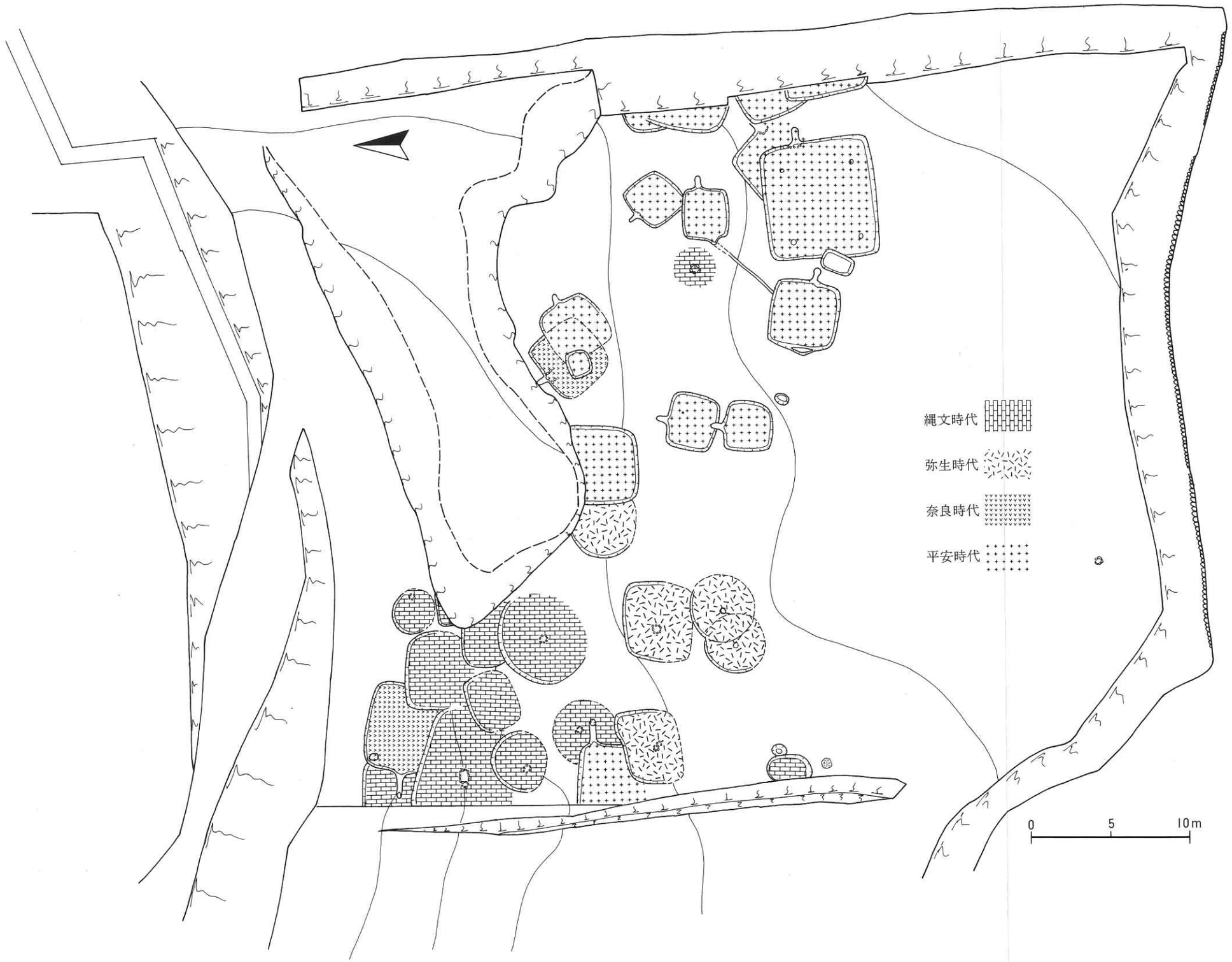
３．ま　と　め

今回の調査により上村貝塚遺跡は縄文・弥生・奈良・平安時代にわたる大規模な遺跡であることが判明した。

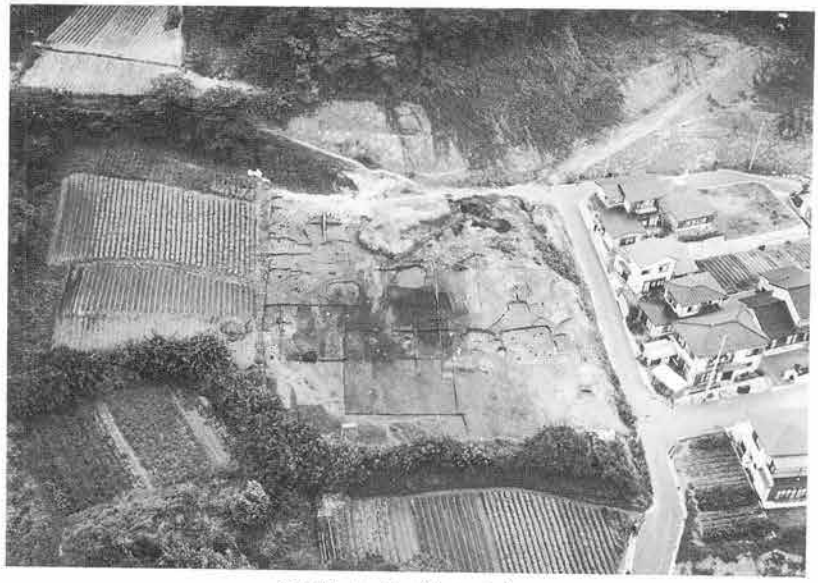
縄文時代については、中期の集落の在り方、海岸に近いのにもかかわらず漁労関係の遺物が少ないことなどが今後の問題として提起された。また、改（再）葬人骨の出土は、同時期の葬制を知る上で、貴重な資料となった。

弥生時代については、なによりも複数の住居跡の発見が大きな成果であり、本県の弥生時代の集落について貴重な資料を追加したことになる。また、土器は弥生時代初頭の土器編年に大いに役立つものである。

奈良・平安時代については、特に平安時代の竪穴住居跡が15棟も検出されたことは、この地域の平安時代の生業、律令体制下における三陸海岸の社会的意義など、解明しなければならない多くの問題を提起したことになるものと思われる。



上村貝塚遺構配置図

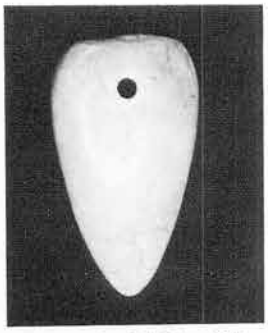


遺 跡 全 景（南から）

縄文時代中期の複式炉

弥生時代の竪穴住居跡

上村貝塚　遺構



ヒスイ大珠(縄文時代)

弥生土器

石製紡錘車(弥生時代)

須恵器(平安時代)

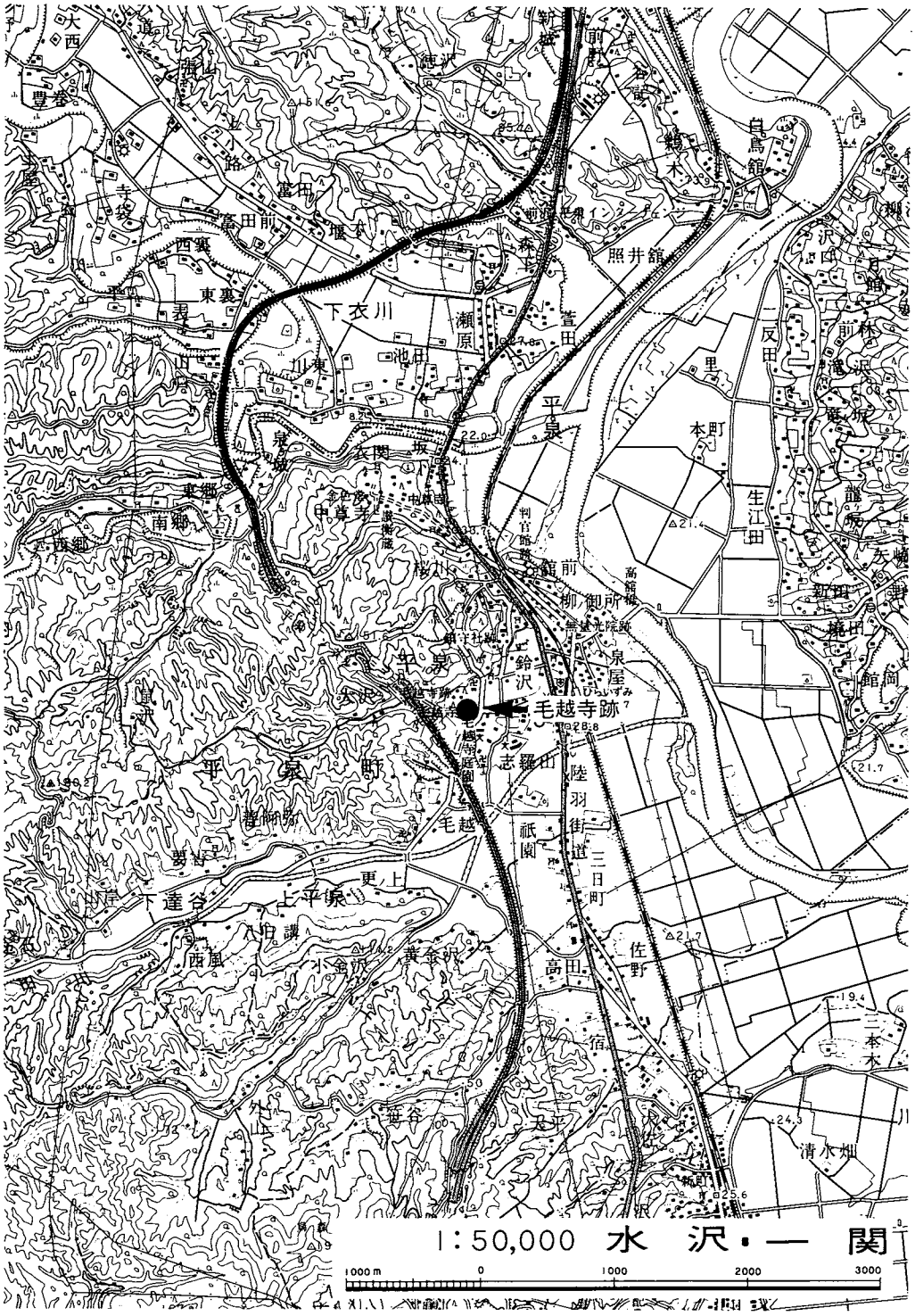
縄文時代中期の改（再）葬人骨群

上村貝塚　出土遺物

Ⅳ 法　人　関　係

(1) 毛越寺跡

所在地	西磐井郡平泉町平泉字大沢58ほか
委託者	宗教法人天台宗別格本山毛越寺
発掘調査期間	昭和62年4月7日～5月31日
調査対象面積	800m²
発掘調査面積	800m²
遺跡番号・略号	NE76—1040・MT—87
調査担当者	小田野哲憲・高橋義介
協力機関	平泉町教育委員会



毛越寺跡位置図

1．遺跡の立地

毛越寺跡は、東日本旅客鉄道東北本線平泉駅の西側0.8kmに位置している。国道４号から主要地方道平泉厳美渓線を西進し、町道大沢線の起点となる北側に所在する。遺跡は北上川の西岸にあたり、支流の太田川左岸に発達した低位段丘に立地している。南側には氾濫平野が広がり、遺跡との比高は５mほどである。また、浄土庭園は国の特別史跡と特別名勝の二重指定をうけている。

2．調査の概要

毛越寺跡の発掘調査は、天台宗別格本山毛越寺の新本堂建立に伴って実施した緊急発掘調査で、昨年度の第１次調査に引き続いての第２次調査である。調査面積は800m²である。今回の調査区域は現本堂の床下部分とその南側にあたり、西側は第１次調査区域と昭和58年に平泉町教育委員会の調査によって石敷遺構が検出された区域に接している。標高は35m～37m前後である。調査の結果、石敷遺構が検出された。

＜石敷遺構＞

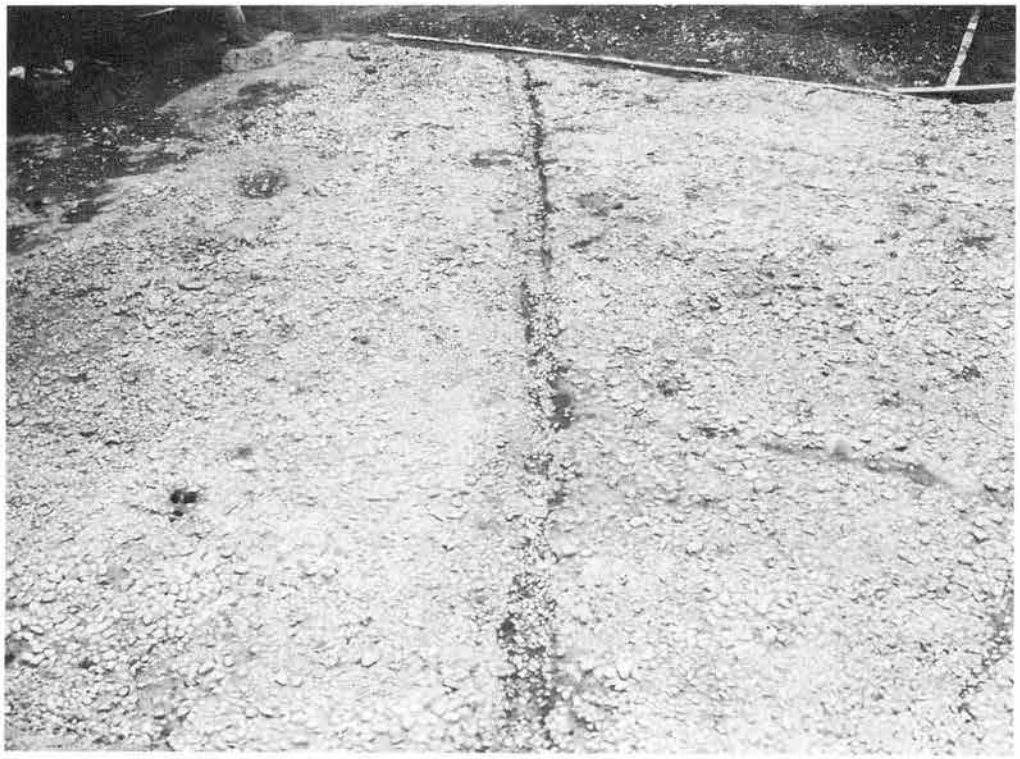
石敷遺構は、調査区域の南側を除いた全域に広がり600m²に及んでいる。昨年の第１次調査分を含めると900m²ほどになる。径１cm～15cm大の川原石が単層をなして敷設されている。石敷面には、径２cm～５cmほどの川原石が密に敷設された通路状の部分や幅30cm前後の浅い溝跡が東西方向に認められる。全体に調査区域の南側は径10cm大の石が多く、区画されたみきり状の配置が見られる。また、南東側の旧神楽台付近は高位となり粗略な敷設である。昨年調査区域の南端で発見された大溝跡は今回検出されなかった。

＜出土遺物＞

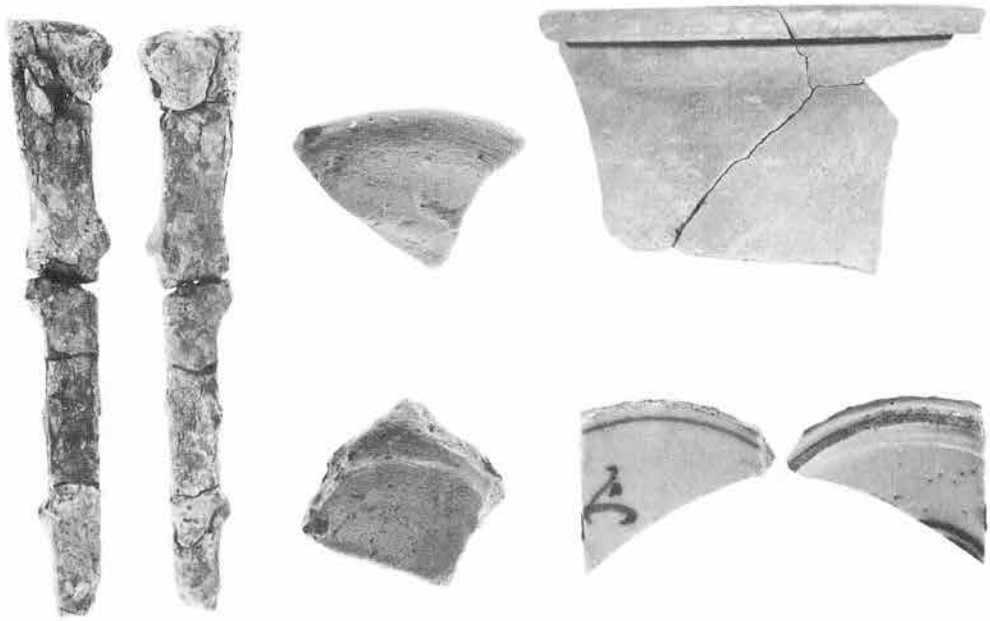
遺物は、旧表土上面から土師質土器数片と鉄釘のほか、最近の陶磁器破片を若干出土しているのみである。

3．ま　と　め

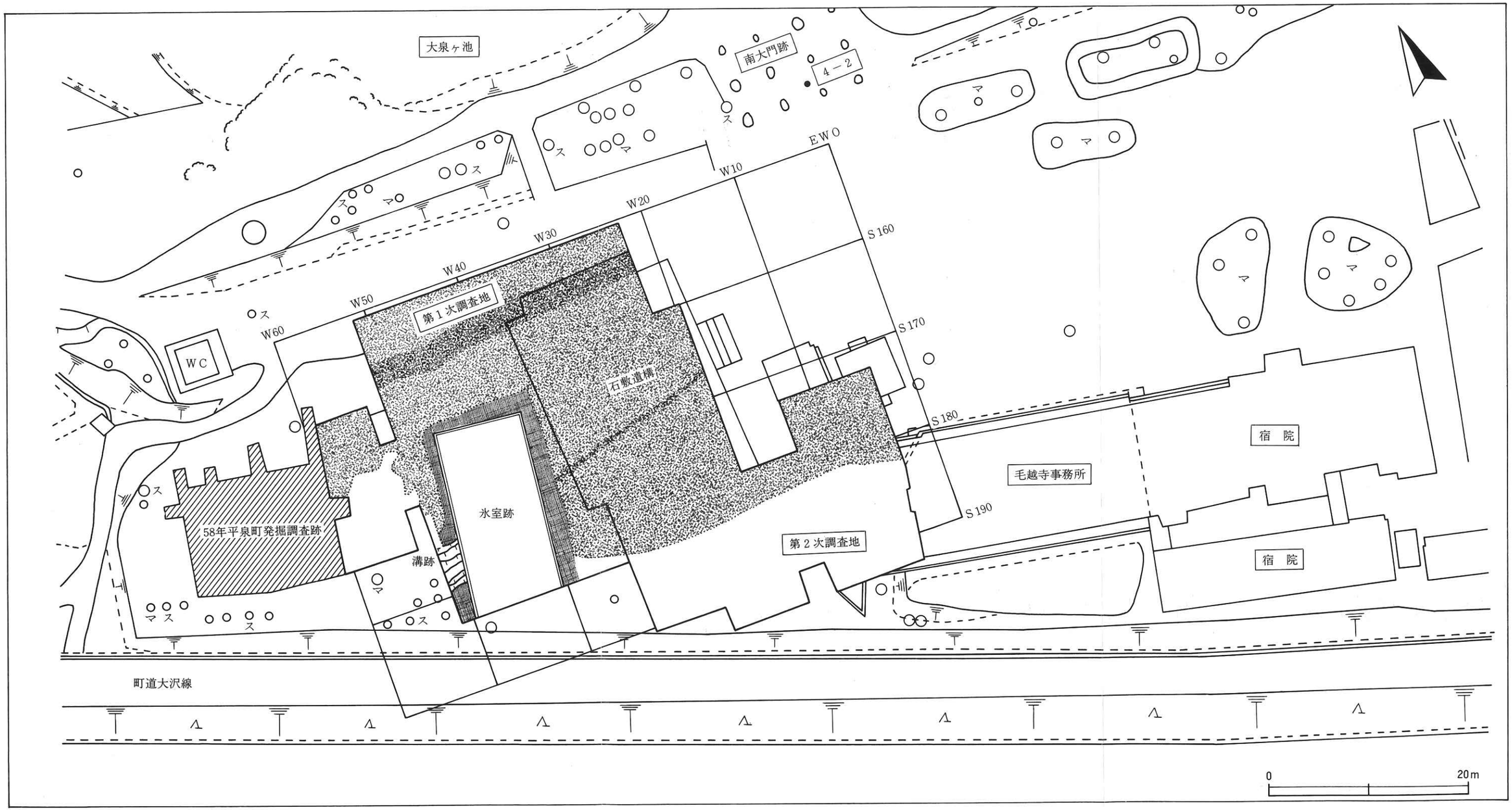
第１・２次調査の結果、石敷遺構は昭和58年に平泉町教育委員会の調査によって発見された石敷遺構と一連のものであることが明らかになった。これらは南大門跡の西側築垣外側に敷設された石敷の一部と考えられる。



石　敷　遺　構



毛越寺跡　石敷遺構・出土遺物


大泉ヶ池
南大門跡
4－2
EW0
W10
W20
W30
W40
W50
W60
S160
S170
S180
S190
第1次調査地
石敷遺構
氷室跡
溝跡
58年平泉町発掘調査跡
WC
第2次調査地
毛越寺事務所
宿院
宿院
町道大沢線
0
20m

毛越寺跡遺構配置図

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所　　長	及川昌二
副　所　長	宮　英一

〔管　理　課〕

課　長(兼)	宮　英一
課長補佐	伊藤吉郎
主　事	立花多加志
嘱　託	似内喜兵
運転技士兼技能員	佐藤春男

〔調　査　課〕

課　長	昆野　靖
主任文化財専門調査員	小田野哲憲
〃	三浦謙一
〃	工藤利幸
文化財専門調査員	佐々木嘉直
〃	平井　進
〃	中村良一
〃	田村壮一
〃	光井文行
〃	玉川英喜
〃	佐藤嘉広
〃	中川重紀
〃	高橋義介
〃	酒井宗孝

〔資　料　課〕

課　長	新田和雄
主任文化財専門調査員	高橋与右エ門
文化財専門調査員	田鎖寿夫

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第126集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(昭和62年度分)

昭和63年3月25日　印刷
昭和63年3月30日　発行

発行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020　紫波郡都南村大字下飯岡11字高屋敷185
電話 (0196) 38－9001～2

印刷　川口印刷工業株式会社
〒020　盛岡市本町通2丁目13番8号
電話 (0196) 23－3351

©(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1988